

法華經の智慧 第一卷

——二十一世紀の宗教を語る

方便品③ 「諸法実相」の心——現実変革への限りなき挑戦……………206

方便品④ かけがえのない個々の生命……………241

索引（語句索引、御書引用索引、法華経引用索引）

＊

凡 例

一、本書は、大白蓮華連載の「法華経の智慧」（一九九五年二月～十月）九回分を「法華経の智慧 第一巻」としてまとめたものである。

二、御書のページ数は「新編日蓮大聖人御書全集」（日亨上人編 創価学会発行）による。

三、法華経のページ数は「法華経並開結」（聖教文庫）による。

四、文中、説明が必要と思われる語句には、＊印をつけ、説明を付した。

五、巻末に、語句索引と御書、法華経からの引用文の索引を付した。

「哲学不在の時代」を超えて

齊藤 「法華經の智慧——二十一世紀の宗教を語る」と題して、池田先生に、多角的に語っていただくことになりました。

法華經が現代に送る光、豊かな智慧の大海を、私たちも学んでまいりたいと思います。特に、この内容は、新入会の方々や、海外のメンバーも含めて、仏法に関する理解を深めていただけるものになればと願っております。

よろしく、お願いいたします。

池田名誉会長 こちらこそ、よろしく。

いよいよ、本格的に「二十一世紀の宗教」を語るべき時代に入りました。今、人類は共產主義崩壊、哲学不在の時代の彼方の山に目を向けながら、新しい大哲学を求めている。

つまり、精神の空虚を充実で満たしてくれる何かを求めている。疲れた生命を、はつらつと希望に蘇らせてくれる何かを求めています。

自分が、また社会が「どこへ」「何のために」進めばよいのか。それを教えてくれる智慧を求めている。

あるいは、戦乱の旧ユーゴ諸国で。

あるいは、飽食の先進国の社会で。

あるいは、混乱の旧・社会主義国で。

あるいは、貧困と戦う第三世界で。

「経済の成長」を至上命令にしてきた現代にあつて、より大切なのは、『人間』が根本、つまり「人間の成長」ではないのかと気づき始めています。

「知識の飛躍的增加」が進む情報社会にあつて、知識を使いこなすための「智慧の飛躍的増大」が、至急になされなければならないと理解されつつある。

何かが間違っている。何かが必要だ。科学でも幸福はない。社会主義でも資本主義でも救われない。どんなに会議を開いても、道徳を訴えても、心理学を講じ、哲学を論じて

も、何かが欠けている。

今、人類の心の情景は、このようなものではないでしょうか。

『星の王子さま』で知られるサン＝テグジュペリは言っています。

「われわれがどこかで道をあやまつたということを理解しなければいけない。人間全体は以前よりも豊かになっている。よりおおくの富と時間を享受している。だがしかし、うまく規定できぬ本質的なもののが欠けているのだ。自分を人間として感じる事がしだいに稀になっていく。われわれの神秘的な大権のうち、なにかがなくなってしまったのだ」(『人生に意味を』、渡辺一民訳、みすず書房)

人間は「道をあやまつた」というのだ。

人間は「どこへ」「何のために」――。

法華經の從地涌出品(第十五章)では、無數の地涌の菩薩が大地から涌出してきたときに、弥勒菩薩が質問します。

「是れ何れの所より来れる 何の因縁を以ってか集れる」(法華經並開結。以下、法華經と

その場にいた人々の疑問を代表した質問ですが、地涌の菩薩は「どこから」「何ゆえに」集まつて来たのかと聞いたのです。

齊藤 その問いについて、釈尊は「よくぞ、このような「大事」を問うた」と弥勒を称えています。そして、この問いへの答えとして、如来寿量品（第十六章）という法華經の最重要の法門が説かれています。

名誉会長 本当に重要な問いです。その法門上の深義は、いずれ論ずるとして、敷衍していえば、人間は「どこから」、そして「何のために」この世に生まれたのか、という問いにも通じるのではないだろうか。

遠藤 池田先生が、学会の座談会に初めて出席された時の模様が、小説『人間革命』には描かれています。戸田先生の前で詠まれた即興詩を思い出します。

そこには

「旅びとよ／いつこより来り／いつこへ往かんとするか

月は沈みぬ／日 いまだ昇らず

夜明け前の混沌に／光 もとめて／われ 進みゆく

心の 暗雲^{あんうん}をはらわんと／嵐^{あらし}に動かぬ大樹^{たいじゆ}を求めて
われ 地より湧^わき出^いでんとするか」

とあります。

名誉会長 戦後の動乱期^{どうらんき}を生きる青年として、人生の意義^{いぎぎ}を、私は切実^{せつじつ}に求めていた。
そして私は、戸田先生と出会い、軍国主義に反対して投獄^{とうぎよく}された人物ならば信用^{しんよう}でき
る、と直感^{ちよくかん}したのです。戸田先生との出会いが、私にとっての法華経との出会いになりま
した。

人は「どこから」そして「どこへ」「何のために」——この問いに答^{こた}えることこそ、人
間としての、一切^{いっさい}の営^いみの出発点^{いとな}となるはずです。

須田 それに明快^{めいかい}に答^{こた}える思想・哲学・宗教は、どこにあるのか——これが課題^{かだい}です
ね。社会が戦争で「焦土^{しょうど}」であつても、心に「哲学」が生きていれば、未来^{みらい}は明^{あか}るい。
それを池田先生は証明^{しょうめい}されたと、私には思えます。

齊藤 それが法華経の哲理^{てつり}でもありますね。

須田 しかし、社会が豊^{ゆた}かであつても、心が「焦土」であつては、未来は暗^{くら}い——。

名誉会長 その通りだ。それで思い出したのだが、現代人の心象を「心のなか爆撃を受けた」と表現した人がいます。

ナチスの強制収容所の体験で有名なフランク博士です。

遠藤 『夜と霧』（原題「強制収容所における一心理学者の体験」）の著者として高名ですね。

名誉会長 博士は「現代は、あらゆる熱情が乱用されたあげく、ありとあらゆる理想主義が打ち砕かれた時代なのです。じつさい、ほんとうなら、若い世代にもっとも理想主義と熱情を求めなければならないのに、こんにちの世代、こんにちの青年には、もはやどのような理想像もないのです」と語られています。（V・E・フランク『それでも人生にイエスと言う』、山田邦男・松田美佳訳、春秋社）

「生きる意味」を失ってしまった、というのだ。

遠藤 強制収容所は、それこそ「人間の尊厳」も「生きる意味」も破壊し尽くされるような環境であつた。それでも、「人間」として生き抜いた人もいたのですが――。

博士は、平和の時代になつても、別の意味で、目に見えない強制収容所が人類を取り巻いているのではないかと、示唆されているのでしょうか。

名誉会長　そうとも言えるだろう。

また、現代を支配しはいしている気分を一口ひとくちで言う、それは「無力感」むりよくかんだと言った人もいる。

ともあれ、だれもが、このままではいけないと思っている。しかし、政治も経済も環境の問題も、すべて自分の手の届かないところで決定され、動かされている。自分一人が何かしたところで、大きな機構の前に何ができようか——この「無力感」が、更に事態を悪化させる悪循環あくじゆんかんをもたらししているのです。

この無力感の対極にあるのが、法華經の一念三千の哲学であり、実践なのです。一人の人間の「一念」が一切を変えていくというのですから、一人の人間の可能性と尊貴きさを、極限まで教えた思想とも言えるでしょう。

齊藤　人間は、無力で哀れな存在ではないことを強調しなければなりません。

池田先生と親交のあるロシアのヤコブレフ氏は「ペレストロイカの設計者」と言われる方ですが、「ロシアに明日はあるか」を展望されて、こう言われています。

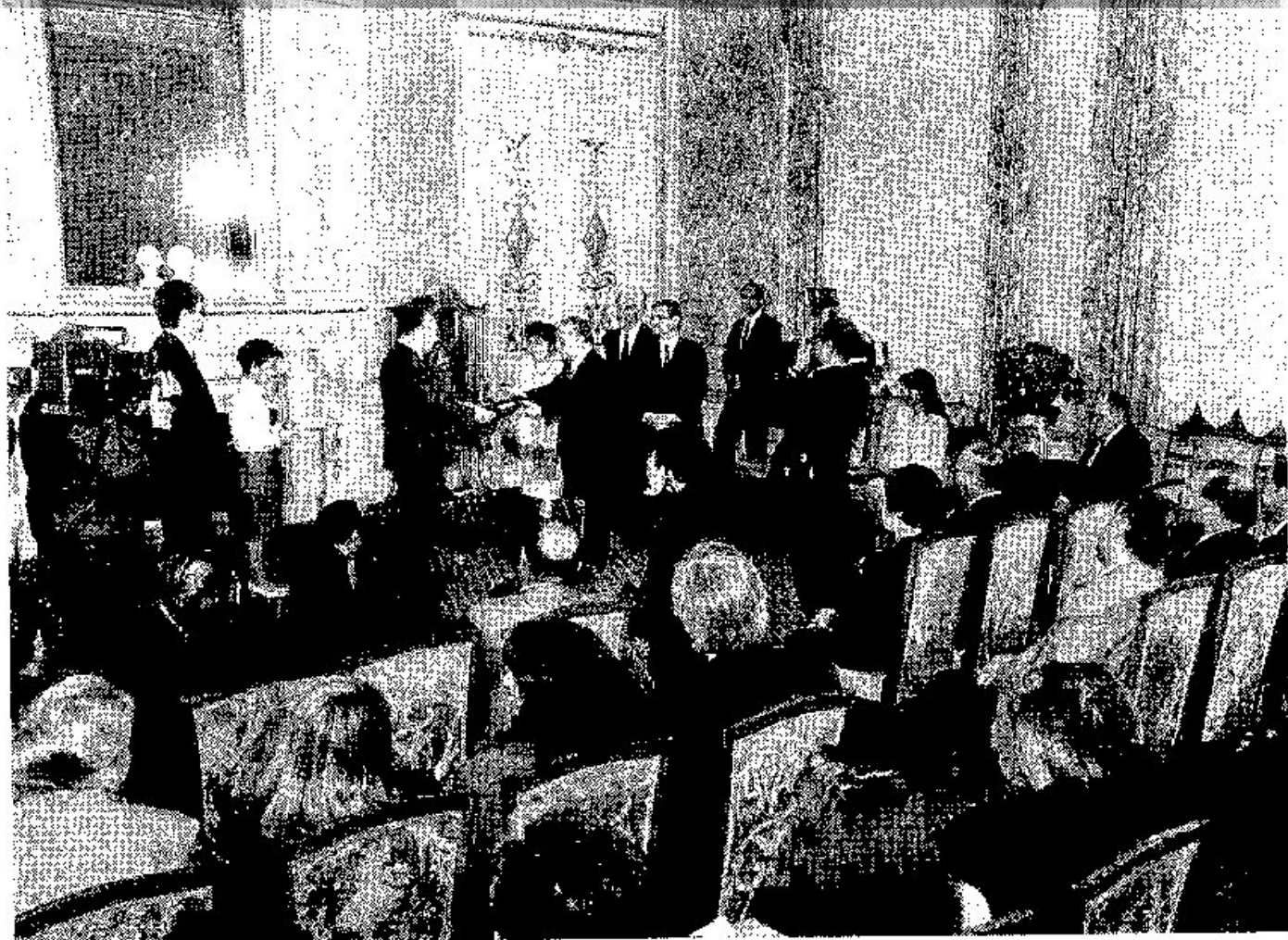
「今日、最もクールな科学的合理主義ですらも、人間一人一人の価値を認めない限り、

人類そのものが破滅するということを我々に教えている」と。(A・ヤコブレフ『歴史の幻影』、月出皎司訳、日本経済新聞社)

名誉会長 ヤコブレフ氏とは、一九九四年も、モスクワでお会いしました。△レオナルド国際賞」の受賞式で。ヤコブレフ氏は「池田博士！ 我が国も、池田博士の行動に見習って、人道的な、また「社会に尽くしていこう」とする広範な動きが、そのような人々が登場してきています」とあいさつした。

氏は、真剣に「ロシアのルネサンス」を求めておられる。その核心にあるのは、「人間的価値の復権」です。

「二〇世紀の残りの数年は、我々が一九世紀半ば以来知っている共産主義の幻想が完璧に破綻する時になるだろう。そうなるに違いない。と同時に、この数年間に、本当の人間的価値の復権が起こるだろう。人間的価値は、これまで『社会的実践』の結果として、誤解、嘘、中傷によって圧倒され尽くしてきたが、やっとそれから解き放たれる時がきたのだ。現在と未来に考えをめぐらせば、今日ぶつかっている危機のなかで最大のものは精神的理想の分野にあるという結論に達するに違いない」(『歴史の幻影』)と。



「レオナルド国際賞」をヤコブレフ氏から受ける池田名誉会長
(1994年5月 モスクワ・国際友好会館で)

齊藤 この「人間的価値」を、最も壮大にして崇高に、うたいあげたのが法華經と言えますね。

名誉会長 そうです。それが私どもの確信です。

かつて神聖ローマ帝国時代に「大空位時代」(一二五四または五六年〜一二七三年)があつた。皇帝が実質的に空位だった時代です。ちょうど日蓮大聖人の御在世當時に当たる。

冷戦後の今は、「哲学の大空位時代」ともいえる。指導的哲学がなくなつてしまった。ゆえに、今こそ私は、古来「経の王」といわれる法華經を語りたいので

す。

遠藤 「諸経の王」「諸経の皇帝」ですね。「大空位時代」は、まさに現実だと思っています。共産主義への信仰はなくなりましたが、かといって「自由」が人を幸福にしているのかは疑問です。

かえって拝金主義、物質主義、快楽主義といった風潮が、全世界的に広まってしまったといえるかもしれません。

須田 同感です。池田先生が会見されたチェコのハベル大統領は、共産主義の抑圧と戦った勇士として有名ですが、その後の社会の変化に、警告を発しています。

「われわれは異様な事態の目撃者となった。なるほど社会は自由を手に入れた。だが、ある意味で、社会は鎖に繋がれていたときより墮落している」と。（夏の瞑想、アンドルー・ナゴースキー『新しい東欧』、工藤幸雄監訳、共同通信社）

そして「道義的にタガの緩んだ社会に自由が取り戻されると……思いつく限りのあらゆる悪徳が、目も眩むばかりにどうと噴き出した」（同）と言っています。

斉藤 極端なナショナリズムも、その一つですね。「統合ドイツ」でも、ネオナチのよ

うな動きは、ごく一部にしても、民族的な「排除」の聲が高まっているようです。

「ベルリンの壁」を、今度はドイツ全土を包囲するように、再び建設すべきだという主張さえ聞かれる昨今です。

名誉会長 その通りである。民族主義の問題は、根が深い。

民族主義を煽って、政治的、経済的、宗教的に利用しようという動きが絶えないし、何より人間の「心」の欲求に関わっているから、その深刻さは当然なことだ。

つまり、自分は「どこから来て」「どこへ行くのか」というアイデンティティー（自己を支える帰属意識）への欲求が、民族主義の根っこにはあると考えられる。

思想、哲学が空白状態であるから、アイデンティティーを民族に求める。思想の「真空」には耐えられないからです。

だからこそ宗教が大切なのですが、宗教がむしろ「分断」を助長しているのが実情ともなっている。

遠藤 国連の明石康氏は、旧ユーゴ紛争の解決に当たっている担当者ですが、ある宗教者会議で、こう語られています。

「旧ユーゴでは、宗教は偏狭な民族主義者に誤用、乱用されている。宗教者がしつかり
して、こうなる前に立ち上がっていたら、それは避けられたろう」と。

名誉会長 明石氏は大切な友人です。旧ユーゴの戦乱は、本当に悲惨だ。現地の人々を
思うと、胸もつぶれる思いです。

まさに「この世の地獄」となっている。ある文学者に、ボスニアの詩人は言つたとい
う。「今日のサラエヴォで書くことができるのは死亡記事だけだ」と。（フアン・ゴイティ
ソーロ『サラエヴォ・ノート』、山道佳子訳、みすず書房）

斉藤 カトリックを信仰するクロアチアの兵士がセルビア正教徒であるセルビア軍の
捕虜になると、正教流に「三本指で十字を切れ」と強制されたといひます。

須田 カトリックでは、二本指で十字を切るそうですね。

斉藤 ええ。その命令を拒否すると、三本でしか十字を切れないように、指に針金を入
れられた、と聞いたことがあります。

それが事実かどうかは別にして、そういう捕虜の写真が、クロアチアの新聞に載るわけ
です。それを見た人は当然、セルビア人への憎しみをかきたてられます。（堅達京子・稲川

名誉会長 宗教は、使い方によつては「悪魔」となる。人々を結びつけるべき宗教が、

利用され、かえつて分断を煽っている。これほどの不幸はない。

どこまでも「人間のための宗教」が根本とならねばならない。「宗教のための人間」では絶対にならない。「二十一世紀の宗教」の、これは根本原則です。

遠藤 モスクワ大学前総長のログノフ博士は、池田先生に学んだこととして、「人間のための社会」であつて「社会のための人間」ではないという信念を挙げておられます。

かつてのソビエト社会で、これは衝撃的な思想であつた、と。まさに「人間的価値の復権」です。

名誉会長 これが法華經の法理だ。これが仏法の人間主義なのです。

サラエヴォのある少女は、戦争が始まつてから一年半、家から出ることもできず、爆撃が続くなか、自分の部屋でさえ危険で入れなかつたという。トイレと廊下が比較的安全なので、そこで一カ月も暮らした。水もない。電気もない。周りは爆撃でバラバラになつた人体が吹きとび、冬はマイナス十七度のなかで薪もストーブもない。コップの水も凍つて

いる。手も顔も洗えない。水くみ場にいくと狙撃される危険がある……。

また、同じような状況のなかで、ある十七歳の少年は語っています。

「ぼくにはいろんな夢があつたけど、戦争がすべてを奪つてしまった」「でも、いつになるかわからないけれど、今後、人を愛せるのなら、そういう能力がまだ残っているのなら、誰かを愛したいと思う。一番大切なことは、何が起ころうとも『人間』でいることだ。『人間』であり続けることだ……」（『失われた思春期』）

二十一世紀といつても、「平和」が大前提です。平和なしには、一切が不毛です。ゆえに二十一世紀の宗教は、平和を生み出す宗教でなければならぬ。

そして「平和学の父」ガルトウング博士が結論されたように、仏教こそ最も平和的な宗教なのです。その仏教の骨髓が法華経です。

遠藤 「何が起ころうとも『人間』でいることだ」という叫びは、状況が状況だけに、切実に胸に迫ってきますね。

日本は一見、平和ですが、はたして「『人間』であり続けること」ができているのかどうか、大いなる疑問を持つのは、私一人ではないと思います。

名誉会長 そうだね。だからこそ、いずこであれ、「一人の人間」の蘇生から出発することが必要となる。それが「人間革命を通しての社会革命・地球革命」です。その法理が、法華経です。その行動が、法華経の智慧と言いたい。

須田 こうして概観するだけでも、現代という変革期が、行き詰まった「哲学の大空位時代」であり、カオス（混沌）であることがわかります。ますます地球は狭くなっているのに、ますます「どこへ行くべきか」わからなくなっている。今こそ人類をリードする根本規範が必要になることは当然のことです。

名誉会長 実は法華経は、そういう大変革期にこそ輝きを放つ經典なのです。

法華経が説かれた時代も、そうであつたようだ。

釈尊当時のインドは、都市の発達によつて、人々が部族という分断の枠を超え、新しい結びつきのなかで「共生」しなければならない時代になりました。

そうしたなか、思想的には唯物論から快樂主義、苦行主義に至るまで、混乱の極みに達していた。

須田 いわゆる、有名な六師外道が代表ですね。

名誉会長　そうです。こういう一大転換期に、人類を結ぶ新しい統合の原理を教えたのが、釈尊の教えであった。そして、その精髓が法華経です。

後の中国の天台大師も、日本の日蓮大聖人も、さまざまな宗教が入り乱れ、人々が何を抛りどころとしてよいか、わからなくなっていたときに、「法華経」を掲げて、時代の課題に真っ向から立ち向かわれた。

法華経は、いわば「精神の戦国時代」を突き進みゆく「統合の旗印」だったのです。

須田　その点で思い出すのは、ハワイ大学宗教学部長のジョージ・タナベ博士の言葉です。同学部は、東西の比較宗教学では世界屈指とされています。博士は述べています。

「法華経は普遍性、永遠性を説いた教えとして、仏典の最高峰に位置しております……

法華経が時代を超え、文化を超えて、世界の人々に共感をもつて受け入れられたという事実、現代に生きる私たちに多くの示唆を与えてくれます。すなわち、多文化の融合、多様性の統合が叫ばれている現代、まさに異なる文化に生きる人々の心を引きつけ続けた法華経の秘けつを探ることによって、私たちは統合への原理を見いだすことができるのではないか、ということですよ」と。

また「法華經の『一乗』」とは、『世界は一つ』の意義であり、普遍の法のもとにすべての差異が生かされ共存する、とのイメージを私たちは普遍の法である法華經から学び取らなければならぬ」と。

名誉会長 まさに、法華經の現代的意義を的確に示しておられる。「法の華の經」——法華經は「經の王」です。王とは、他を否定するのではなく、一切を生かしていく立場です。

日蓮大聖人は仰せです。

「所詮・万法は己心に収まりて一塵もかけず九山・八海も我が身に備わりて日月・衆星も己心にあり、然りといへども盲目の者の鏡に影を浮べるに見えず・嬰兒の水火を怖れざるが如し、外典の外道・内典の小乗・権大乘等は皆己心の法を片端片端説きて候なり、然りといへども法華經の如く説かず」（御書一四七三）と。

法華經以外の哲学は、生命の法の「片端片端」すなわち部分観を説いたにすぎない。それらは「部分的真理」ではあっても、それを中心とすることは、生命全体を蘇生させることにはならない。かえって、歪みを生じてしまう。これに対し、法華經はそれらを統一

し、きちんと位置づけ、生かしていく「根源の一法」を説いているのです。

それが「法華經の智慧」です。

法華經の寿量品には、「良医の智慧聡達にして」（法華經五〇二頁）とある。名医のごとく、法華經の智慧は、苦しみ悩む人々を救うのです。

遠藤 その智慧で救われた人々について、「心遂醒悟」（法華經五〇五頁）とあります。すなわち深く苦悩していたけれども、「心遂に醒悟しぬ」——心が目ざめて、救われたと。それは、どういう智慧だったのでしょうか。

名誉会長 そう簡単に言えれば、この連載をやる必要もない（笑い）。結論だけ言えば、「自分は永遠の昔から仏であり、永遠の未来まで仏である」という真理を悟ったのです。そう言ったところで、「なるほど、わかりました」と（笑い）急に開けるものでもない。

この真理を、万人にわかりやすく説かんとしたのが、法華經であり、万人が事実の上で体得できるようにされたのが、「末法の法華經の行者」日蓮大聖人なのです。

ともあれ、法華經は、無力感を打ち破る宇宙大の「心の秘宝」を教えている。宇宙の大生命を呼吸しながら、はつらつと生きる人生を教えている。自己変革という真の大冒険を

教おしえている。

法華經には、万人を平和へと包み込む大きさがある。絢爛たる文化と芸術の薫りがある。いつでも「常樂我淨」で生き、どこでも「我此土安穩」で生きられる大境涯を開かせる。

法華經には、邪惡と戦う正義のドラマがある。疲れた人を励ます温かきがある。恐れを取り除く勇氣の鼓動がある。

三世を自在に遊戯する歡喜の合唱がある。自由の飛翔がある。

燦々たる光があり、花があり、緑があり、音楽があり、絵画があり、映画がある。

最高の心理学があり、人生学があり、幸福学があり、平和学がある。「健康」の根本の軌道がある。

「心が変われば一切が変わる」という宇宙的真理に目ざめさせてくれる。

個人主義の「荒れ地」でもなければ、全体主義の「牢獄」でもない——人々が補い合いい、励まし合って生きる、慈悲の淨土を現出させる力がある。

共産主義も資本主義も、人間を手段にしてきたが、人間が目的となり、人間が主人とな

り、人間が王者となる——根本こんぽんの人間主義が「経の王」法華経にはある。

こういう法華経の主張しゆちやうを、仮かりに「宇宙的人間主義」うちゆうてき「宇宙的ヒューマニズム」と呼んではどうだろうか。

齊藤 賛成さんせいです。これまでの、他の生命を犠牲ぎせいにした「人間中心主義」との違いも明確めいかくにできると思います。

名誉会長 二十一世紀を標榜ひやうぼうする、壮大そうだいなる名称めいしやうと私は思う。
ともあれ、大切たいせつなのは「智慧ちえ」である。智慧を体得たいとくすることです。

智慧と知識ちしきの関係は、今後きんごも論じていくことになると思うが、あるイギリスの思想家は書いています。

「知識がありながら智慧がないよりも、知識はなくとも智慧があるほうがよい。それはちやうど、鉾山こうざんをもちながら富とみがないよりも、鉾山はなくとも富があるほうがよいのと同じである」(チャールズ・C・コルトン『ラコン』)

智慧も知識も両方りやうほうあるのが理想りそうですが、根本は智慧である。目的は「幸福こうふく」であり、知識だけでは「幸福」はないからです。

その意味で、二十一世紀を幸福にするには「智慧の世紀」とする以外にない。

そして知識は伝達できても、智慧は伝達できない。自分が体得するしかないのです。実

はそこに、法華経が「師弟」という全人格的關係を強調する一つの理由もあるのです。

遠藤 經典に対しても、頭脳だけでなく、全人格的関わりが絶対に必要ですね。また、

それが現実の道理とします。

須田 戸田先生の獄中での悟達も、法華経への生命をかけた肉薄から生まれたものでし

た。

斉藤 このときの「仏とは生命なんだ」との悟達が、法華経を「過去の古典」から現代

に蘇生させる原点となったわけです。ここに学会の不滅の深さがあると感じられます。

名誉会長 その通りだ。次の章は、この戸田先生の悟達の意義から入っていききたい。

法華経をどう読んでいくのか——日蓮大聖人は御義口伝に仰せです。

「廿八品の文文句句の義理我が身の上の法門と聞くを如是我聞とは云うなり、其の聞物

は南無妙法蓮華経なり」(御書七九四頁)と。法華経二十八品の一文一句が、ことごとく妙法

の当体である自分自身のことを説いている。決して、遠くのことを説いているのではない。

その根本こんぽんの立場から、法華經をどう読むべきかを、大聖人は御義口伝おんぎくでんとして残のこしてくださっている。この御義口伝を、深く、厳格げんかくに拝はいしながら、二十一世紀へ「法華經を語る」
そうだい 壮大な挑戦ちようせんの旅を、読者とともに始めたい。若き諸君の英知えいちを借かりながら。

それは、どこまでも「自分自身が仏ぼとけである」という真理しんりへの旅である。人生とは、自分自身じしんへの永遠えいえんなる旅なのです。

人類じんるいの意識革命いしきの必要を痛切つうせつに語った詩人に、ヘルマン・ヘッセがいたね。彼は今世紀の病やまいを、鋭敏えいびんに感じとっていた。

彼の「書物」と題だいする詩が、私どもの法華經探求たんきゆうにも示唆しさを与あたえてくれます。

「この世のどんな書物も

君に幸福をもたらししてくれはしない

けれども書物はひそかに君をきとして

君自身の中へ立ち返らせる

そこには太陽も星も月も

君の必要なものはみんなある

君が求めている光は

君自身の中に宿^{やど}っているのだから

そうすると君が書物の中に

長い間 捜^{さが}し求^{もと}めていた知恵^{ちえ}が

あらゆる頁^{ページ}から光^ひつてみえる――

なぜなら今その知恵は君のものとなつてゐるから」

（『生きることについて』、三浦鞆郎訳・編、社会思想社）

齊藤 私どもも、これを通して、法華經に関して、さまざまな角度^{かくど}から勉強^{べんきょう}をしていき

たい。また、勉強していかねばならない。これが二十一世紀に向かう若き指導者たちの
真髓^{しんずい}の哲学^{てつがく}である、こう言えるよう頑張^{がんば}つてまいります。

生命がキーワードの時代へ

齊藤 一九九五年の阪神・淡路の大震災を通して、「生命の重さ」を、改めて痛感しました。特に、政府の対応の遅さ、無慈悲さには、怒りの声が、世界中から起こっています。なぜ人命を最優先にしなかったのか——と。

遠藤 本当に、その通りだと思います。

生き埋めになった人を救出する場合、わずか一、二時間の対応の遅れが、被災者の生存を左右します。それが分かっているから、各国の救援隊は緊急出動の体制をとってくれた。それを政府は、ほとんど無駄にってしまったのです。

だれが、いつ、どう判断し、それを断ったり、保留にしたりしたのか。一切の克明な事実を公表すべきでしょう。国民、なかんずく被災者には、それを知る権利があります。

須田 池田先生と会われたハワイ大学のマーセラ博士（臨床心理学研究所長）も、こうした救援メンバーの一人だとうかがいました。心理学の専門家が、災害時に緊急出動する。そんなところにも人間への視点を感ずります。

大震災の時、博士も即座に体制を整え、いつでも向かえる状態で待つておられた。しかし結局、日本政府からの要請がなく、出動できなかったそうです。

名誉会長 マーセラ博士から、そのお話は、うかがいました。

被災者のことを思うと、本当に胸が痛みます。毎

戸田第2代会長が獄中で使われた牛乳瓶のふたで作った数珠

日のように「死者五千何人」と報道されていますが、人間を「数」で計ることはできません。五千人亡くなったから、悲劇なのではない。亡くなったの方、かけがえのない父であり、母であり、わが子であり、家族であり、友であったのです。へその後の掌握により、犠牲者は六千人を超えた。

戸田先生も二十三歳の時に、幼いお子さんを亡く

された。三歳さいの女の子でした。

「冷たい死骸つめたいしかいを一晚抱ひとぼんだいて寝ねて泣なきました……そのときぐらい世の中に悲かなしいことはなかつた」。三十年以上たつた、ある質問会しつもんかいの折おりにも、話しながら、涙なみだぐんでおられた。

「そこで、もし自分の妻つまが死んだら……と私は泣きました。その妻も死にました。もし母親ははおやが死んだらと思おもいました。それは私としても、母親が恋こいしいです。今度はもう一歩いっぽつつこんで、ぼく自身が死んだらどうしようと考えたら、私はからだがふるえてしまいました」

「それが牢ろうに入はいって、少しばかりの経典きやうてんを読よませてもらつて『ああ、よくわかりました』と解決かいけつしたのですが、死の問題もんだいは二十何年間なんねんかんかかりました。子供こどもを亡なくして泣きすごすと、妻の死も自分自身の死もこわかつた。これがようやく解決できたればこそ、戸田は創価学会の会長になつたのであります」と。

ともあれ、災害時さいがいじの対応たいおうには、その国の「文化」が表あらわれる。「生命を大切たいせつにする社会」か否いなかを、はつきりと映うつし出してしまします。

齊藤「生命」を最高の価値かちとする時代をつくらなければなりません。

名誉会長 そのためには、「生命」の素晴らしさ、尊さ、無限の可能性を説き明かした哲学が絶対に必要です。先ほど戸田先生が「牢で経典を読まれた」話をしましたが、先生の「獄中の悟達」の焦点も、そこにある。

須田 ここでは、その「獄中の悟達」の意義から、うかがいたいと思います。

遠藤 私は、高校生の時に、聖教新聞に連載されていた池田先生の小説『人間革命』第四巻、「生命の庭」の章を読んで、初めて戸田先生の悟達について知りました。

戦時中の拘置所の中で、すさまじい気迫で法華経の真髓を求め抜かれた厳肅なドラマ。法華経について、ほとんど何も知らなかった私の心にも、深く残りました。

名誉会長 一言でいえば、戸田先生の悟達は、創価学会こそ日蓮大聖人の仏法の継承者であることを明らかにした、記念すべき瞬間です。

今日の広布進展の原点であり、仏教史上、画期的な出来事であったと、私は確信しています。

難解な仏法を現代に蘇生させ、全民衆のものにしたのです。

私も、若き日、戸田先生から直接、その内容を聞かせていただいた。学会の宗教的・哲

学^{がく}的^{てき}核^{かく}心^{しん}が、ここにあると思^{おも}つた。

それはそのまま、日蓮大聖人の仏法の極^{ごく}説^{せつ}に通^{つう}ずる。

戸田先生の悟^ご達^{だつ}は、人^{じん}類^{るい}の行^ぎき詰^づまり打^だ開^{かい}への「道」を開いたと、私は信じている。この「道」を、あらゆる次^じ元^{げん}へ広げていくのが弟^{でし}子^しの使^し命^{めい}です。

須^す田^だ 法華経身読^{しんどく}のドラマは、昭和十九年の元^{がん}旦^{たん}、軍部権力^{ぐんぶくわんりき}の手によつて獄中^{ごくちゆう}の身^みにあつた戸田先生が、法華経を読み切ろうと決意されたところから始^{はじ}まりました。法華経が、何度宅下^{たくさ}げしても、不思議^{ふしぎ}と独房^{どくぼう}に舞^まい戻^{もど}ってきたというのです。

戸田先生が当時読まれたのは、返^{かえ}り点^{てん}も、送^{おく}り仮名^{がな}もない白文^{はくぶん}の法華経でした。天台^{てんだい}などの解^{かい}説^{せつ}書^{しよ}もなかつた。戦時中の拘置所^{こうちしよ}という最悪^{さいあく}の環^{かん}境^{きやう}のなかだつた。牛乳瓶^{ぎゅうにんびん}の蓋^{ふた}で作^{つく}つた数珠^{じゆず}を手^てに、一日^{いちにち}一^{いち}万^{まん}遍^{べん}以上の唱題^{しょうだい}を実行しながら、まさに全生命をかけて法華経に肉薄^{にくはく}されました。

遠藤 そして、すでに法華経を三回読み返し、四回目に入^いつた三月初旬^{しよげつしゆん}、法華経の開^{かい}經^{きやう}である無量義經^{むりやうぎきやう}の難解^{なんかい}な文^{もん}について思^し索^{さく}されている時に「仏^{ほとけ}とは生命なんだ」と覺^{かく}知^ちされたのです。

名誉会長 仏法が二十世紀に蘇った瞬間です。

遠藤 その無量義經の文には「其の身は有に非ず亦無に非ず 因に非ず縁に非ず自他に

非ず……」と始まって「三十四の非ず」が繰り返されています（注）。

注

無量義經徳行品には「其の身は有に非ず亦無に非ず 因に非ず縁に非ず自他に非ず 方に非ず 円に非ず短長に非ず 出に非ず没に非ず生滅に非ず 造に非ず起に非ず為作に非ず 坐に非ず臥に非ず行住に非ず 動に非ず転に非ず閑静に非ず 進に非ず退に非ず安危に非ず 是に非ず非に非ず得失に非ず 彼に非ず此に非ず去来に非ず 青に非ず黄に非ず赤白に非ず 紅に非ず紫種種の色に非ず」と三十四の「非」を重ねて仏の身について述べられている。

名誉会長 「其の身」とは仏の身のことです。經文を読めば、そのことは分かる。しか

し、その実体は分からない。

それは「非ず」という否定形を重ねてしか表現できない何かである。どんな「定義」をしても、そこから、はみ出してしまう面をもつ何かである。しかも、どんなに否定形を重ねても、それでもなお厳然と存在する実在である。

だからといって、それを単に言語表現を超えたものとか、不可思議なもの、空なるものとか言つて、仏を超越的なものに祭り上げても、何も分かったことにはならない。戸田先生は「実感」としてつかみたかった。「体得」されたかった。空虚で観念的な理解では、決して満足されなかった。

齊藤 当時のご心境は、戸田先生の小説『人間革命』の主人公、巖さんを通して描かれています。

「巖さんの眼鏡の底の眼は無量義経の徳行品第一を読んで行つて、偈のところへくると、白い焰のように光つて、最早、眼が読み進んでいるのではなく、頭で読んでいなくても、彼はその一字一句へ遅しい身体を叩きつけているのだった」

名誉会長 まさに「身」で読もうとされたのです。

法華経では「一切衆生の成仏」を説く。しからば、その仏とはいかなる実在か。成仏とは何か。これは仏教全体の根幹にかかわる問題です。戸田先生は、この根本問題を深く思索され、追究されたのです。

そして、突如として戸田先生の脳裏に「生命」という言葉が浮かんだ。「仏とは生命な

り」と読み切られた。

「生命」は有に非ず亦無に非ず

因に非ず縁に非ず自他に非ず

方に非ず円に非ず短長に非ず

……紅に非ず紫種種の色に非ず——と。

遠藤 戸田先生は、その時、心に叫ばれています。

「仏とは、生命なんだ！ 生命の表現なんだ。外にあるものではなく、自分自身の命に

あるものだ。いや、外にもある。それは宇宙生命の一実体なんだ！」

斉藤 戸田先生は、「実在として」つかまれたからこそ、「生命」という言葉で表現され

たのですね。

名誉会長 そう。現代人にも分かる、平易で生きた言葉。しかも、深遠な仏法の真髓を

表現し切った「二句万了」の一言です。

「生命」は、現に万人にそなわっている。だから万人が実感できる具体性がある。その

意味でも、戸田先生の悟達は仏法を万人のものとしたのです。

また「生命」には多様性がある。豊かき、闊達さがある。それでいて、法則的であり、一定のリズムがある。この「多様性の調和」を教えたのが一念三千です。その一念三千を体得したのが仏だ。

しかも「生命」には開放性がある。外界と交流し、物質やエネルギーや情報をたえず交換する開かれた存在である。それでいながら、自律性を保っているのが生命です。宇宙全体に開かれた開放性、そして調和ある自由、これが生命の特徴である。

仏の広大無辺の境涯とは、生命のこの自由、開放、調和を、最大限に実現した境涯だとも言える。

妙の三義には「開く」義、「円満」の義、「蘇生」の義がありますが、これこそ「生命」の特質です。そして「仏」の特質にほかならない。

ある意味で、仏典はすべて生命論です。天台の仏法は「己心の中に行ずる所の法門を説く（説己心中 所行法門）」（御書二三九）とされ、大聖人は「八万四千の法蔵は我身一人の日記文書なり」（御書五六三）と仰せになった。

ある時、戸田先生が、笑いながらおっしゃっていた言葉が忘れられない。

『説己心中 所行法門』を色読でできるなり——この天台の確信が、身で分かるのだと。その時、先生は言われた。

「大ちゃん、人生は悩まねばならぬ。悩んではじめて、信心もわかる、偉大な人になるのだ」。病魔と戦う私に、何とか生命力をつけようとされていた。私が二十七歳の時です。感動して私は、日記にも書いた。けれども先生ご自身こそ衰弱が激しく、お体の具合が非常に悪い時だった。それでも先生は青年を、どう励ますか、どうしたら自分と同じ境涯にできるか、常に心を砕いておられた。

斉藤 崇高なご境涯、崇高な師弟のお話だと思います。

名誉会長 ご自身の悟達後の境涯について戸田先生は、ある人に、こうも語っておられた。

「広いところで、大の字に寝そべって、大空を見ているようなものだ。そして、ほしいものがあれば、すぐに出てくる。人にあげてもあげても出てくるんだ。尽きることがない。君たちも、こういう境涯になれ。なりたかったら、法華経のため、広宣流布のため、ちよっぴり牢屋に入ってみろ」

そして「今は時代が違ちがうから牢屋ろうやに入はいらなくてもいいが、広布こうふのために骨身ほねみを惜おしまさず戦たたかうことだ」と。

須田 戸田先生の悟さとりは、単ただに觀念かんねんの理解りかいではなく、生命せいめいそのものの變革へんかくだったのですね。

名誉會長 その通りです。仏法の目的は、結局けつぎよく、境涯きやうがいを變えるところにあるのです。

また生命論せいめいろんといつても、学会がくかいが独自どくじに始はじめたものではありません。日蓮大聖人の仏法ぶつぽう自じ体が生命せいめい哲学てつがくです。これを繼承けいしやうしたのが学会がくかいです。

釈尊しやくそんは、生老病死しやうろうびやうしという人生じんせいの苦くと對決たいけつして、自己じこの内奥ないおうの広大こうだいな世界せかいを開ひらいていっ

た。
天台てんだいもまた、法華經ほんぽんを根本こんぽんとして生命せいめいを内觀ないかんし、そこに覺知かくちしたものを一念三千いちねんさんぜんとして説明せつめいした。

華嚴經けごんきやうでは、心こころと仏ほとけと衆生しゆじやうは無作別むさくべつであると説といているが、天台は、これを借かりて、心こころと仏ほとけと衆生しゆじやうの三つの次元じげんで法華經ほんぽんの妙法みよほうを論ろんじた。「生命せいめい」は、これら三つを統一とういつ的に表ひょう現げんできる、現代げんたい的な言葉ことばでもあります。

そして日蓮大聖人は、生命せいめいの本源ほんげんの当体とうたいを南無妙法蓮華經なむみよほうれんげきであると悟さとられた。それを全ぜん

民衆が覚知し幸福への道を開いていくために御本尊をあらわされ、御義口伝をはじめ諸御書で生命哲学を説かれたのです。

すなわち、生命論こそが仏法の本体であつた。

斉藤 その本体を、どのように人々に知らせていくか。ここに、先哲の苦闘があつたのですね。

名誉会長 そう。しかも、戸田先生の「生命論」は、ただ「論」のための「論」ではありません。科学的な分析と総合を繰り返して出来たものでもない。かといって、科学にも道理にも反しない。

戸田先生ご自身の、真理に対する全人格的な格闘によつて、法華經の奥底から汲み上げられたものです。これこそ「法華經の智慧」と言える。

ゆえに、この「生命論」には、知識を与えるだけでなく、発想の転換を促す力がある。そして希望へ、現実の行動へとつながっている。「生きる力」を湧きたたせる「事の哲学」です。

この哲学を、そのまま実践に移すならば、そこから、無氣力と苦悶の人生を、充実と喜

びの人生へ轉換しゆく、自己変革のドラマが始まる。

そこから、人類が強くなり、豊かになり、賢明になるための、あらゆる次元の革命の歯車が回り始めます。

斉藤 「人間革命」「総体革命」ですね。

名誉会長 「人間革命」とは、成仏の現代的表現です。総体革命とは「広宣流布」です。それらは、あたかも地球が「自転」しながら太陽の周りを「公転」する姿に似ている。自転によって昼と夜があり、公転によって四季がある。

私たちは、太陽の仏法の光に包まれながら、昼もあれば夜もある——無限向上の人間革命史を綴っている。また冬もあれば春もある——広宣流布の春秋のロマンを奏で、進んでいるのです。

ともあれ学会は、生命論に始まり、生命論に終わるといってよい。「仏とは生命なり」——戸田先生の悟達に、創価学会の原点があつたのです。

更に先生は「法華経は何を説かんとしたか」の思索を続けられ、地涌の菩薩として虚空会の儀式に参列している体験をされる。この意義については、後の章で述べることにしよう。

う。

遠藤 かつて宗門が、戸田先生の「悟達」という表現に難くせをつけてきましたが、在家に、悟達されると、よほど都合が悪いのでしよう（笑い）。

斉藤 仏法を信奉しながら、悟つたらいけないというのは、大学に入っても卒業してはいけないというようなものですね（笑い）。ねたみでしかない。

須田 「仏とは生命」——。「生命」という言葉には、科学的で、しかも温かみのある響きを感じます。

名誉会長 そこが実は、戸田先生の偉大なところです。

「仏」というと、人格的な面が表になる。それだけでは、どこか自分とかけ離れた存在というイメージが伴う。また「法」というと、法則とか現象とか、非人格的な面になる。

それだけだと、あまり温かみはない。本来、「仏」も「法」も別々のものではない。「生命」といった場合には、その両面が含まれる。

「生命は万人にある」「生命は尊い」。これは、だれ人も否定できません。「仏とは生命なり」との宣言は、何より、仏法の真髄は「自分自身」にこそあることを、はつきりさせた

のではないだろうか。

齊藤 よく分かります。

しかし、三世さんぜの生命とか、永遠えいえんの生命とか、まだまだ知識ちしきとしてしか理解りかいできていないのではないかと思えるのですが。

生命というものは、具体的ぐたいてきにどのようなように、把握はあくすべきなのでしょう。

名誉会長 戸田先生は、よく言われていた。「三世の生命、永遠の生命といっても、だれも見えたものはいないんだ」と（笑い）。

ただ、その輪郭りんかくだけでも、描き出すことは意味いみがあると思う。みんなの持っているイメージを出し合ってみたらどうだろう。

須田 一つには、次のような考え方もあります。自分のなかに「我が」というものがある。死んでも、その「我」は、ずっと続く。この「我」が生命の実体じつたいであると。

名誉会長 なるほど。そうすると、死んだ後の「我」は、どこにあるんだろう。

須田 靈魂れいこんのように、フワフワしたものではないとは思いますが……。

名誉会長 戸田先生が、こうおっしゃったことがあった。

「我^がという名前^{なまえ}をつけるけれど、我^がというのは宇宙^{うちゅう}のことなのだ。宇宙の生命と君らの生命と違^{ちが}うかというところ、違^{ちが}うのは肉体^{にくたい}と心であつて、生命には変わりはない」

宇宙と人間を、どうしても別のものに考えがちだが、戸田先生は、どちらも生命であることに変わりはないと言われている。

須田 戸田先生の「生命論」では、「宇宙^{うちゅう}自体^{じたい}が生命そのもの」であること、「生命とは宇宙とともに本有^{ほんあり}常住^{じやうじゆう}の存在^{そんざい}」であることが論じられています。

そして「寝^ねては起^おき、起きては寝るがごとく、生きては死に、死んでは生き、永久^{えいきゆう}の生命を保持^{ほじ}している」「ちやうど、目をさましたときに、きのうの心の活動の状態^{じやうたい}を、いまもまた、そのあとを追^おつて活動するように、新^{あた}しい生命は、過^か去^この生命の業因^{ごういん}をそのまま受けて、この世の果報^{かほう}として生きつづけなければならぬ」と。

遠藤 では、例^{たと}えば、一本の大きな木があるとして、それを大宇宙とします。そこから葉や花が、たくさん出てくる。これが個々^{こご}の生命のようなものである——こう言えないでしようか。

名誉会長 同じような質問^{しつもん}をした人がいてね（笑い）。戸田先生は、こう答^{こた}えておられ

た。

「出たものというのではないのです。この水（卓上の茶碗）を大宇宙とするのです。風が吹いてここに波ができるでしょう。波の立ったそれが、われわれの生命なのです。また大宇宙の生命の動きの一種なのです。だから風がなくなれば、また元通りになつてしまふ」と。

海を大宇宙とするならば、現れては消え、消えては現れる波が、われわれの生命である

と。
遠藤 波と海は別々のものではない。波は海の働きの一つだということですね。

斉藤 そういえば、ある英国人が、こういうことを言っていたようです。

「宇宙と『人間たち』との関係は、大洋と『波』の関係と同じである。……ゆえに死として、あるいは空虚な空間とか無として見ているものは、たんに無限に波だつ人生という大洋の、波がしらと波がしらの間の谷にすぎない」

そして「宇宙から取り出されたような、切り離された『あなた』は存在しない」と。

（アラン・ワッツの言葉。ガイ・マーチー著、吉松広延他訳『生命の七つの謎』、白揚社）

須田 宇宙に溶けこんでいるということでしょうか。

名誉会長 そうも言えるかもしれない。

だが、戸田先生は「溶けこんでいるっていうより、宇宙の生命それ自体なので。それ自体が変化を起こしているのだ」と言われているね。

遠藤 生命を川の流れにたとえる人もいます。常に流れ、変化し続けていて、やがて海と一体になると。

名誉会長 なるほど。しかし、生命は、もっと奥の次元にあるものではないだろうか。

戸田先生も「変化をしていく、流れているように感じられる大もとのものなんだよ」とおっしゃっています。

「流れているものでもなければ、止まっているものでもない。虚空のごとし」と。それが生命の本質なのです。

無限の「大宇宙」でもあり、同時に無数の生命体イコール「小宇宙」でもある、ひとつの実在。ダイナミックに変転し続けながら、しかも永遠常住である巨大な生命。この宇宙生命ともいうべき厳たる実在を「仏」ともいい、「妙法」ともいう。万人は、この尊貴な

る實在の当体である。

法華経は「諸法実相」と説く。「諸法」とは、すべての個々の生命事象である。その「実相」すなわち真実の相とは、宇宙生命そのものである。この不可思議の真理を、戸田先生は「仏とは生命なり」と表現されたのです。

これが分かれば、絶対に「殺」の心など起きるわけがない。何かを破壊することは、自分を破壊することになるからです。

齊藤 “三重苦” で有名なヘレン・ケラー女史が、こう言っています。

「日々の空気の中に、私は雨のような空気のほとばしりを感じます。地球上と天上のすべてを結びつけている、みごとな絆が私にはわかります」（『生命の七つの謎』）

視覚・聴覚を失っても、彼女には大宇宙と小宇宙との交流が、はつきりと「見えていた」。そう思えてなりません。

名誉会長 仏法は、五眼（肉眼、天眼、慧眼、法眼、仏眼）を説きます。もしかしたら彼女も、肉眼を超えた、研ぎ澄ました生命の眼で見ていたのかもしれない。

また逆に、生命は、そういう深い次元で迫ってこそ「見える」のではないだろうか。

須田 近代科学も一種の「慧眼」かもしれませんが、科学の傾向性として、生命を種々の部品で構成された機械のように、とらえようと思いました。また生命や人間を、肉体と精神、主体と客体という分離・対立するものに分けて、とらえようと思いました。また、生命の働きを物質に還元して把握しようと思いました。

しかし、こうした機械論、二元論、還元論では、生命の側面は説明し得ても、ダイナミックな全体像は見えてこない。

斉藤 かえって人間や生命を「モノ」化し、生命と生命、生命と環境を対立的にとらえることが定着してしまった。環境破壊や人間による自然の支配を許す温床にさえなったとされていますね。

遠藤 そういった反省から、特に八〇年代以降、登場してきたのが、ニューサイエンス、エコロジーなどの流れです。

例えば、カプラの『タオ自然学』は、二元論や還元主義の超克を説き、現代物理学の最先端と、東洋思想の知恵の共通性を指摘しました。

ワトソンの『生命潮流』は、地球上の生物は個々ばらばらな存在ではなく、関係性の場

のようなもののなかで、共生きようせいしているとしました。

ラブロックの『地球生命圏ちきゅうけん』は、地球自体が一個の巨大な生命体であるという「ガイア仮説がせつ」を提示ていじしています。

こうしたなかで、それまで見落みおとされていた、自然との調和ちやうわ、他者との一体感いつたいかん、平等性せいとうせい、多様性たようせいといった価値かちが注目ちゆうもくされだしました。

名誉会長「万物の相互依存性ばんぶつそうごいそんせい」——仏法でいう「縁起えんぎ」の考え方の一面に光が当てられてきたね。

斉藤 生命現象げんししょうを統一的とういつてきにとらえようとしたゲーテの自然観かんも、再評価さいひやうかされているようです。たとえば、こんな言葉があります。

「叡智えいちある人々のあらゆる頭脳ずのうから機械論的・原子げんし的な考えかたは逐おいだされ、ものの現われすべてが力学りきがくと見え化学と見えるように、いつかはなり、その時にこそ、生命ある自然の神々こうしこうしさがさらにいつそう目の前に展ひらけてくることであらう」と。(日記・一八一

二年)、フオン・ベルタラン・ファイ著、長野敬・飯島衛共訳『生命』、みすず書房)

須田「モノ(物質)」的てきな世界像から「コト(事象)」的てきな世界観への転換てんかんをいう人もい

ます。

名誉会長 「コト」というのは「事象」「現象」であり、まさに「法」そのものです。世界を「諸物」としてではなく、「諸法」として、とらえ始めている。その「諸法」の実相（真実の姿）を説いたのが、法華経なのです。

今、このように、生命観、世界観をめぐって、明らかに、パラダイム（考え方の枠組み）の大転換が見られる。

世界とは「生命」である——戸田先生の悟達への、一次元からの接近といえるでしょう。

遠藤 「モノ」的科学的最先端とも言える分野からも、「コト」的な世界観・生命観を見つめざるをえなくなってきました。

たとえば量子力学。物理学者の中には、究極の粒子を確定しようと努力し続けている人もいるわけですが、素粒子は、どうしても「場の状態」としてしかとらえられない。

また分子生物学のDNA（デオキシリボ核酸）研究。これまではDNAの遺伝情報を、一部分一部分、切り取って、その働きを考察していました。どちらかというと「物質」とし

ての解明かいめいでした。

その基本きほんは変わらないかもしれませんが、最近さいきんは、ヒトであればヒトのDNAの全体ものごと（ゲノム）を解明し、そこに刻きざまれている「地球生命の物語」を読み解とこうとしています。地球に生命が誕生たんじんじようして以来いらいの、生命間の交流こうりゆう、生命の環境かんきようへの対応たいおうの歴史を追おうことができます。

「モノ」に即そくしながらも、「コト」へ「いのち」へ、「物」から「物語」へ——という指向性こうせいが出てきている。ある人は、DNAを「経典きょうてんやバイブルのようなもの」とさえ言っています。

名誉会長 時代は急速きゅうそくに動うごいている。

DNAかんに関して大事だいじな視点してんは、生命それ自体じたいがDNAをつくっていったのであって、DNAが生命をつくったのではないということです。

大宇宙即生命であり、生命即大宇宙です。生命それ自体が、作者さくしやであり、しかも、作品さくひんなのです。

須田 作品といえは、芸術げいじゆつの分野ぶんやでも、現代アートの無機質むきしつてきな美びだけでなく、より生

命的な美し^{うつく}さの志向^{しこう}へ、生命力の復活^{ふっかつ}へという動きがあります。

例えば、人工生命^{じんこう}アート」という、細胞^{さいぼう}などの有機^{ゆうき}的な美しさをコンピューターで描^{えが}こうとするもの。また「ヒーリング・アート」といって、患者^{かんじや}をリラックスさせたり、治^{なご}りたいという気持ちを起^おこさせたりする色彩^{しきさい}や形^{かたち}を探^{さぐ}るものです。

遠藤 経済でも、モノの生産^{せいさん}だけの観^{かん}点^{てん}から、生命の再生^{さいせい}産、すなわち人間的価値^{かち}の再生産へという志向性がみられます。

須田 政治の分野^{ぶんや}でも、パワー・ポリティクスから、ノン・バイオレンス^{ひほうりき}（非暴力）、ノー・キリング^{ふせつしやう}（不殺生）へと、つまり、力による政治ではなく、生命尊厳^{そんげん}の政治へと模索^{もさく}が始^{はじ}まっています。

八六年のフィリピン革命、八九年のチリの民主化^{みんしゆか}、チェコのビロード革命——いずれも無血^{むけつ}のうちに成し遂^とげられました。課題^{かだい}は多いようですが、生命重視^{じゆうし}の基盤^{きばん}をつくりゆく希望^{きぼう}が開けたと思います。

斉藤 これらの革命の推進者^{すいしんしや}である、フィリピンのアキノ前大統領^{ぜんたいりやう}、チリのエイルウィン前大統領、チェコのハベル大統領の、いずれとも、池田先生は語り合われています。

名誉会長 二十一世紀のキーワードは「生命」である。また「生命力」でしよう。

最近、ハベル大統領は、民主主義が人類に活力を与えるには、何が必要かと問いかけています。（九四年九月、米スタンフォード大学での講演「現代の政治状況としての文明」）

大統領は、今日の西側の「民主主義社会」には、「物質主義」があり、「あらゆる種類の精神性の否定」があると指摘しています。

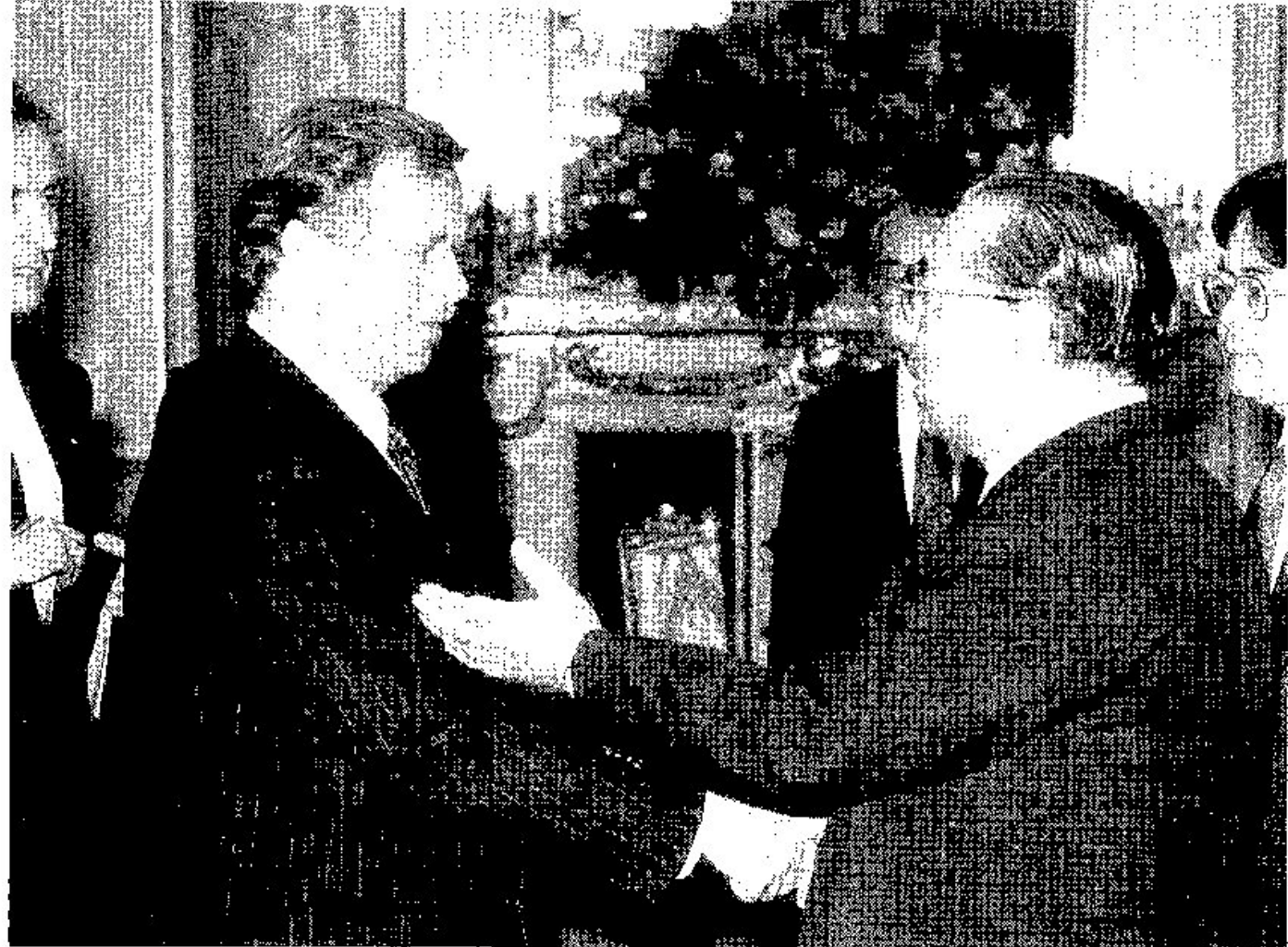
更に「人間を超えたあらゆるものに対する尊大な侮辱」「常軌を逸した消費主義」「永遠性に対する信仰の欠如」等々があると。

しかし、政治的な見地から見て、「民主主義が人類の唯一の希望であり、私たちの生命の内奥にある性質と共鳴すれば、有益なインパクトを与えうる唯一のものである」。

ゆえに民主主義は、もっと広く人類に受け入れられねばならない。しかし、何かを忘れている。その「普遍的な共鳴が得られるはずの民主主義が忘れている次元とは何でしょうか」――。

結論として大統領は、こう述べている。

「民主主義は、我々を超えるだけではなく、我々の内部と我々の間にも、非物質的な秩



池田名誉会長と会見するチェコのハベル大統領
(1992年4月 東京・元赤坂の迎賓館で)

序じよに対する尊敬そんけいを回復かいふくさせなければなりません

「世界的な民主主義秩序みんしゆしゆぎ ちつじよの権威けんいは、宇宙ちゆううの権威が回復されなければ構築こうちくすることはできません」

非物質的秩序ひぶつしつてきとは、仏法の立場でいえば、生命的秩序といえるでしょう。そうした秩序への尊敬、宇宙の権威。これらが回復されねばならないと。

ハベル大統領だいたうりようが指摘しってきされたように、今、世界は、「自由」でありながら「放縦ほうじゆう」ではない、精神性せいしんせいの豊かな社会ゆたを模索もさくしています。と同時に、その基盤きばんとなる確かな生命観、蘇生そせいへの智慧ちえを求めて

います。政治家も、こうした智慧に、真摯に耳を傾けざるをえない時がきている。

斉藤「民主主義」と「生命観」といえば、ゴルバチョフ財団のツイプコ博士は、一九

九五年の年頭に日本の新聞（北海道新聞、一月六日付夕刊）で述べています。

「今こそ、ソ連は完全に崩壊した」と。

「チェチェンの戦争は、ロシアの若い民主主義の敗北を意味するにとどまらない。あの

戦争は、ロシアが道徳的に自己崩壊したことを意味している」

「孤立して、今後の予想もつかぬロシア連邦は、世界で認められ、人気を得ることはあ

るまい。世界が新民主ロシアの代わりに手にしたのは、人間の命の価値が非常に小さく、

国内問題が戦車と大砲の力で解決される国、政府が誰も何も統制できない国であつた。こ

のロシアの袋小路からの出口を考えつくのは難しい。いつたい、出口はあるのだろうか」

と。

遠藤 この戦争で、たくさんのおい命が失われました。駆り出された兵士たちのなかに

は、まだあどけなさの残る青少年たちも多かったといひます。出兵した息子が心配で、い

てもたつてもいられず、ロシアから戦地まで追いかけて行つた母親もいたそうです。

名誉会長　どんな理由をつけようと、この世に「正しい戦争」なんかありません。絶対

にない。苦しむのは、結局、庶民であり、家族であり、母親です。

私も、長兄（喜一）を戦争で亡くしました。昭和二十年一月十一日、ビルマで戦死。二十九歳の若さでした。その報が我が家に届いたのは、一年以上たってからのことです。

「喜一の夢を見たよ。大丈夫、大丈夫だ。必ず生きて帰ってくる、といって出ていった」。終戦後しばらく、母は何度も、うれしそうに話していました。何とか明るく振る舞おうとする気丈さが、かえって痛々しかった。

戦死の報を受け取り、一縷の望みが絶たれたときの母の後ろ姿。そして帰ってきた遺骨を抱きかかえるようにしていたその姿。私は永久に忘れることはできない。

ツイプロ博士の言葉に「人間の命の価値が小さい国」とあったが、人間を、「国家の目」で見るか、「生命の目」で見るかです。「国家の目」は、生命を権力のしもべとして利用しようとし、数や物に還元してしまう。「生命の目」は、相手を、かけがえのない無二の存在として慈しむ。

戸田先生の「仏とは生命なり」との悟達は、「生命こそ絶対にして最高の実在である」

との宣言せんげんでもあった。人間の尊嚴そんげんを失うしなわしめる、あらゆる歪ゆがんだ「目」に對たいする挑戰ちようせんの開かい始しであつたと思う。それこそ仏法ほんげんてきの本源ほんげんてき的な挑戰ちようせんなのです。

遠藤 ツイブコ博士はかせが指摘ししてきしたロシアの「若い民主主義みんしゆしゆぎの敗北はいぼく」も、「非物質ひぶつしつてき的な秩序ちつじよへの尊敬そんけい」(ハベル大統領だいてりよう)すなわち「生命への尊敬」が欠落けつらくしている悲劇ひげきでしょう。

須田 「生命への尊敬」。これは、池田先生がトインビー博士あと編あまれた對談集たいだんしゅうの最後のテーマでもありました。

生命よりもイデオロギーを優先ゆうせんさせる時代に終おわりを告つげなければならぬ、二十世紀を「生命の世紀」としなればならぬとの、並々なみなみならぬ決意けつぎを感じかんしました。

名誉会長 そう。まさにその「生命の世紀」への突とつ破ぱ口こうを開かれたのが、戸田先生だつたのです。そのお心を我わが身みに駆かけめぐらせて、私は世界を回り「人間の尊嚴」を訴うえ続つけてきたのです。

先生の残のこされた「生命論」が、どれほど先見せんけんに満みちた、一大哲理いちだいてりの結晶けつしやうであるか。後世こうせいの歴史れきしは証明しやうめいするでしょう。

民衆に呼びかける経典

齊藤 これまでに、読者の皆さんから、たくさんの方々の反響をいただきました。

各地の座談会の研究発表などでも、さっそく活用してくださっているようで、より多くの方々に喜んでいただくためにも、更に更に真剣に学んでいこうと決意しています。

名誉会長 しっかり頑張つてほしい。自分自身の勉強になるから。後世に恥じないものを残そう。

「日蓮大聖人の仏法」について、世界ではまだまだ知らない人が多い。また、非常に誤解されている場合もある。

須田 日本では、軍国主義思想に利用され、国家主義的とか、国粹主義的とか言われてきました。真実とは正反対に。

名誉会長 そう。そこで、どうすれば大聖人の仏法を、正しく世界に理解させていくことができるか。そのために、「法華経」を語る意味はあるのです。

法華経の真髓を説かれたのが大聖人です。法華経を学ぶことは、大聖人の仏法を学ぶことに通ずる。大聖人の仏法を学べば、法華経も分かっている。表裏一体です。

ゆえに法華経を語ることは、ただ釈迦仏法のみを探究することではない。大聖人の仏法の、はるかな未来を見つめての、壮大な挑戦なのです。

仏法は深い。「言は意を尽くさず」と言うけれども、それでも語っていかねばならない。人々が大聖人の仏法を理解する機縁となり、広宣流布へ、人類の希望へとつながっていく。論調にしたいのです。ある意味で一生の仕事だ。

斉藤 はい。教学部の「魂」として取り組んでまいります。

遠藤 読者からの声をうかがって、すごいなと思ったのは、婦人部、女子部の皆さんの求道心です。学ぶ心、研鑽の意欲。本当に素晴らしいと思いました。

名誉会長 その通りだ。壮年部も男子部も、とてもかなわない（笑い）。純粋です。また粘り強い。特に女性は、観念でなく実感でつかもうとされている。

真剣しんけんに仏法ぶつぽうを学び、語まなつていく功德くどくは、どれほど大きいか。その人は生々世々、舍利弗しやりほつのような大学者だいがくしやの境涯きやうがいになつていくにちがいない。

須田 女性の仏法者の活躍かつやくに、こんな話があります。

仏教しゆつげんが出現しゆつげんしてから百年か二百年たったころ、シリア王の大使たいしであつたギリシヤ人が、インドを訪おもとずれた。そして驚嘆きやうたんしたというのです。

「インドには驚おどろくべきことがある。そこには女性の哲学者てつがくしやたちがいて、男性の哲学者たちごに伍ごして、難解なんかいなことを堂々どうどうと論議ろんぎしている！」

これを紹介しょうかいしている中村元博士はじめめはかせは、さらに次のように指摘ししてきしています。「尼僧にそうの教団きやうだんの出現しよいうかいということは、世界の思想史においても驚おどろくべき事実じじつである。当時のヨーロッパ、北アフリカ、西アジア、東アジアを通じて、「尼僧の教団」なるものは存在そんざいしなかつた。仏教が初めてつくつたのである」と(中村元訳『尼僧の告白』あとがき、岩波文庫)。

名誉会長 哲学をもち、堂々と論議する女性たち——学会では、すでに常識じやうしきだが(笑い)、当時の世界では、珍めずらしかったのでしよう。

斉藤 古代インドでは、女性の地位ちいは奴隷どれいと変わらないほど低ひくかつたそうです。そうし

たなかで、釈尊が女性を入団させた事實は、革命的な行為であつたとされています。

遠藤 今年（一九九五年）は、北京で「世界女性会議」が開かれます。「女性にも、それ

ぞれの分野の主体者として活躍する機会を」との声が、宗教の分野からも起こっています。

たとえばキリスト教では、昨年（一九九四年）初めて、英国で国教会の女性司祭が誕生しま

した。カトリックでも、修道女の地位向上への要求を受けて、論議が高まっています。

名誉会長 すべての民衆を救うために説かれた仏法です。女性と男性に差別はない。出

家と在家の違い、人種、学歴、あるいは権力、経済力など、どんな社会的立場も関係な

い。当然のことです。

仏法は、だれのために説かれたか——むしろ差別され、虐げられ、「最も苦しんだ」

人々をこそ、「最も幸福に」輝かせていく。それが仏法の力であり、法華経の智慧ではな

いだろうか。

遠藤 「女性を差別しない」といえば、法華経を含めて大乘經典には、しばしば「善男

子・善女人」という言葉が用いられています。これは元来、良家の男子・女子という意味

で、在家の男女を示す言葉です。善女人を善男子と並んで重視したことは、大乘教団に

は、たくさんの女性信徒が活躍かつやくしていたことを示しめしています。

名誉会長 そうだろうね。今の学会婦人部の姿を見ればうなずける。

ただし、法華経の「善男子・善女人」は、いわゆる「出家に對する在家」という二分法的な考え方に立った在家ではなく、出家・在家という相對を超えたものではないだろうか。

むしろ仏と同じ仏道、つまり人間自立の道、生命勝利の道を歩むことを「決意した人」、その意味で「善き人」という意味あいが強いのではないかと感じられる。「善」は「心根のよさ」をあらわしているのではないだろうか。

斉藤 そうだと思います。特に釈尊滅後における經典の受持・弘通を勧める個所では、常に「善男子・善女人」と呼び掛けられています。在家・出家を問わず、「決意した人」でなければ、滅後における法華経受持・弘通という難事を担うことはできません。

名誉会長 法華経そのものが、民衆に開かれた經典であつた。それは、法華経の担い手たちが、民衆の中へ入って説いたからこそ生き続けたと言えるのだろう。

斉藤 そこでここでは「法華経はだれのために説かれたのか」というテーマで、法華経

が「民衆のための經典」であることを浮き彫りにしていきたいと思ひます。

名誉会長 法華經の本質を知る上で大變に重要なテーマです。日蓮大聖人も觀心本尊抄や法華取要抄で論じておられる。

遠藤 法華經で、釈尊が法を説いている直接の相手は、例えば前半（迹門）の中心的部分である方便品（第二章）では声聞の舍利弗であり、後半（本門）の中心的部分である壽量品（第十六章）では弥勒菩薩です。しかし、重要なのは、そのような声聞や菩薩に対して説かれた法華經の教えが、全体として、だれのために説かれたのかということです。

須田 大聖人は法華取要抄で、法華經は本門も迹門も「釈尊滅後の衆生のために」説かれたのであり、なかならず「末法の衆生のために」であると結論されています。さらに、末法の中でも「大聖人御自身のために」説かれたと仰せです。

名誉会長 「釈尊滅後の衆生のために」「末法の衆生のために」。ここに「一切衆生のために」という法華經の慈悲がこめられている。

法華經では「一切衆生の成仏」が仏の一大事因縁、すなわち、仏がこの世に出現した、最大で究極の目的であると説かれている。滅後の衆生、特に末法という濁世の衆生を救わ

なければ、その理想は叶えられない。だから滅後の衆生のための教えを仏が説かないはずがない。そのための慈悲の經典が法華經です。

大聖人は法華經を身読され、すべての民衆を幸福にする法華經の秘法を、南無妙法蓮華經として顕し弘められた。だから、末法の中でも「大聖人御自身のために」法華經は説かれたと仰せなのです。

仏法が滅するとされる末法という時代に、一切衆生の幸福という法華經の理想を、どう実現するか——その道を開いたのは、日蓮大聖人であられる。

この御自覚の上から、法華經は大聖人のために説かれたと仰せなのです。その意味で、法華經とは、大聖人が末法に御出現されることを「予言」した經典ということも可能となる。

須田 滅後の衆生は関係ない、救わないというのでは無慈悲な仏になつてしまいます。

法華經の寿量品(第十六章)では明確に釈尊滅後の人類の救済について説いています。有名な「良医病子」の譬喩も、そのことを説いたものです。

遠藤 こう説かれています。良医である父親が留守の時に、子どもたちが毒を飲み、地

を転ころげ回くるって苦しんでいた。そこで良医ろういは、良薬ろうやくを調合ちようごうして与あたえたが、毒どくが深ふかくまわつて本心ほんしんを失うしなった子どもたちは飲のもうとしなかった。

そこで良医は、その子どもたちを救すくうために一計いつけいを案あんじ、良薬を置おき残のこして旅立たびだちます。そして旅先さきから使つかいをやつて「父は死んだ」と伝つたえます。その悲かなしみのあまり、子どもたちは正気しやうきを取り戻もどし、良薬を飲んで救われるのです。

良医ほとけは仏ほとけ、良医が旅立つのは仏の入滅にゆうめつを意味いみします。また、子どもたちは末法まつぽうの衆生しゆじやうであり、良薬とは南無妙法蓮華經であり、使じいとは地涌じゆの菩薩ぼさつであると大聖人は教おしえられています。つまり、仏の入滅後の衆生を救う良薬である南無妙法蓮華經が、寿量品じゆりやうほんに説いわれているのです。

名誉会長 仏みずかとは自らの生命しんめいの眞実しんじつを悟さとった人である。それは、とりもなおさず、あらゆる人の生命の眞実を悟ったことでもあった。それが仏の智慧ちえであり、法華經の智慧です。その意味で、法華經がだれのために説かれたのかといえは、「すべての人間のため」であり、その「自立じりつ」のためです。そこには当然とうぜん、僧俗そうぞく、男女だんじよ、貧富ひんふ、貴賤きせん、老若等ろうにやく、いかなる差別さべつもありません。ひとえに「人間のため」「民衆のため」です。

と他事なく唱へ申して候へば天然と三十二相八十種好を備うるなり、如我等無異と申し
て釈尊の仏にやすやすと成り候なり」(御書一四四三)と仰せられている。

だれもが等しく、成仏の可能性をもっている。だれもが必ず、絶対の幸福境界を満喫して
いける——これが法華經の教えなのです。

この民衆性という点で注目したいのは、釈尊が、どんな言語で仏法を説いたかです。
それは、マガダ語という「民衆の日常語」だったと言われているね。

遠藤 はい。当時、正統のバラモン教では「聖典は、神聖な言語であるヴェーダ語でし
か伝えてはならない」とされていました。そしてヴェーダ語は上流の知識階級でだけ用い
られ、カーストの最下層の人々や、カースト以外の不可触民には説き聞かせてはならない
というのが、昔からの風習だったそうです。

須田 そこで、こんなことを釈尊に言う弟子がいました。

「尊い立派な教えを、民衆の俗語で語られたのでは、仏教の尊厳に傷がつきます。今後
はバラモン教の聖典のように、格調の高いヴェーダ語で説くようにしてください」

この弟子とは、バラモン出身で教養のある二人の兄弟です。釈尊の教えに感動して出家

した僧そうでした。

「とんでもないことだ！」。釈尊しやくそんは、この申し出を一蹴いつしゅうします。そして、もし仏法をヴェーダ語ごで語る者があれば、嚴罰げんばつに処しよするとまで言つて徹底てつていさせたといいいます。

名誉会長 階層かいそうを問とわず、あらゆる人々に仏法を伝つたえたい——釈尊の氣迫きほくが伝わつてくる話だね。

大聖人も、在家ざいけの信徒しんとに分かりやすいように、ひらがなでお手紙てがみを書かれた。それを「恥辱ちじよく」であるとして、焼やいたり、漉すきかえしにしたりした高僧こうそうがいたことは有名ゆうめいな事実じじつです。

遠藤 五老僧ごろうそうですね。いずれも大聖人に近ちかしい弟子でしでした。でありながら、その五人が、いかに大聖人のお心から離はなれていたか。日興上人にっこうしようにんは「富士一跡門徒存知の事こと」に書き残のこされています（御書一六〇四頁）。

そして広宣流布こうせんるふの時には仮名文字かなもじの御書ごしよを各国かつこくの言葉ことばに訳やくして全世界に広めるべきだと述べられています。（御書一六一三頁、五人所破抄）

名誉会長 その日興上人の願ねがいを実現じつげんしているのが学会です。

師しの教おしえを「知しっている」から偉えらいのではない。「何なにのために」知しっているかです。

「師しの教おしえは素す晴はらしい」とは、だれでも言いえる。「だから、何なにとしても人々ひとびとに伝つたえていくのだ」——これが日興上人にっこうしやうにんであられる。「だから、それを知しっている自分自分はすごいのだ」

——これが五老僧ごろうそうではなかつただろうか。

一見いつけん、同じように師匠ししやうを尊そん敬けいしているかに見えて、内実ないじつは「天地・水火」の違ちがいです。

ここを見誤みあやまつてはいけない。

大乘だいじやう仏教は、複ふく雑ざつな戒律かいりつで縛しばらない。人間にんげんの自由じゆう、自律じりつを尊そん重ちゆうします。しかし、ひとた

び「民衆みんしゆう」という鏡かがみに照てらすとき、それは、極きわめて厳格げんかくなりリーダーの規き範はんとなる。「いい

かげん」は許ゆるされない。

須田 法華經ふっけきやうでも腐敗ふはい・墮落だらくした宗教者・僧侶そうりよを厳きびしく批判ひはんしています。例たとえば、「三さん

類るいの強敵きやうてき」を説といた勸持品かんじほんの二十行の偈げがそれです。そこでは、いかにも悟さとりを得えたかの

ような姿すがたをとりながら、欲望よくぼうの追求ついきゆうに走る僧侶そうりよの姿すがたが示しめされています。

遠藤 釈尊滅後百年しやくそんめつごひゃくねんごろのアシヨカ王のこが残ひした碑文ひぶんに、「墮落だらくした僧侶そうりよは教団きやうだんから追放ついほう

せよ」と刻きざまれているのは有名ゆうめいです。

名誉会長

釈尊滅後まもなく、僧侶の墮落が始まつていたという事実を、厳粛に受け止めねばならない。宗教は、リーダーが自己を見つめることを忘れると、自らが権威化し、民衆から遊離していく危険を常にもっている。

須田 仏法が民衆の言葉で語られたことは、法華経にも、あてはまります。

法華経のサンスクリットの写本は、現代に数多く残っているわけですが、これらは、それぞれ各地域の俗語的要素を含んだスタイルで書かれているというのです。

経典は、最初から文字で書かれたのではなく、口伝えに広まったときれています。人から人へ、時を超え、国を超えて、伝わっていくうちに、その地その時の民衆の間で、独自の表現が加味され、個性豊かな多くの写本が形成されたのではないのでしょうか。

遠藤 民衆性といえ、ば、「法師」という言葉もそうです。

法華経では、釈尊滅後に法華経を弘通する人を「法師」と呼んでいます。法師というと、普通は出家のように思われますが、「法を説く者」という意味で、出家・在家の両方を含んだ言葉です。

この法師に、仏が「善男子・善女人」と呼び掛けています。

須田「法師」は、言葉の起源からいうと、むしろ在家者を指しているという説もあります。

サンスクリットでは「ダルマ・バーナカ」といい、「ダルマ」は「法」です。「バーナカ」というのは「經典を暗誦し、誦する者」という意味で、ある經典（大事經など）では舞踏家、楽器演奏者などとともに音楽家の一種とされています。出家仏教である当時の小乗仏教教団では伎楽の演奏や歌舞の鑑賞を禁じられていますから、「バーナカ」は小乗仏教の範疇には入らない在家者であると考えられています（塚本啓祥「インド社会と法華經の交渉」、『法華經の思想と文化』、平樂寺書店）。

齊藤 仏教には出家・在家の区別のあることが、大前提のように考えられている傾向があります。特に日本では、仏教といえば僧侶が担うもの、という先入観が強い。在家は僧侶に布施をして拜んでもらう——それが仏教だと考えられています。

しかし、僧俗の区別は本来、仏教が成立した当時のインド社会の文化状況を反映したもので、仏教の教理に基づく本質的なものではないことが明らかになっています。

例えば次のような仏教学者の指摘があります。

「サンガの形成に当つても、サンガのめざす究極目的に対しては同一であつたが、出家道と在家道とを二つに分けたことは、全くブツダがその中に生活した当時の時代思潮に順じたからに外ならない」(早島鏡正『初期仏教と社会生活』、岩波書店)

遠藤 堀日亨上人も「僧俗と両様に區別することは、古今を通しての世界悉檀にしばらく準ずるものであつて、あるいはかならずしも適確の区分でもなからう」(『富士日興上人詳伝』)といわれています。

僧俗の区分は時代・社会によつては的確な区分ではなくなる場合もあるということです。須田 在家者に宗教に関する専門的な知識がなく、専門家としての聖職者に依存せざるを得ない時代には僧俗の区別も意味があつたかもしれませんが。しかし現代は、知識・教育が社会全体に一般化し、出家が独占的な權威を主張できる時代ではありません。

斉藤 出家と在家、聖職者と信徒という区分は、「実体」ではなく「働き」として、「身分」ではなく「役割」としてとらえるべきではないかと思ひます。

名誉会長 創価学会においては「身分としての聖職者」は存在しない。教義の研鑽はもちろん、布教も儀式の執行も、社会に根差した在家者である会員が一切を担っている。民

衆が担う宗教です。

牧口初代会長は「信者ではなく行者であれ」と叫ばれたが、その通りの行動をしています。

一部の聖職者が權威を独占し、信徒はその權威に従属していくという伝統教団の在り方

では、二十一世紀を目前にした現代社会にはとうてい適應できないことは確かでしょう。

遠藤 聖職者中心の行き方をとってきたカトリックでも、現在は信徒に大幅な権限を認

め、その意見が教団全体に反映できるようになっていくようです。信徒を尊重し、その役

割を認めていくことが、引き返すことのできない、宗教の方向性と考えられます。

また、日本のバプテスト連盟に属している教会が、牧師制を廃止しました。そのことを

とらえて、ある神学博士は、こう述べています。二十五年ほど前のことです。

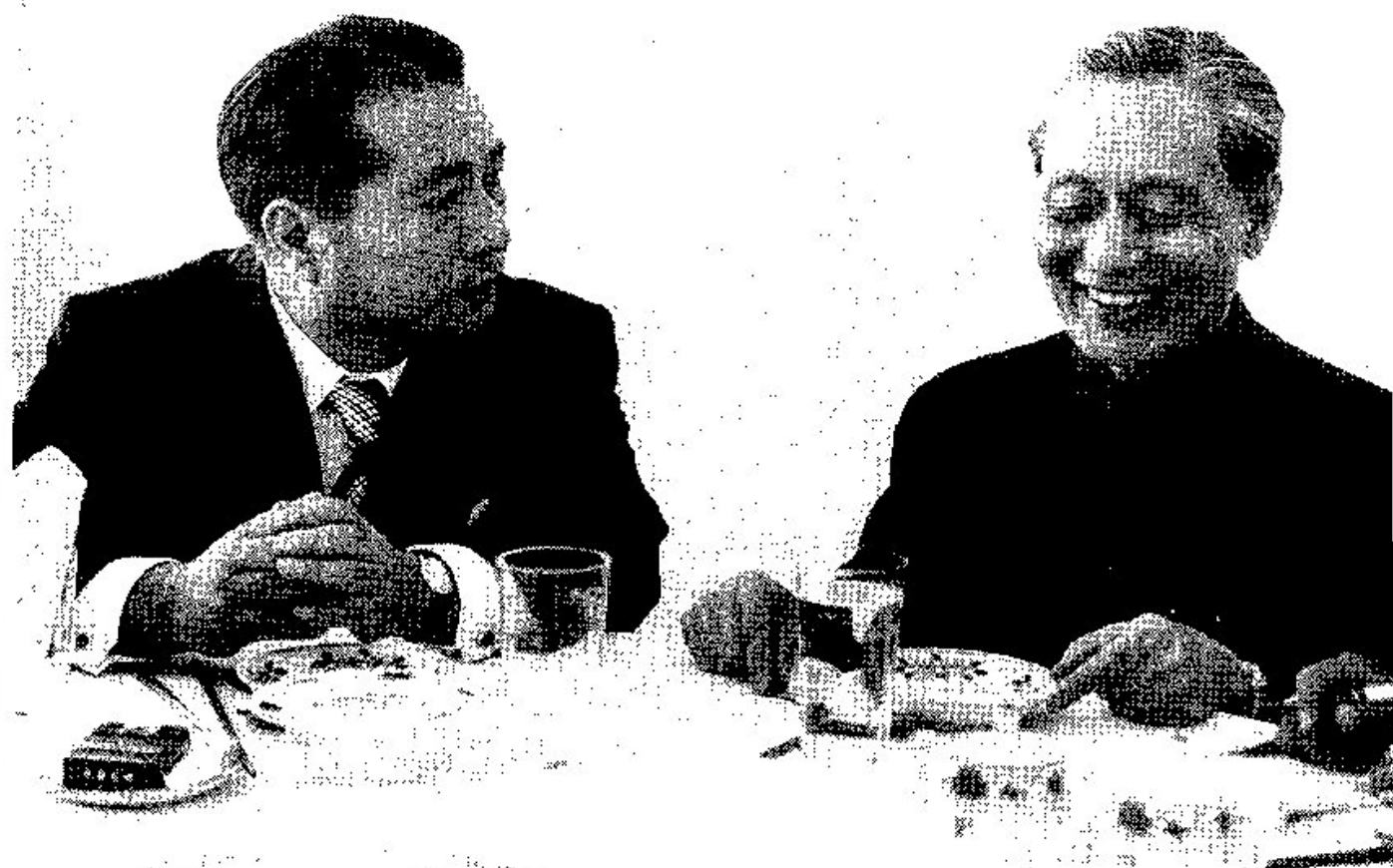
「牧師制度の中に座して、信徒をとおして間接にしか現実にはふれない牧師は自ら社会の

矛盾や動きにぶつかろうとしない……人々が日常の生活の中で担っている不安や苦悩に直

接にふれることもないところでつくられる説教が人々の心にふれえないのも当然である。

しかも、その説教には反論も許されない。このような牧師の權威に従い、精神的に依存し

てしか生きられないキリスト教徒からは、社会を動かさうような信仰は生まれてこな



池田名誉会長と会見する中国仏教協会の趙樸初会長
(1974年6月 北京)

い」(熊沢義宣「明日の神学と教会」、日本基督教団出版局)

その後、聖職者中心でなく、信徒中心を掲げる「在家キリスト教」という考え方も、聖職者の側から提起されています。

名誉会長 社会で現実と格闘している人間にしか、社会で生きる人々の心は分らない。宗教が、本気で民衆のなかへ開いていこうとすれば、一部の特権階級中心ではなく、民衆中心を志向するのは、必然の流れではないだろうか。

須田 「出家は不可欠か」。中国仏教協会の趙樸初会長は語られています。

結論として「仏法の因縁と衆生利益の因縁を保てば、出家してもしなくてもよいので

す」と。（『仏教入門』、圓輝原訳、趙樸初先生著作刊行会監訳、法藏館）

また「（僧侶は）人にかわつて福を祈り災をはらつたり、神にかわつて福をまねいたり罪を免がれさせることもできません」「歴史的にみれば、仏教がもつとも隆盛したのは、僧侶が一ばん多かった時代ではありません。僧侶の多すぎた時代は、むしろ仏教が衰退した時でした」（同）。

信徒が自分の幸福や安穩を、僧侶に代わりに拝んでもらつても意味がない。僧侶が多いことは、かえつて仏法の発展にマイナスになる。仏法をたもち、それを人々に教えていくという実践があれば、必ずしも出家する必要はないのだと。

名誉会長 趙樸初会長は、第一次訪中（一九七四年）以来の友人です。著名な書道家であり、中国人民政治協商會議の全国委員会副主席でもあられる。

中国で、東京で、法華経をめぐる何時間も語り合いました。法華経の文々句々を掌にさしている方で、「爾時世尊」と、こちらが言うのと、会長から「從三昧」と返ってくる。

齊藤 実は、私も四年前、第一回の青年文化訪中団の一員として、天台山に行かせてい

いただきました。

名誉会長 大聖人が「天台山に竜門と申す所あり其の滝百丈なり」(御書一〇七七)と述べられたところだね。

斉藤 はい。石梁瀑布といつて、滝の途中に石橋がかかっているのですが、下から仰ぐと、まさに竜が石の門をくぐって登っていく姿に似ています。

その近くにある古跡に、趙樸初会長が書かれた額が掲げられていたのです。

そこには「法乳千秋」とありました。鮮やかな筆跡から、仏法の滋養が、いつまでも民衆を潤し、育んでいくようにとの願いが伝わってくるようでした。

名誉会長 会長は何度も語っておられた。

「仏教とは本来、民衆と結びついたものです。それゆえに人間のなかに、衆生のなかに入っていくことが正しい」

そして「私が日本を訪問したとき、皆さん方の文化祭の映画を見せていただきましたが、そこに躍動する人間の姿は、まさしく皆さん方が、衆生のなかで活躍している証拠であると感銘を深くしました」と。

在家である学会員の姿に、^{すげ}「人間のなかに入っていく」という仏法本来の精神を見ておられる。昨年（一九九四年）、学会の代表が表敬訪問したときも、変わらぬ友好の思いを語ってくださいました。ともあれ、二十一世紀の宗教は、民衆が自分で考え、自分で賢明に生き方を決める「自立」の智慧を与えるものでなければならぬでしょう。

須田 宗教は「民衆を、自分の考えをもたない幼児的な状態に押しこめておこうとする傾向」を乗り越えねばならない――。

こう主張されたのが、池田先生と会われたハーバード大学のコックス博士です（聖教新聞一九九五年二月二十八日付「二十一世紀の宗教を考える――識者の声」）。

また博士は『民衆宗教の時代』という著作で、こう強調されました。

「究極的分析において宗教の本当の担い手は、いつも一般民衆である」（野村耕三・武邦保訳、新教出版社）

名誉会長 コックス博士は、マーティン・ルーサー・キング氏（公民権運動の指導者）と学友であった。パークス女史の「勇気の「ノー」」から始まったバス・ボイコット運動のさなかに、初めて二人は出会われたようだ。

遠藤 同じバプテスきようかいト教会しよぞくに所属し、キング氏が暗殺あんさつされるまで十二年間、非暴力ひぼうりよくの同

志として戦われたともうかがいました。一緒に牢ろうに入はいったこともあると。

名誉会長 初めて創価大学で語り合ったときの、コックス博士の言葉が忘れられません

(九二年五月二日)。

「創価学会が根幹こんかんとしている仏法の思想は、キングがそのために生き、そのために死んだ『理想』と、軌を一いつにしています。またその理念りねん、価値体系かちたいけいは、私自身わたくしじしんが人生の中で達成たつせいしたいと願ねがっている目標もくひようでもあります」

斉藤 博士は、キリストの教えを学まなんだ方です。宗教は異なるのに、これほどまでに仏法と響ひびき合う。

「偏見へんけん」の人か、「正見しやうけん」の人かを、宗派しゆはによつて、教条きやうじやう的に見みることはできませんね。

名誉会長 「仏教以外の思想や哲学てつがくを縁えんとして「正見」に入る人もある」と、大聖人は述べられている。たとえば法華經に出あつても、偏見をもつて、法華經の眞実しんじつの素晴すばらしさを分わかろうとしない者は、これら仏教以外の賢人・聖人しやうにんに劣おとるのであると(御書二四二頁、

観心本尊抄)。

また「法華を識る者は世法を得可きか」(御書二五四)と大聖人は仰せです。「法華經の智慧」とは、社会をよくして、民衆を幸せにしていく智慧です。そうでなければ仏法の智慧とは言えない。開いて言えば、民衆を幸せにする智慧は、すべて「法華經の智慧」であると言ええるのではないだろうか。

大聖人は、民衆を苦しめた悪王を討つて世を治めた周の太公望や前漢の張良などについて、こう述べられています。

「此等は仏法已前なれども教主釈尊の御使として民をたすけしなり、外經の人人は・しらざりしかども彼等の人人の智慧は内心には仏法の智慧をさしはさみたりなり」(御書一四六六)

仏教が中国に渡る以前であっても、これらの人々は仏法の智慧をもって民衆を幸せにしたのだと。

「民衆中心」とは「人間中心」と同じです。それは「宗派性」も「僧俗の区別」も超えて輝くものです。

赤裸々な一個の人間として、他者に対し、社会に対し、何ができるか——その意識や力

を絶えず湧きあがらせていく源泉が、「民衆の宗教」であり「二十一世紀の宗教」であるはずだ。それが法華經の魂です。

民衆の詩人、ホイットマンは、うたいました。

「いったいあなたは自分のことをどんなふうに思っていたのか、／自分自身を劣ったやつだとそれではあなたが思っていたのか、／自分より大統領のほうがえらく、金持ちのほうが裕福だと、／あるいは教育のあるほうが聡明だと、思っていたのはあなたなのか」「仕事を賛える歌」、「草の葉」、鍋島能弘・酒本雅之訳、岩波文庫

「わたしが手を変え品を変えて君に分らせたいと願っているのは、男であれ女であれ神と変わらぬ存在だということ以外に何であろうか、／たとい神だとして『君自身』以上に神聖ではないということ以外に」何であろうか——と。（創造のための法則、同）

「君自身」とは「生命」と言ってもよいでしょう。これはまさに仏法であり、法華經の世界です。

「あなた以上に尊いものはないのです」——法華經は民衆の一人一人に、こう呼びかけているのです。

序品①

によせ が もん
如是我聞——師弟不二の鼓動

齊藤 先日、西夏語「法華經」のマイクロフィルムが、池田先生のもとへ届けられまし

た。ヘロシア科学アカデミー東洋学研究所サングトペテルブルク支部から

今回が世界初公開で、多くの学者・研究者が待望していた貴重な資料だとうかがいまし

た。

名誉会長 光栄なことです。

東洋哲学研究所の創立者として、両研究所の学術協力の発展を心から念願しています。

西夏は、十一世紀から十三世紀にかけて、中国の西北部に栄えた仏教国です。わずか二

百年ほどの間に、独自の文字を開発し、多くの經典を翻訳しました。

贈られた西夏語「法華經」のもとになったのは、私たちも親しんでいる鳩摩羅什の漢訳

です。それに西夏の地域には、仏教美術で有名な敦煌もあつた。

須田 なにか、近しいものを感じますね。西夏の人々は、どんなふうに法華經を読み、仏法を学んだのだろうか。

遠藤 西夏語に、こんな格言があるそうです。

「智者はおだやかに言い、人を伏す

黄河はゆるやかに往き、人をのせる」

(西田龍雄著『西夏文字の話』、大修館書店)

斉藤 「おだやかに」とは、表面的な慰懃さのことではありませんね。

名誉会長 人間に向かつて開かれ、人を思いやる心。人を包み込む大きさ、温かさ。かりに言葉の内容は厳しくとも、それが「おだやかさ」でしよう。

智慧ある人は、明快に、道理を尽くして語る。だから人々は納得する。あたかも黄河が滔々と流れ、多くの人々を安らかに運んでいくように——こんな意味になるだろうか。

西夏人は、きつと聡明で、開放的で、誇り高い人々だったにちがいない。信念のな

い、陥れんがための言論に左右されがちな日本人への警鐘ととれます。

さあ、私たちの「法華經の旅」も、「黄河」のごとく滔々と、前へ進まなければ。いよいよこれから「序品」に入つていこう。

序品から

「今仏世尊、大法を説き、大法の雨を雨し、大法の螺を吹き、大法の鼓を撃ち、大法の義を演べんと欲するならん。……衆生をして、咸く一切世間の難信の法を聞知することを得せしめんと欲するが故に、斯の瑞を現じたもうならん」

（法華經一三七卷）

今、仏・世尊は、偉大なる法を説き、偉大なる法の雨を降らし、偉大なる法の貝を吹き、偉大なる法の太鼓を撃ち鳴らし、偉大なる法の意義を述べようとされているのであろう。……世間のすべての人々にとって信じがたい法を、あらゆる衆生が聞いて知ることができるようになしたと思うゆえに、このような瑞相を現されたのであろう。

齊藤 はい。法華經の「幕開けの章」^{まくあけのしょう}となるのが序品^{じよほん}（第一章）です。内容は、大きく三つに分けられます。

第一の部分では、冒頭^{ぼうとう}に「如是我聞^{にょぜがもん}（是の如きを、我聞^{われき}きき）」の句^くがあり、続いて、法華經の説法^{せつぽう}の場所^{ばしょ}となる王舎城^{おうしゃじょう}の靈鷲山^{りょうじゆせん}に、たくさん^{しゆじよう}の衆生^{あつ}が集ま^{あつ}っていることが紹介^{しょうかい}されます。

須田 「如是我聞^{にょぜがもん}」とは「この通りに私は聞いた^いた」という意味^{いみ}で、ほとんどの經典^{きやうてん}の冒頭^おに置^おかれてい^る「決まり文句^{もんく}」ですね。

名誉会長 その通りだが、法華經の場合^{ばあい}、「聞く^{きく}」ということが重要^{じゆうよう}な意味^{いみ}をもち、經典全体^{きんぜん}にわた^{って}強^{きやう}調^{ちよう}されてい^る。だから「如是我聞^{にょぜがもん}」も、型^{かた}通りの言葉^{ことば}ではあ^っても、他經^{たけい}よりも一段^{いちだん}と深^{ふか}い意義^{いぎ}がある。大聖人^{だいせいじん}の仏法^{ぶつぽう}にも深^{ふか}く関係^{かんけい}する重要な点^{てん}です。

齊藤 序品^{じよほん}では次に、釈尊^{しやくそん}が無量義処^{むりやうぎしよさんまい}三昧^{はい}に入^いって、種々^{しゆじゆ}の不思議^{ふしぎ}な現象^{げんしやう}を現^{あらわ}します。これが第二の部分^{ぶぶん}です。

須田 無量義処^{むりやうぎしよさんまい}三昧^{はい}とは、仏^{ほとけ}の無量^{むりやう}の教^{おし}えの根源^{こんげん}の法^{ぽう}に心^{こころ}を定^{さだ}める三昧^{めいそう}（瞑想^{めいそう}）のことです。

名誉会長 この三昧さんまいの名に、これから説とかれる法華経が、あらゆる教おしえの基礎きそ、根拠こんきよと

なる究極きうごく的な教きえであることが暗示あんじされている。無量義経むりやうぎぎきやうに「無量義とは一法いつぽうより生しやうず」

(法華経八四じやう)とあるが、この究極の一法が法華経で説かれていくわけです。

遠藤 釈尊しやくそんが、この三昧から安詳あんじやうとして立ち上がり、説法せつぽうを始めるのが、次の方便品ほうべんぽん

(第二章しやう)ですから、序品じよほんでは、釈尊は説法をしません。ただ、三昧に入はいって、神通力じんずうりきで種々しゆじゆの不思議な現象を現あらわすだけです。

須田 天から曼陀羅華まんだらけや曼殊沙華まんじゆしやげなどの花が仏ほとけや衆生しゆじやうの上に降ふったり、大地が六種しゆしんに震動しんどうするなどの現象が示しめされます。これによって、その場ばの衆生はかつてない気持ちになり、歡喜かんきして一心に仏を見ます。すると仏は、眉間みけんの白毫びやくごうから光を放ち、その光が東方とうほうの一万八千の世界をくまなく照てらし出します。

*白毫は、仏身ぶつしんに具足ぐそくするといわれる三十二相の一つ。仏の眉間には、清浄せいじやうで柔軟じゆうなんな白せい纖毛せんもうが右回みぎまわりにはえていて、たえず光を放っているときれた。

名誉会長 それだけ聞くと、いきなり「法華経はおとぎ話か」と思う人もいるにちがいない。今で言えばSF(サイエンス・フィクション)小説かと(笑い)。

戸田先生も、序品で集まった衆生について、こう言われていた。

「舍利弗およびその他の声聞衆が万二千人、菩薩方が八万、耶輸多羅等の眷属が六千人、

阿闍世の眷属が何千人、また八番衆の眷属といひますと天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・

伽楼羅・緊那羅・摩睺羅伽というような連中が、何万人という眷属を連れてきている。霊

鷲山会に、ざっとその数を計算しても、何十万という衆生が集まったことになる。菩薩だ

け集まっても八万人。声聞だけ一万二千集まるといつてもたいへんです。拡声器もなかつ

た時代に何十万の人を集めて釈尊が講義したと思われませんか。法華經の文上からみれば集

まったことになっている。これはたいへんな数です。何十万の人を集めて講義したと。そ

れならウソかと。ウソではない。ではほんとうに集まったのか。何十万の人に拡声器もな

くて、いくら仏が大音声を出したからといって講義できましようか」

「八年間、それらの人たちが集まっていたというのです。八年間集まっていたら飯をた

くだけでもたいへんです。便所なんかどうしたと思ひますか。ではウソかというのか。ウ

ソではない。集まったともいえるし、集まらなかったともいえるのです」

「その何十万と集まったのは釈尊己心の声聞であり、釈尊己心の菩薩なのです。何千万

いたってさしつかえない」

戸田先生は、法華経を、仏法を、人間の現実とかけ離れた架空の話や、観念論にはさせ
たくなかった。また、絶対にそうではないという確信があつた。生命の法であり、己心の
法であることを如実に知っておられたのです。

この観点からみれば、東方を照らす仏の白毫の光についても、生命の深い真理を表して
いることがわかる。

大聖人は「白毫の光明は南無妙法蓮華経なり」（御書七一二ページ）と仰せです。妙法の光で
あるからこそ、下は無間地獄から、上は有頂天に至るまで照らし出したのです。無間地獄
の衆生ですら成仏させる力をもっているのが妙法です。

遠藤 その光で照らし出された世界では、それぞれの国土の仏が説法し、その教えを受
けた人々が実にさまざまな修行をしている。さらに仏が入滅し、入滅後の人々が仏を慕っ
て仏塔を供養する——そうした有様が映画のようにつぶさに映し出されていきます。

名誉会長 宇宙をスクリーンとする、壮大きわまりない映画だね。全宇宙が法華経の舞
台であり、すべての仏が妙法を根本として成仏した。この根源の一法たる妙法を説き顯す

のが法華經なのです。その大法が、これから説かれるゆえに、その瑞相として、さまざま不思議な現象が現されるのです。〔本文八二ページの經文を参照〕

齊藤 そのことが序品の最後、第三の部分で明かされています。釈尊は諸々の不思議な現象をなぜ現したのか——皆の驚きと疑問を代表して弥勒菩薩が問い、文殊師利菩薩が答えます。

そのなかで、文殊は過去世の体験を語ります。かつて日月燈明仏という過去仏が、同じような瑞相を示して法華經を説いた。だから今の釈尊も、きつとこれから法華經を説くだろうと。

普遍的法華經——法華經の成立問題

名誉会長 日月燈明仏が説いた究極の教えも法華經、釈迦仏がこれから説く教えも法華經——この点が重要で。しかも、序品では文殊が過去世に出会った日月燈明仏だけでなく、それ以前に二万の日月燈明仏がいたとされている。ここには、すべての仏が説く究極

の大法だいほうが法華經であることが暗示あんじされています。それだけではない。化城喻品けじようゆほん（第七章しちしょう）では大通智勝だいつうちしやうぶつ仏が、常不輕菩薩品じやうふきやうぼさつほん（第二十章）では威音王いおんのうぶつ仏が法華經を説といている。

日月燈明にちがつとうみやうぶつ仏の弟子の妙光菩薩みやうこうぼさつも、大通智勝だいつちしやうぶつ仏の弟子の十六人の菩薩も、それぞれほとけにゆう仏の入滅めつじ後に法華經を説といている。威音王いおんのうぶつ仏の滅後には、不輕菩薩ふきやうぼさつが、いわゆる「二十四文字もじの法華經と」を唱となえている。法華經は、常に「滅後のため」の教えおしなのです。

しかも、これら過去かこ仏が説く法華經は、膨大ぼうだいな量りやうであることが示しめされている。「日月燈明にちがつとうみやうぶつ仏の法華經」は六十小劫しやうこうという実じつに長い時間をかけて説かれた。「威音王いおんのうぶつ仏の法華經」は二十千万億せんまんおくの偈げから成る。「大通智勝だいつちしやうぶつ仏の法華經」に至いたっては、八千劫いじやう以上もかけて説かれ、ガンジス河がわの砂すなの数かずほどの偈から成るとされている。

法華經とは、私たちが今日こんにち、見ることができ八卷かん二十八品ほんの「釈尊しやくそんの法華經」だけというのではないということです。説かれた形態けいたいは違ちがっていても、すべて法華經なのです。

齊藤 いわば「普遍的な法華經ふへんてきなほっけ」が想定そうていされていますね。

名誉会長 そう。法華經の本質ほんしつを体得たいとくされた戸田先生は、注目ちゆもくすべき法華經觀かんを提示ていじしている。

法華經疏

諸佛如來無量阿僧祇劫、常隨諸佛、修習空、無相、無願、三昧、及一切善法、

純然淨滿、無有雜染、及一切煩惱、皆悉斷盡、

法華經疏

諸佛如來無量阿僧祇劫、常隨諸佛、修習空、無相、無願、三昧、及一切善法、

純然淨滿、無有雜染、及一切煩惱、皆悉斷盡、

諸佛如來無量阿僧祇劫、常隨諸佛、修習空、無相、無願、三昧、及一切善法、

純然淨滿、無有雜染、及一切煩惱、皆悉斷盡、

諸佛如來無量阿僧祇劫、常隨諸佛、修習空、無相、無願、三昧、及一切善法、

純然淨滿、無有雜染、及一切煩惱、皆悉斷盡、

諸佛如來無量阿僧祇劫、常隨諸佛、修習空、無相、無願、三昧、及一切善法、

純然淨滿、無有雜染、及一切煩惱、皆悉斷盡、

諸佛如來無量阿僧祇劫、常隨諸佛、修習空、無相、無願、三昧、及一切善法、

純然淨滿、無有雜染、及一切煩惱、皆悉斷盡、

西夏語の「法華經」。序品の冒頭部分

「同じ法華經にも、仏と、時と、衆生しゆじやうの機根きこんによつて、その表現ひやうげんが違ふので

ある。その極理ごくりは一つであつても、その

時代の衆生の仏縁ぶつえんの浅深厚薄せんじんこうはくによつて、

種々の差別しゆじゆがあるのである。世間一般せけんいつぱんの

人々で、少し仏教ぶつこを研究けんきゆうした人々は、法

華經を説いた人は釈迦しやかい以外いがいにないと考え

ている。しかし、法華經には、常不

輕菩薩きやうぼさつも、大通智勝だいつうちしやうぶつ仏も、法華經を説い

たとあり、天台てんだいもまた法華經を説いてい

る」と。

極理は一つだが、表現形態ひやうたいには種々の

違いがある。しかし、すべて法華經なの

です。

一切衆生の眞の幸福と安樂のために、仏自らが悟った法、成仏の法を、すべての民衆に向かつて開き示した教え——それが「普遍的な法華經」です。

大聖人は、法華經に「広・略・要」を立てられています。「要」の法華經とは、御自身の南無妙法蓮華經です。現時において修行すべき法華經とは、この「要」の法華經です。

広・略については、何が「広」で、何が「略」かは明確には示されていませんが、過去仏の膨大な量の法華經が「広」の法華經だとすれば、二十八品の法華經が「略」の法華經。二十八品が「広」だとすれば、不輕菩薩が唱えた二十四文字の法華經などが「略」になる。

また戸田先生は、①法華經二十八品 ②天台の摩訶止觀 ③大聖人の南無妙法蓮華經を「三種の法華經」と呼んでおられます。

齊藤 話が少しそれるかもしれませんが、さまざまな法華經があり得るという法華經觀は、二十八品の法華經が、果たして釈尊の「直説」をそのまま伝えるものなのか、後世の編纂者たちの「創作」なのかという問題にも光を与えてくれます。

つまり、核心となる思想は釈尊の直説だが、今の表現形態は、編纂当時の時代状況を

はんえい
反映しているとは考えられないでしようか。

名誉会長 核心かくしんとなる釈尊直説しやくそんじきせつの思想が、編纂へんさん当時の時代状況じようきよう、思想状況しゆつげんにおうじて、

ひとつの形かたちをとつたと考えられます。

時代が釈尊の思想を希求ききゆうし、釈尊の思想が、時代を感じて出現しゆつげんしてきた。*かんのうどうこう「感応道交」

です。普遍的な思想ふへんてきとは、そういうものです。真実しんじつの思想の生命力と言つてもいい。形態けいたい

は新あらたになつたとしても、時代状況の中では、それが、より、その思想の「真実」を現あらわし

ているのです。その意味いみで、私は、直説ちうせつが創作そうさくかと問とわれれば、直説だと言いたい。

もちろん、時代状況も反映はんえいしているし、その時代の歴史的な研究れきし てき けんきゆうによつて明あきらかになる

面めんも多いと思う。真摯しんしな学問的成果がくもんてきせいなら、大いおおに受け入れるべきでしょう。それでも、法

華経の思想的価値かちは決して揺るゆがないし、いよいよ輝かがやいていくと私は確信かくしんします。

*感応道交とは、衆生しゆじようがよく仏ほとけの応現おうげんを感じ、仏が衆生の機根きこんにおほじて、互たがひに通つうじ合うこと。

須田 学問的には、法華経が釈尊の入滅後にゆうめつご、数百年を経た紀元一世紀きげんごろに成立せいりつしたこ

とは、現在げんざい、多くの学者に支持しじされています。

当時、仏教の正統せいとうを自認じにんしていた小乗部派しやうじようぶは仏教教団きやうだんが閉鎖へいさ的・権威けんい的になり、民衆みんしゆうから

遊離した。そのなかで、釈尊を象徴する仏塔を礼拝・供養する信仰活動が、在家の人々を中心に興ります。權威化した僧ではなく、仏に直結しようとする信仰です。一説には、それが大乘仏教運動となつて、般若経、法華経、華嚴経などの大乘經典が編纂されたとされています（平川彰『大乘仏教の教理と教団』、春秋社）。

その際、小乗教団の側から「大乘經典は勝手な創作で、非仏説である」という非難がなされました。いわゆる「大乘非仏説」論は、すでに大乘仏教の誕生当時からあつたわけですからしか映らなかつたのかもしれない。

遠藤 “伝統ある” 小乗仏教にとつては、大乘仏教は、いかがわしい “新興宗教” としか映らなかつたのかもしれない。しかし、釈尊の入滅から数百年経過していても、大乘經典が、釈尊とは全く無関係の勝手な創作であるとは言ひ切れない。文字としてまとめられたのは後年であつても、その間に、釈尊の言説が口承として伝えられていたことは十分に考えられます。これは、法華経だけでなく、同じころに成立した他の大乘經典についても言えることです。

小乗の經典にしたところで、釈尊の入滅後に、弟子たちによつてまとめられたものです。名誉会長 インドには、大切な教えは文字に書きとどめるのではなく、暗誦し、心にと

どめていく習慣しゅうかんがあつたようだ。竜樹*りゅうじゆの『大智度論だいぢどろん』にも「仏口ぶつくの所説しよせつを弟子誦習でしじゆじゆし、書しよして経卷きやうかんを作る」とある。この「経卷」とは大乗經典を指している。

それにしても、法華經編纂者の編集能力は素晴らしい。文字や暗誦で伝えられてきた仏説の中から、釈尊しやくそんの思想の核心かくしんを選び取り、見事に蘇みごとらせている。編纂者の中に、釈尊しやくそんの悟りに肉薄にくはくし、つかみ取った俊逸しゆんいつがいて、見事にリーダーシップを発揮したとしか思えません。

*竜樹（生没年不明）は、一五〇年―二五〇年ごろ、インドに出現した大乘の論師。

須田 現在では、研究が進むにつれて、早くから成立した小乗經典の中にも、大乘經典に説かれる思想の萌芽ほうがが含まれており、大乘經典は釈尊の思想を正しく発展させたものであることが主張しゆちやうされるようになっていきます。その意味で、小乗經典だけが仏説で、大乘經典は非仏説であるというのは妥当ではなく、小乗經典も大乘經典ともに釈尊を源流げんりゆうとしていることが明確めいかくになっています。

斉藤 いずれにしても、釈尊を希求ききゆうし、釈尊に肉薄する信仰と智慧は、大乘經典の中で、法華經が随一ずいいちです。法華經は、ある意味で、「紀元一世紀の釈尊論」だとも言えるの

ではないでしょうか。

如是我聞の意義

齊藤 序品の冒頭の「如是我聞」の意義についても、「**普遍的法華經**」の観点から捉えていくことができるのではないかと思います。つまり、「如是」とは何を指すのか、「このように聞いた」中身は何かという問題です。それは一応、「法華經二十八品」を指していると言えませんが、それだけにとどまりません。

遠藤 この「所聞の法体」——「何を」聞いたのか——について妙樂大師は「二十八品全体」だと普通に解釈しました。しかし大聖人は、その上で、法体とは「諸法の心」であり、それは「妙法蓮華經」であると仰せです。

御義口伝では、天台大師の「如是とは所聞の法体を挙ぐ我聞とは能持の人なり」（法華文句）という言葉挙げて、そのことを教えられています（御書七〇九ページ）。

名誉会長 大聖人は「文・義・意」という原理を示されている。

文とは經文の文面のことであり、義とは文が指し示す教義・法理に当たる。經文の文面を見ているだけでは、この「義」までしかとらえられません。

しかし、いかに法華經の「文」と「義」を論じて、その「心（意）」に触れなければ意味はない。大聖人は、結論的に「法体とは南無妙法蓮華經なり」（御書七〇九頁）と仰せである。

「法体」「諸法の心」とは、二十八品全体に脈打つ「仏の智慧」そのものです。その智慧が「南無妙法蓮華經」です。

それを「その通りに聞く（如是我聞）」とは、「信心」です。「師弟」です。師匠に対する弟子の「信」によつてのみ、仏の智慧の世界に入ることができ、「仏法は海の如し唯信のみ能く入る」と、竜樹（大智度論）や天台（摩訶止観）が言っている通りです。

この観点から言えば、法華經の「如是我聞」とは、全生命を傾けて仏の生命の響きを受け止め、仏の生命に触れていくことです。「如是」は、「その通りだ」と聞き、生命に刻んでいく信心、領解を表している。また、それが全人格的な営みだからこそ「我聞」とあるのです。

全人格としての「我」が聞くのであって、単に「耳」が聞くのではない。

また、この「我」とは、普通は、經典結集の中心者とされる阿難等です。しかし、その

「心」は、末法の今、この自分自身が「我」である。自分が、日蓮大聖人の南無妙法蓮華經の説法を、全生命で聞き、信受していくのが「如是我聞」の本義なのです。

大聖人は「廿八品の文文句句の義理我が身の上の法門と聞くを如是我聞とは云うなり、其の聞物は南無妙法蓮華經なりされば皆成仏道と云うなり」(御書七九四)と仰せです。

自分の外に置いて読むのではない。すべて「我が身の上の法門」であり、「我が生命の法」であると聞くべきなのです。

*阿難は釈尊十大弟子の一人。多聞第一といわれ、釈尊滅後、仏典結集に中心的な役割を果たした。

遠藤 それで明快になりました。

竜樹の『大智度論』では「如是の義は、即ち是れ信なり」と言い、天台の『法華文句』

では「如是とは信順の辞なり」と言っています。

この「信」について、竜樹はおもしろい譬えを述べています。すなわち、信は柔らかい

牛皮、不信は硬い牛皮で、柔らかい牛の皮は、用途にしたがって使えるが、硬い牛の皮は

そうはいかないと。つまり、信ある人は仏の教えにしたがつて、その通りに聞いていけるが、不信の人は、その通りに聞けないわけです。

天台の「信順」という言葉も、意味深いと思います。この「順」について天台は「順は則ち師資の道成ず」と述べています。順ずれば、そこに「師弟の道」が成り立つと。

名誉会長「如是我聞」の心とは「師弟不二」の心です。それが仏法伝持の極意です。一切衆生を救おうとする仏の一念と、その教えを体得し弘めようとする弟子の一念が、響き合う「師弟不二」のドラマ——それが「如是我聞」の一句に結晶しているのです。

しかも、法華経は「滅後のための経典」です。「仏の滅後の衆生救済をどうするか。それが法華経を受持し、弘めるのか」。序品の舞台からすでに、この根本のテーマが奏でられている。

日月燈明仏の後を継いで、弟子の妙光菩薩が法華経を説き、日月燈明仏の八人の王子をはじめ人々を成仏させていく——これも、その一つです。

斉藤 未来永遠にわたって衆生を救うことに仏の願いがあり、仏が出現する目的があるわけですね。

名誉会長

その通りです。日蓮大聖人は「日蓮が慈悲曠大じひこうだいならば南無妙法蓮華經は万年まんねん

の外・未来までもながるべし」(御書三二九ごしょさんにゅう)と仰せになっている。

次元は異なるが、一般にも、本当に民衆を思う強い一念は、その人が亡くなつた後でも

人々の心を動かしていく。マハトマ・ガンジーは、こう遺言したと伝えられている。

「私の精神が世界の光明であり得るなら、私は墓の中からでも語り続けよう！」と。

そして、未来の人類まで救おうという師匠の一念を「不二」で分かちもつ弟子の戦いに

よつて、現実に人は救われていく。現実に「法」が、慈悲の働きを及ぼしていくわけ

です。

師匠がいる間は、まだ、いいかもしれない。師弟しでいというのは、それが本物であるか否いな

か、師がいなくなったときに試されるのです。仏法は厳しい。

釈尊が入滅して、皆が嘆き悲しんでいたとき、一人の老僧がもらしたという。「やめな

さい、友よ。悲しむな。嘆くな。われらはかの偉大な修行者からうまく解放された。へこ

のことはしてもよい。このことはしてはならない」といつて、われわれは悩まされていたが、

今これからは、われわれはなんでもやりたいことをしよう。またやりたくないことをしな

いようにしよう」(中村元訳『ブツダ最後の旅——大パリニツクバーナ経』、岩波文庫)と。

この老僧を、諸君は、とんでもない人間だと思うだろう。しかし、現実(げんじつ)に人の心というのは、こういうものなのです。

二十一世紀のリーダーである諸君の使命(しめい)は重大(じゆうだい)です。

斉藤 はい。心してまいります。

さきほどの序品(じよほん)の話ですが、妙光菩薩(みょうこうぼさつ)が、日月燈明如来(にちがつとうみょうにょらい)の滅後(めつご)、如来と同じように法華経(ほふけい)を説いたことも「如是我聞(にょぜがもん)」の実践(じっせん)となるのでしょうか。

名誉会長(めいぎうかいちやう) そうなるだろう。仏(ほとけ)の入滅(にゅうめつ)を転機(てんき)として、「救(すく)われる弟子(でし)」から「救(すく)う弟子(でし)」へと転換(てんかん)したのです。これこそ法華経(ほふけい)の精神(せいしん)です。

だから「如是我聞(にょぜがもん)」の心とは、弟子(でし)が決然(けつぜん)と立ち上がることです。「さあ、師(し)と同じ心(こころ)で、民衆(みんしやう)を救(すく)っていくぞ」と、困難(こんなん)を求めて突き進む、その「大闘争宣言(だいたうそうせんげん)」とは言えないだろうか。

法華経成立(ほふけいりつ)の観点(かんてん)からいえば、二十八品(はつかん)の法華経(ほふけい)は、仏(ほとけ)の滅後(めつご)、仏(ほとけ)と同じ境涯(きやうがい)に立つて全民衆(ぜんみんしやう)を救(すく)おうと「如是我聞(にょぜがもん)」した弟子(でし)たちによってこそ、まとめられたのであろう。そ

の意味からも、法華経は「師弟不二」の經典です。

また戸田先生の「獄中の悟達」も、一次元から言えば、先生が法難の中で、御本仏日蓮大聖人の「常住此說法（常にここに住して法を説く）」「壽量品の文」を「如是我聞」された姿とは言えないだろうか。

須田 弟子が立つといえ、池田先生の『若き日の日記』の、戸田先生が逝去された後、のところを読ませていただき、改めて感動しました。一日一日、恩師の心を我が心として、学会をどう守り、築いていくか、苦闘されたことが記されています。恐縮ですが、一部を紹介させていただきます。

「当日の焼香者、十二万人。誠心の人であり、先生を、心からお慕い申し上げる方々である。今後、この方々を、更にさらに、無量に指導し、幸福にしてあげねばと決意。父にかわって」（昭和三十三年四月八日）

「多数の幹部たちは、先生の死を忘れたのか、と憤りを感じることあり。くやしい」（同五月二十五日）

「恩師の慈悲が、生命に脈々と流れている感じの毎日」（同十一月十日）

「若^{わか}あゆのごとく、躍^{やくだう}動する若^わ人。この人たちのため、自分^{いっしょう}は一生戦おう。犠^ぎ牲になつてもよい。恩^{おん}師^しがそうであつた」(同十二月十二日)

「恩^{おん}師^しの生命^{せいめい}の叫^{さけ}びが、一日^{いちにち}一日^{いちにち}、消^きえゆくようにならない。断^{だん}じて消してはならぬ。

組織あり、教学あり、社会^{ちい}の地位^{ちい}あり……大切^{たいせつ}なのは、慈^じ悲^ひだ。慈^じ悲^ひある人だ。不^ふ退^{たい}の

求^{きゆう}道^{どう}だ。無^む限^{げん}の求^{きゆう}道^{どう}の人だ」(昭和三十四年二月二十日)

「首^{しゆ}脳^{のう}たちが、もつと会^{かい}員^{いん}のことを真^{しん}剣^{けん}に思^{おも}うべきである。自^じ己^こを投^なげだして、会^{かい}員^{いん}に

奉^{ほう}仕^しすることだ。その叫^{さけ}びに、その姿^し勢^{せい}のみに、皆^{みな}は喜^{よろこ}んでついてくるのだ。ずるい指^し導^{どう}

者^{しや}になるなかれ。会^{かい}員^{いん}が可^か哀^{あい}想^{そう}だ」(同七月二十三日)

名^な譽^よ会^{かい}長^{ちやう} 今^{いま}も、まったく同^{どう}じ気^き持^{もち}ちです。

ともあれ、法^{はふ}華^わ経^{きやう}は徹^{てつ}頭^{とう}徹^{てつ}尾^び、師^し弟^{てい}不^ふ二^にが魂^{たましい}なのです。

聞^き法^{ぽう}の意^い義^ぎ——声^{こえ}仏^{ぶつ}事^じを為^なす

須^す田^{でん} ところで、「聞^きく」ということは人間生命^{じんぎやうせいめい}にとって、とりわけ深^{ふか}い意^い義^ぎがあるよ

うに思われます。「見る」「嗅ぐ」などという他の感覚よりも早い段階に経験します。

遠藤 この点について、ニューヨーク大学の音楽教師、バロウズ氏は次のように述べています。

「胎児は子宮のなかで、戸がバタンと閉まる音にびくつとする。子宮のなかで聞こえる豊かで温かい雑音が記録されている。赤ん坊にとって自分の皮膚のさらに向うにある世界について、その存在を示してくれる最初の一つが、この母親の心臓の鼓動や呼吸なのである」(アンソニー・ストー著、佐藤由紀・大沢忠雄・黒川孝文訳『音楽する精神』、白揚社)

須田 五感の中で最初に獲得されるのは聴覚らしいのです。広く言えば、「聞く」ということは、聴覚だけでなく、宇宙に満ち満ちた不思議なるリズムを感じとる、生命の力と言ってもよいでしょう。

大聖人は「此の娑婆世界は耳根得道の国なり」(御書四一五)と述べられています。自分の経験からいっても、本で読んだ知識は、すぐに忘れがちです(笑い)。でも講義など、音声によって真剣に受け止めたものは、何倍も印象が強く、よりしっかりと記憶に定着するようです。

遠藤 日寛上人は、人が亡くなつた後でも、しばらくは題目を送つて、聞かせてあげるべきであると言われています（『富士宗学要集』第三卷二六四頁）。

齊藤 法華經でも「法を聞く」（聞法）ということが大變に重視されています。とくに方便品（第二章）や寿量品（第十六章）などの重要な説法の後では、必ず「法華經を聞く功德」が説かれています。

名誉会長 大聖人も「此の經は専ら聞を以て本と為す」（御書四一六頁）と仰せです。だから、仏の「声」が重要な意味を持っている。「妙法蓮華經」の「經」の意義について、「声仏事を為す之を名けて經と為す」（御書七〇八頁）と述べられるゆえんです。

遠藤 大聖人は、仏の三十二相の中では「梵音声相」が第一の相であると仰せになつています（御書二二二二頁）。

「梵音声相」とは、音声が遠くまで明瞭に達し、しかも清浄で、聞く人を喜ばせるような声です。実際に釈尊の声も、そうだったのでしよう。

名誉会長 素晴らしい声だったからこそ、人々の生命を揺るがし、蘇らせることができたのだらうね。それは、仏の己心に悟った成仏の法を顕す「真実の声」であつた。

「声」は生命全体の響きです。声にはその人の生命、人格そのものが現れている。あるフランスの作家は「声は第二の顔である」と言った。姿・形はごまかせても、声はごまかせないものです。

須田 イギリスの科学雑誌「ネーチャー」に興味深い記事が載っていました。人々はどのようなメディアの情報に騙されやすいか、調べる実験をしたというのです。新聞とテレビとラジオを使って、同一人物が真実を語るインタビューと嘘をついているインタビューを並べて掲載・放送し、読者・視聴者に嘘を見破ってもらうというものです。

その結果、人々が一番騙されやすいのはテレビ。逆に、四分の三の人が嘘を見破ったのはラジオでした。新聞はその中間だったそうです。人々は、映像には騙されても、声には騙されなかったとみることもできます。

斉藤 「南無妙法蓮華經」という題目自体に不思議なリズムを感じます。念仏が「哀音」といわれるように、陰々滅々とした暗い音調であるのに比べて、題目には人を勇気づけ、躍動させる力強い音律があります。

須田 題目のリズムといえば、世界的バイオリニストのユーデイー・メニューイン氏

が、池田先生と対談たいだんされたときに語っておられたことを思い出します。

——「南無妙法蓮華經」の「NAMなむ（南無）」という音に、強い印象つよい いんしやうを受けます。「M」とは命いのち みなもとの源みなもとというか、「マザー（MOTHER）」の音、子どもが一番、最初に覚える「マー（お母さんかあ）、マー」という音に通じる。この「M」の音が重要な位置じゆうよう いちを占めてゐる。そのうえ、意味深い「R」の音（蓮れん）が中央ちゆうおうにある——と。

名誉会長 いずれにせよ、題目だいもくこそ宇宙うちゆうの根源こんげんのリズムであり、尊極そんごくの音声おんじやうである。

大聖人は仰せです。南無妙法蓮華經には、一切衆生の仏性を「唯一音」に呼び現す無量むへん くどく無辺の功德くどくがある（御書五五七ページ）。また、凡夫ぼんぷという無明の卵たまごを温め、孵化ふかさせ、仏ほとけという鳥とりへと育てる「唱となへの母」であると（御書一四四三ページ）。

そして大聖人は「声こゑもをしましまず唱となうるなり」（御書三二八ページ）と述べられている。声も惜おしましまずといつても、声の大小だいいしやうではない。一切衆生を成仏じやうぶつさせようという慈悲じひの大音声です。

学会の行動こうどうも、この大聖人の御精神ごせいしんを我が心とし、広宣流布こうせんるふのための「声も惜しまぬ」行動である。

題目を真剣に唱える声を根本として、温かい励ましの声、毅然とした勇気の声、心からの歡喜の声、真剣な誓いの声、明快な知恵の声、等々に満ち満ちているのが創価学会である。そこに無量の功德がわいているのです。

学会こそが、惜しめない声また声で、広宣流布という偉大な「仏事」を為している教団なのです。

序品②

二処三会に しょさんね——「永遠」と「今」との交流

列座大衆れつざ——登場人物たちとうじようじんぶつ

齊藤 冒頭ぼうちうの「如是我聞によぜがもん」の後、序品じよほんは「一時いちじ、仏ほとけ、王舎城耆闍崛山おうしやじようきしやくつせんの中に住じゆうしたまひ」（法華經一九）と続きます。ここでは、法華經が説とかれる「場所ばしょ」が示しめされています。すなわちマガダ国の首都・王舎城しゆとの郊外こうがいにある耆闍崛山——靈鷲山りようじゆせんです。更に続いて、その説法せつぽうの場ば（会座えざ）に、どのような衆生しゆじようが参列さんれつしていたか（列座大衆、列衆れつしゆ）が挙げられていきます。

名誉会長 法華經のドラマが始まるにあたって、「舞台ぶたい」と「登場人物」が紹介しょうかいされているわけだね。

序品から

「二時、^{いちじ}仏、^{ほとけ}王舎城耆闍崛山の中に住したまい、^{おうしやじようぎしやくつせん}大比丘衆、^{なかに}万二千人と俱^{じゆう}なりき。……其の名を阿若憍陳如、^そ摩訶迦葉……阿難、^あ羅睺羅と曰う。是の^{あなん}如き、衆に知識せられたる大阿羅漢等なり。復、^{また}学無学の二千人あり。摩^{ごと}訶波闍波提比丘尼、^は眷属六千人と俱なり。羅睺羅の母、^は耶輸陀羅比丘尼、^{また}亦眷属と俱なり。菩薩摩訶薩八万人あり。……韋提希の子阿闍世王、^{また}若干^{ひやくせん}百千の眷属と俱なりき。各、^{おのおの}仏足を礼し、^{おつそく}退いて一面に坐しぬ」

(法華經一一九ページ)

あるとき、^お仏は王舎城(郊外)の耆闍崛山(靈鷲山)におられた。大^{ぜい}勢の比丘たち一万二千人と一緒であつた。……その名を阿若憍陳如、摩訶迦葉……阿難、羅睺羅といい、人々によく知られている大阿羅漢たち

であつた。また、これから学まなぶべき者がく（学）と既に学すびおえた者むがく（無学）が二千人いた。また摩訶波闍波提比丘尼は六千人の従者じゆうしやとともにいた。羅睺羅の母である耶輸陀羅比丘尼も従者とともにいた。更に菩薩・摩訶薩が八万人いた。……また韋提希の子の阿闍世王は、数十万の従者と一緒いっしょであつた。これらの者は、各々、仏の足もとに礼拝し、退しりぞいて一面いちめんに座すわつた。

須田 靈鷲山りようじゆせんには、私も第一回のSGIインド青年文化訪問団（一九九〇年）の一員いちいんとして訪おとずれたことがあります。幽玄ゆうげんな靈地れいちかと期待きたいして行つたのですが、場所ばしょそのものは何の変哲へんてつもない岩山いわやまでした（笑い）。

名誉会長 それほど高くもないようだね。靈鷲山と呼ばれるのは、一説いっせつに、山頂さんちようの形かたちが鷲わしに似にているからだと言われているが、その頂上ちようじやうふきん付近が、釈尊しやくそんの説法せつぽうの場所だつたと伝つたえられている。

遠藤 「登場人物とうじやうじんぶつ」ですが、経文きやうもんの順じゆんに示すと次のようになります。

① 阿若憍陳如あにやきようじんによや迦葉かしよう・舍利弗しやりほつなど、声聞しょうもんの最高位さいこういである阿羅漢あらかんの境地きようちを得たえ一万二千にふせん人の比丘びくたち。代表だいひようして二十一人の名が挙げられています。

そのほかに学がく(阿羅漢果を得るために戒定慧かいじやうえの三学を学まなんでいる者)や無学むがく(阿羅漢果を得て学がくぶべきものが無い者)の二千人の声聞もいます。

② 釈尊しやくそんの叔母おば・摩訶波闍波提まかはびやはいだいびく比丘尼に、釈尊しやくそんの出家前しゆつけまえの妻つま・耶輸陀羅やしゆだら比丘尼にとその眷属けんぞく数千人。

③ 文殊菩薩もんじゆぼさつ、觀世音菩薩かんぜおんなど八万人の菩薩たち。代表して十八人の名が挙げられています。

以上の声聞衆、菩薩衆のほかに、次のような娑婆世界しやばのさまざまな衆生しゆじやうが集つどっています。

④ 帝釈天たいしやくてん、四大天王しだいてんのう、梵天ぼんてんなど天界てんかいの王や天子たち。その眷属は七〇八万、数え方に

よつては十数万になります。

⑤ 八人の竜王りゆうおうとその眷属。

⑥ 四人の緊那羅王きんならとその眷属。

⑦ 四人の乾闥婆王けんたつばとその眷属。

⑧ 四人の阿修羅王とその眷属。あしゅら おう けんぞく

⑨ 四人の迦楼羅王とその眷属。がらら おう けんぞく

⑩ 阿闍世王とその眷属。あじやせ

以上、ざっと数えて、少なくとも、数十万、解釈の仕方によっては数百万の衆生が法華經の聴衆です。ちようしゆう

名誉会長 実に多彩かつ膨大な大衆だね。天界の神々や竜王、緊那羅王など、人間ではないものも挙げられている。もちろん、これほど多くの大衆が、同時に靈鷲山に集まられるはずはない。

須田 実際に訪れた感じを言いますと、釈尊が説法したとされる場所は、百人座れるかどうかという程度の広さです。しかも岩山ですから日陰もなく、真夏など到底、長時間座っていられるような場所ではありません。私たちが行ったときも、余りの暑さに、案内してくださったインドの人が倒れてしまうほどでした。たお

名誉会長 戸田先生が言われたように（本文八五頁参照）、法華經が表現しているのは、仏の己心の世界、悟りの世界です。何万人の大衆が登場しても差し支えない。ほとけ こしん さと

齊藤 その意味で、列座大衆のそれぞれは、全て生命の働きの象徴と考えられます。十界でいえば、菩薩界、声聞界、天界、人界、修羅界、畜生界の衆生がいる。そこに挙げた大衆をもつて九界全体を代表させているようです。つまり、序品の大衆は、仏の己心に包まれた九界の衆生の姿といえるのではないのでしょうか。

遠藤 そうとらえると、挙げられている大衆のそれぞれに意義があるはずですね。代表的なものの意味を考えてみましょう。

須田 まず最初に挙げられている阿若憍陳如。彼は、釈尊が成道した後、初めて教化した五人の比丘の一人です。

名誉会長 いわば釈尊の最初の弟子だね。最後に挙げられている阿闍世王は、提婆達多と共謀して、釈尊に敵対した人物です。釈尊の晩年になって自らの罪を悔い、釈尊に帰依したと伝えられている。最初の弟子と最晩年の弟子がいるということとは、釈尊の一生の間の門下をすべて含めている象徴と見ていいかもしれない。

齊藤 大聖人が御義口伝で列衆を論じられているのも、この最初の阿若憍陳如と、最後の阿闍世王についてです。

名誉会長 御義口伝では、列衆の意義を生命論から解明されている。

あにやきようじんによ

阿若憍陳如については、「我等法華經の行者の煩惱即菩提生死即涅槃を顕したり」（御書

七一〇）と。

また父を殺し、母をも殺そうとし、釈尊に背いたのが、阿闍世王です。その反逆の生命
については、法華不信の心や貪愛・無明を殺して成仏を遂げていく「逆即是順（逆即ち是
れ順なり）」の原理を顕すとされている。

遠藤 その他の大衆も同様に、生命論から考えていくことができます。

須田 ところで、迦葉や舍利弗などの大声聞が列衆の冒頭に挙げられているのは、彼等

れきしてき

が歴史的にも釈尊の教団を支えてきた有力な弟子であったことから当然といえますが、そ

ちよくこ

の直後に、摩訶波闍波提比丘尼や耶輸陀羅比丘尼を代表とする女性の声聞が挙げられてい

ることに注目されます。

また、阿闍世王の名を挙げる時も、母親の韋提希夫人の名を挙げ

ています。

名誉会長 「女人成仏」の象徴として、提婆達多品（第十二章）の「竜女の成仏」は有名

によにん

しやうちよう

だいは だつた ほん

しやう

りゆうによ

ゆうめい

だが、法華經で女性の成仏が説かれるのは、ここだけではありません。

勸持品(第十三章)では、比丘尼たちに、将来、仏になるという記別きべつが、すでに決まっていることを確認する形で授けられている。そのときの代表が、摩訶波闍波提比丘尼や耶輸陀羅比丘尼です。

その女性の代表が、男性と並んで序品に紹介されている。法華経の特徴とされる「女人成仏」は、序品から既に予定されていたとみてよいでしょう。

常不輕菩薩は「あなたがたは皆、菩薩道を行じて必ずや仏になることができる」と、男性にも女性にも、同じように呼び掛けている。法華経全体からみれば、仏になることにおいて男女に差別がないことは、当然のこととみなされていたのだね。

斉藤 重要なポイントだと思います。

次に登場するのは、八万人にも上る菩薩たちです。これらの菩薩については人々を救おうとする慈悲の行動が称えられています。

名誉会長 初めに声聞、次に菩薩が挙げられている。法華経全体の対告衆を見ても、初めは舍利弗らの声聞だが、法師品(第十章)以降は、薬王らの菩薩に交代する。

後に詳しく語ることにはしたいが、声聞から菩薩へという担い手の転換が、法華経を理解

する一つのカギになっている。

遠藤 序品で登場する菩薩たちの名前も興味深いですね。文殊菩薩、観世音菩薩、弥勒

菩薩、薬王菩薩などはよく知られていますが、常精進菩薩、不休息菩薩、宝掌菩薩、大

力菩薩、宝月菩薩など、あまり聞いたことのない菩薩の名もあります。

名誉会長 それらも、すべて菩薩の生命のさまざまな側面を示したものと考えられる。

常精進菩薩、不休息菩薩は文字通り、常に仏法のために休みなく戦い続ける生命を象

徴している。「不休息」は、サンスクリットでは「重荷を捨てない」という意味であると

いう。「アニクシプタドウラ」という

須田 また、宝掌菩薩とは「宝を手にした」という意味ですし、勇施菩薩は「施しの勇

者」といつてもよいでしょう。宝月菩薩、月光菩薩、満月菩薩などは、さまざまな智慧の

光で人々を照らすという菩薩の生命の働きを象徴していると思われれます。

遠藤 弥勒菩薩は「慈しみの師」という意味ですし、宝積菩薩は「宝の根源」を意味し

ます。最後の導師菩薩は「キャラバン（隊商）のリーダー」の意味で、多くの人を成仏へ

と導いて行く指導者の働きを表しています。

齊藤 菩薩の次は、天界の衆生が挙げられます。筆頭は天界の帝王である釈提桓因（帝

釈天）です。帝釈天はもともとは古代インド神話の中心的な神の一つであるインドラ（雷神）でした。

遠藤 自在天子、大自在天子もバラモン教の主神の一つで、世界を破壊する神とされるシヴァ神の異名です。そして世界創造の最高神とされる梵天王（ブラフマー）さえも、眷属とともに連なっています。

名誉会長 神々が法華經の説法を聴きにきているということは、仏が神々をも超え、それらを導く存在であることを示している。仏の別名に「天人師」とあるように、仏は、諸天をも人をも導く師です。

成道した釈尊に、梵天が説法を要請したとされているが、仏を、インドの伝統的な神々を遥かに超えた存在として位置づけるのが、仏法の基本的な考え方です。

齊藤 次に八竜王が挙げられます。難陀龍王、跋難陀龍王、娑伽羅龍王、和修吉龍王、徳叉迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王、優鉢羅龍王等が多くの眷属とともに集っています。このうちの娑伽羅龍王の娘が、「女人成仏」の範を示した竜女です。

せです。

また、天と阿修羅、竜と迦楼羅といった敵対関係にある者たちが同席しているのもおもしろい。民族対立を煽るような宗教は低級宗教だと言っているようだね。法華経は平和と平等の教えです。

りようじゆせん
靈鷲山から虚空へ、そして再び靈鷲山へ

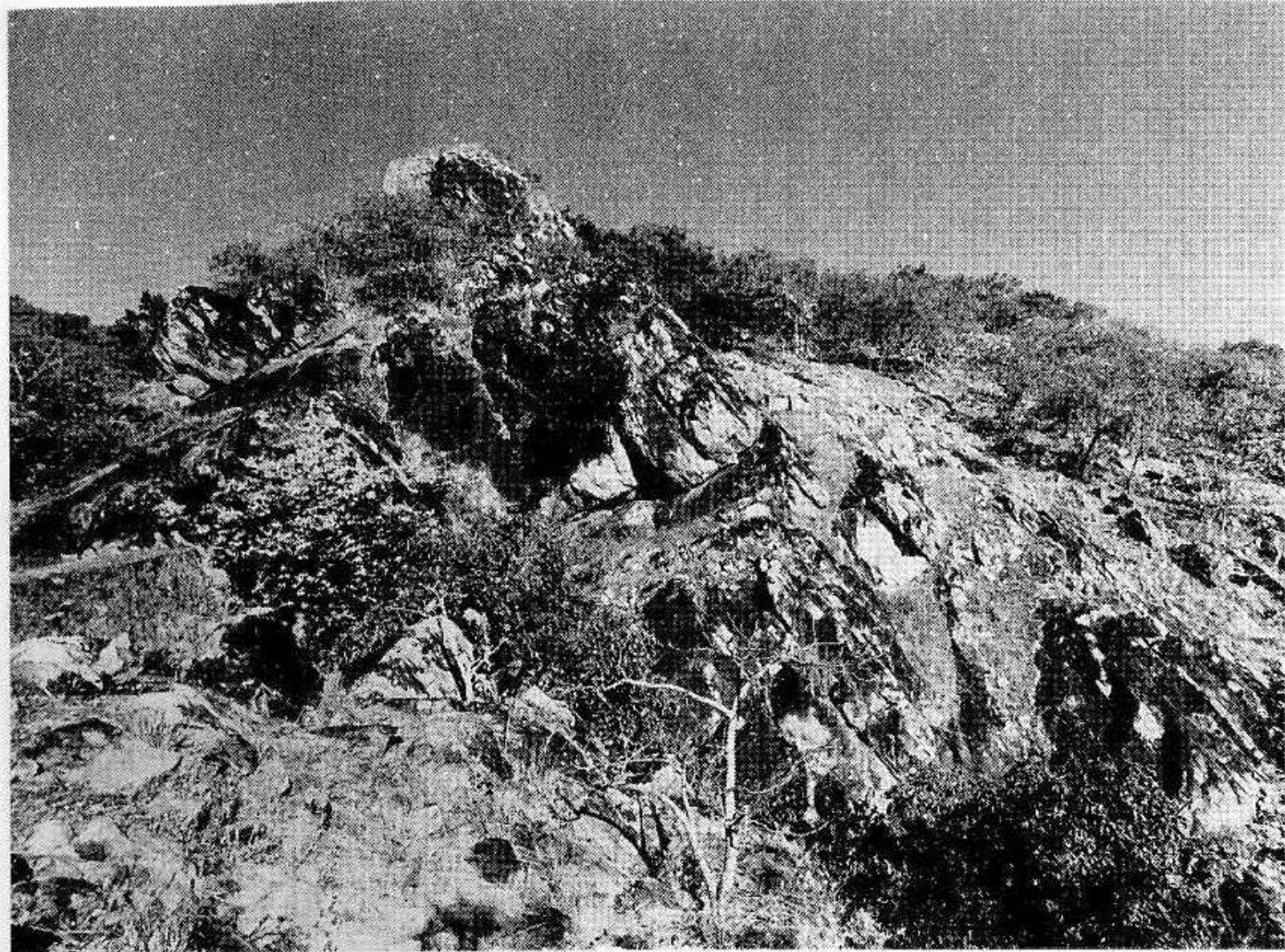
遠藤 さて「登場人物」の次は、「舞台」ですが。

名誉会長 そうだね。ここでは、序品の舞台の靈鷲山だけでなく、「三処三会」に触れておこう。

遠藤 はい。法華経全体の流れをみますと、序品（第一章）から法師品（第十章）までは、

靈鷲山を舞台に展開されます。

そして見宝塔品（第十一章）の冒頭、巨大な宝塔が突如として大地から涌出して空中に浮かびます。その宝塔の中に釈迦・多宝の二仏が並んで座り、一座の大衆も空中に引き上げ



釈尊が法華經を説いたとされる靈鷲山

られて、説法が行われていきます。この「虚空会」が嘱累品（第二十二章）まで続きます。

次の薬王菩薩本事品（第二十三章）からは、再び靈鷲山に戻り、最後の普賢菩薩勧発品（第二十八章＝終章）まで靈鷲山での説法となります。

須田 法華經の「舞台」は、初めと終わりが靈鷲山（前靈鷲山会と後靈鷲山会）、中間が虚空（虚空会）。二つの場所で三つの集会があつた。そこで「三処三会」というわけです。

齊藤 靈鷲山が、現実に存在する説法場であるのに対して、虚空会というの

は、いわば「超現実」です。宝塔の大きさにしても、ある計算によれば、地球の三分の一から二分の一という巨大なものになつてしまふ。

なぜ、そんな現実離れした虚空という場を設定し、想像も及ばないような宝の塔を登場させなくてはならなかつたのか。この点が重要ですね。

名誉会長 詳しくは後で論じたいと思うが、宝塔や虚空の意義については、これまで会った仏教学者の方とも話題になりました。

遠藤 例えば、ネパールのシャキヤ博士は、こう言われていますね。

「虚空会の儀式は、仏の偉大な境地の象徴であり、その『現在』のうちに、『過去の十方世界』も『未来の十方世界』も含んでいると考えられます。時空を超越しているのが『仏界』です。虚空会で説かれている世界を悟れば、人間には何でもできる力が出るということですよ」と。

須田 戸田先生は、虚空会の儀式について次のようにおっしゃっています。

「われわれの生命には仏界という大不思議の生命が冥伏している。この生命の力および状態は想像もおよばなければ、筆舌にも尽くせない。しかしこれを、われわれの生命体の

うえに具現ぐげんすることはできる。現実げんじつにわれわれの生命じふたいそれ自体みづかも冥伏みょうふくせる仏界ぶつがいを具現ぐげんできるのだと説とき示しめしたのが、この宝塔品ほうとうほんの儀式ぎしきである」と。

名誉会長 先生は、宝塔出現しゆつげんの意義いぎ、宝塔とは何かを明確めいかくに教おしえてくださった。あの巨大きよな宝塔も、私たちの生命せいみんに潜在せんざいする仏界ひようけんを表現ひようげんしたもののなのです。生命せいみんの宇宙大うちゆうだいの尊貴そんきさを教おしえているのです。

斉藤 「然しかれば阿仏房あぶつぼうしながら宝塔・宝塔こながら阿仏房・此これより外ほかの才覚さいかく無益むやくなり」
(御書一三〇四頁)の御文ごもんの通りですね。

名誉会長 宝塔しつもんについて質問しつもんした阿仏房あぶつぼうに對たいして、「あなたの生命せいみんそのものが宝塔たうたうなのですよ」との御本仏ごほんぶつの御断言ごだんげんです。大聖人おほせいじんの温かい肉声にくせいが聞きこえてくるような御言葉おことばです。
遠藤 宝塔品えんたうの会座えざで、一座の大衆いちざの願ねがいのままに、釈尊しやくそんが神通力じんずうりきをもつて大衆たいしゆを虚空こくうに引ひき上げますが、そこにも仏ほとけの慈悲じひが感かんじられます。

名誉会長 仏は、高みから衆生しゆじやうを見ているのではない。同じ高さに引ひき上げようとす
る。同じ尊極そんごくの宝塔たうたうであると教おしえる。ここに法華經てつがくの哲学てつがくがある。大聖人おほせいじんの御精神ごせいしんがある。真しんの人間主義しんゆぎです。

ぼうとうほん と
宝塔品に説かれる虚空会の儀式も、仏の悟りの境地を民衆に何とか伝えようとする慈悲の現れです。

齊藤 法華經の会座の衆生は、この虚空会に昇ることによって、いつてみれば、無明の大地の束縛を打ち破り、自在無礙の法性の大空にかけ昇ったといえるのではないでしようか。

須田 御書にも「実相真如の虚空」、また「法性真如の大虚」との言葉が拝見されます(御書一四四三)。 「虚空」のもつ意味の一端が示されているように思います。

名誉会長 「虚空とは寂光土なり」(御書七四二)と大聖人は仰せだが、虚空会は広大な「仏の世界」「悟りの世界」を示しています。

この「実相の世界」「真如の世界」は、時間・空間を超越しています。空間的には、無限の宇宙に広がっている。

虚空会が始まる見宝塔品では、いわゆる三変土田によって、娑婆世界が浄化され、実に広大な仏土が形成されます。また、虚空会が終わる神力品・嘱累品の付嘱の儀式では、いわゆる十神力の一つとして、十方(東西南北と東北・東南・西北・西南の四維と上下の二方)の

世界が隔^{へだ}たりのない一^{いち}仏^{ぶつ}土^どであることが示^{しめ}されている。

また時間^{じかん}的には、永遠^{えいえん}の世界である。

虚空^{こくう}会の儀式^{ぎしき}は、過去^{かこ}の仏^{ほとけ}である多宝^{たぼう}如来^{にょらい}と現在^{げんざい}の仏^{ほとけ}である釈迦^{しやか}如来^{にょらい}が並^{なら}んで座^{すわ}って始^{はじ}まります。そして未来^{みらい}の仏^{ほとけ}である上行^{じやうぎやう}菩薩^{ぼさつ}が呼^よび出^だされ、上行^{じやうぎやう}菩薩^{ぼさつ}への付嘱^{ふぞく}をもつて終^おわる。

「過去」「現在」「未来」が、この儀式^{ぎしき}に納^{おさ}まっている。

このような「永遠^{えいえん}」にして「無限^{むげん}」の仏^{ほとけ}の世界を示すためには、虚空^{こくう}会^{かい}という、時空間^{じくうかん}の枠^{わく}をたたき破^{やぶ}った舞台^{ぶたい}こそがふさわしいのではないだろうか。

遠藤^{えんどう} 民衆^{みんしゆう}に分^わかりやすく、象徴^{しやうちゆう}的に、映像^{えいざう}的に表現^{ひやうげん}しようとしたのですね。

名誉^{めいぎ}会長^{かいざう} 虚空^{こくう}会^{かい}は、特定^{とくてい}の場所^{ばしょ}・空間^{くうかん}を超^こえているゆえに、逆^{さか}に言^いえば、どこの場所^{ばしょ}にも通^{つう}じている。特定^{とくてい}の時点^{じてん}・時間^{じかん}を超^こえているゆえに、いつの時代^{じだい}、いつの時^{とき}にも通^{つう}じているのです。

ただ、ここで考えなくてはならないのは、虚空^{こくう}会^{かい}だけでなく、二^に処^{しよ}三^{さん}会^{かい}という法華^{ほふわ}経^{きやう}全體^{ぜんたい}の流れ^{なが}が、何^{なに}を表^{あらわ}そうとしているかです。

須田^{すだ} 霊鷲^{りやうじゆ}山^{せんえ}会^{かい}と虚空^{こくう}会^{かい}の關係^{けんがひ}は、生命^{しやうめい}論^{ろん}のうえから、非常^{ひじやう}に深^{ふか}い意味^{いみ}をもっているよ

うに思うのですが。

名誉会長

前靈鷲山会

↓虚空会

↓後靈鷲山会

という流れは、

いわば

「現実」

↓悟りの世界

↓現実」という流れです。

より正確に言えば、「悟り以前の現実」↓悟りの世界↓悟り以後の現実」という流れになっている。

時空間や煩惱・生死に束縛された現実の大地から、鎖をたたき切って、それらを見おろ

す虚空の高き境涯に到達しなければならぬ。

その高みから見れば、一切の苦しみ、悩み、喜怒哀楽も、すべて浮島のごとく小さな世

界での一喜一憂にすぎないことが、ありありと見えてくるのです。大聖人は「苦をば苦と

さとり樂をば樂とひらき苦樂ともに思い合せて南無妙法蓮華經とうちとなへゐさせ給へ、

これあに自受法樂にあらずや」(御書一一四三ツ)と仰せです。

これが虚空からの眼であり、仏法の眼であり、信心の眼です。

そうなるための修行が唱題行です。大聖人は「今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱

え奉りて信心に住する処に住空中なり虚空会に住するなり」(御書七四〇ツ)と仰せです。

私たちが御本尊に勤行・唱題している信心の姿は、そのまま「虚空会」に連なっているのです。

これほど、ありがたいことはない。戸田先生は、勤行・唱題は「我ら凡夫の日常において、これほど崇高なる場はないのです」と、よく言われていた。

虚空に昇るといふのは、透徹した信心によって、我が境涯を引き上げるといふことといえる。

「前靈鷲山会→虚空会」の流れには、こういう意義がある。

斉藤　そうしますと、続く「虚空会→後靈鷲山会」という流れは、勤行・唱題で得た仏界の生命力に基づいて、再び生活・社会の現実へ戻っていく、挑戦していくということに当たりますね。

名誉会長　そう。生活即信心であり、信心即生活です。法華経は、絶対に現実から離れない。ここに偉大さがある。

ひとたび虚空会に住してみれば、厭うべき現実も、今度は、仏界を証明するための現実となる。苦しみ、悩みも、信心を証明し、信心を強めるためのものとなる。煩惱即菩提で

す。変毒へんどく為藥いやくです。

汚れた九界きゅうかいの世界から仏界ぶつがいを開く、すなわち「九界即仏界」が「前靈鷲山会ぜんりょうじゆせんえ↓虚空会こくうえ」
といえよう。今度は「仏界即九界」で（虚空会↓後靈鷲山会ごりょうじゆせんえ）、九界に勇いさんで救済者きゆうさいしやとして
入はいっていった時、汚れた九界の穢土えいどが、仏界に照てらされた寂光土じやくこうどになっていく。穢土即寂
光土です。

その時は、無常むじよう・苦く・無我むが・不淨ふじようのこの世が、常じよう・楽らく・我が・淨じようの世界になっていくのです。
「妙法五字の光明こうみょうにてらされて本有ほんぬの尊形そんぎようとなる」（御書二二四三頁）と、大聖人は仰おほせ
です。序品じよほんの登場人物とうじようじんぶつに象徴しやうちゆうされる九界の生命は、すべて妙法に照らされ、凡夫ぼんぷが凡夫の
ままで、最高さいこうに尊たつき本来ほんらいの姿すがたとなつて、現実社会げんじつに輝かがきを放はなつていくのです。

現実から虚空会に、虚空会から現実へ——この往復作業おうふくさぎように「人間革命の軌道きどう」がある。
小我しょうがから大我だいがへの境涯きやうがいの革命があるのです。

人生は、目の前の現実にとらわれてはいけけない。理想りそうを目標めざし、現実を超こえねばな
らない。

一方いつぽう、現実から遊離ゆうりしてもならない。地に足あしが着ついていなければ、何も変わらない。

多くの人生が、また多くの宗教が、社会の現実げんじつに「妥協たきようし埋没まいぼつ」するか、「隔絶かくぜつし逃避とうひして別世界をつくらう」とする。そのどちらも誤りあやまです。

遠藤 日顕宗にっけんしゅうは、両方りやうほうの誤りおかを犯かしています（笑い）。

名誉会長 法華經ほんぎの本義はどちらでもない。虚空こくうという生命の高みから現実を見おろしつつ、その現実へ「変革者へんかくしや」として、かかわっていく生き方を教えるのです。

「変革の宗教」としての法華經の特徴は、二処に三会しよさんねという全体ぜんたいの構成こうせいそのものに、見事みごとに表現ひようげんされているといえるでしょう。

斉藤 よくわかりました。「変革の宗教」といえば、特に日蓮大聖人の仏法の著いちじるしい特徴です。

名誉会長 そう。実は、大聖人の仏法と釈尊しやくそんの仏法の特徴とくしつの違ちがいを、この「二処三会」の構造こうぞうを借りて説明せつめいすることができ。

須田 どういうことでしょうか。

名誉会長 釈尊の仏法は、どちらかといえば、靈鷲山りやうじゆせんから虚空会えへ、すなわち現実生活から、仏の智慧ほとけの世界を求めもとていく仏法です。虚空会で説とかれる寿量品じゆりやうほんの文底もんていに秘ひし沈しずめ

られた「南無妙法蓮華經」が目標であり、ここに到達しようとする仏法です。

これに対し、寿量文底から靈鷲山へ、すなわち「南無妙法蓮華經」から現実生活へと向かう方向が強く出てくるのが大聖人の仏法です。現実変革を目指す仏法であり、民衆の中へ慈悲の行動を展開していくのが、その実践です。

齊藤　そうしますと、「上求菩提（上は菩提を求め）」「下化衆生（下は衆生を化す）」という菩薩の生き方のうち、釈迦仏法は「上求菩提」に、大聖人の仏法は「下化衆生」に、それぞれ力点を置いていけると見ることもできるのではないのでしょうか。

名誉会長　その通りだね。もちろん「下化衆生」のためには、絶えざる「上求菩提」が必要となることは当然であるが――。

これは、釈尊の「從因至果」の仏法と、大聖人の「從果向因」の仏法の違いといってもよいだろう。

少し難しくなるけれども、端的に言えば、從因至果とは「因從り果に至る」ということで、九界の衆生（因）が、仏界（果）を求めて修行していくことです。

從果向因とは、逆に、「果從り因へ向かう」ことで、御本尊への唱題によって即座に得

られた仏界（果）を根底にしつつ、現実の九界（因）の場へ向かうことです。

あえて譬えれば、釈尊の仏法は、ふもとから頂上を目指して、山を登っていくようなものです。その途中、頂上がいかに素晴らしいか、言葉では説明されるけれども、実感としては分からない。本当に頂上にたどり着けるのかどうかも保証されていない。道に迷うことも、遭難することもあるでしょう。

それに対し、大聖人の仏法は「直達正観」であり、原理的には、直ちに頂上に立つようなものです。そこで、素晴らしい眺めを実感として満喫し、その喜びを何とか人々に伝えようと、ふもとへ降りていくのです。社会に入っていくのです。

齊藤 法華経で、滅後の弘法を託されたのも、山を登ってきた、迹化の菩薩ではなく、すでに頂上に立ち（仏果を証得し）、社会へ降りていく地涌の菩薩です。

名誉会長 私どもの信心と実践でいえば、日々の勤行・唱題は、一往は九界から仏界へ至るための修行であり、從因至果といえます。

しかし再往は、それ自体が即仏界に連なっている。そこから現実生活に妙法の智慧と慈悲を広げていく、從果向因の活動の出発点となっている。

御本尊に南無し、唱題しゆく信心のなかに、この從因至果、從果向因の二方向が同時に包含されている。ここに大聖人の仏法の卓越性がある。

齊藤 「南無〓歸命」でいえば、妙法蓮華經に「歸して」いく、そして次に妙法蓮華經に「命いて」行動していく——この歸・命の双方向が南無妙法蓮華經に含まれているわけですね。

仏の悟りの境涯自体に、この双方向があるのだと思います。そうでなければ眞の悟りとは言えないのではないのでしょうか。その意味で、仏の悟りの全体像を二処三会で表し、人々に伝えようとしたのだとも考えられます。

名誉会長 それは、これからの探究課題にしよう。

いずれにしても、法華經は不思議な經典です。仏の智慧は甚深無量であり、その悟りは頭では考えられないし、言葉でも表現し尽くせない。このように仏の智慧を賛嘆しながら、他方では、すべての人々に仏の智慧を開かせ、悟りを得させるのが、仏が世に出現した目的であると説く。

そして、そのために説かれるのが法華經であり、法華經を聞けば必ず成仏できると強

調する。たとえ仏の滅後であつても、法華經を聞いて一句でも一偈でも心にとどめた人は必ず成仏すると何回も説いています。

聞くだけで成仏できる。そのように法華經の功德を賛嘆しながら、悟りの内容は表立ってはいない。これほどしきりに自經の名を挙げて賛嘆している經典も珍しい。ここに法華經の不思議さがあり、秘密があります。虚空会や二処三会是、この法華經の秘密を解く一つの鍵だと言える。

遠藤 二処三会が仏の悟りの全体像を反映しているということは、仏の十号(十種の尊称)の一つである「如来」という言葉にもうかがえます。

大乘仏教では如来を「真如から来生するもの」ととらえています。つまり、「悟りの世界」である真如から現れ、慈悲と智慧の体現者として衆生を教え導いていく仏の異名を「如来」と呼んでいるわけです。

名誉会長 仏とは実践する人です。戦う人です。悟りの境地に安住しているのが、仏ではない。衆生のために、衆生を救うために九界の大地で戦い続ける人が仏です。如来です。大聖人は「古徳のことばにも心地を九識にもち修行をば六識にせよ」(御書一五〇六)

と仰せおほです。「心地しんじを九識くしきに」とは「虚空会こくうえに住するじゆう」ことにあたり、「信心しんじんに住する」ことにあたるでしょう。「修行しゆぎやうをば六識りくしきに」とは、どこまでも現実げんじつを離れてはならないということと言えないだろうか。

須田　そうしますと、この御文ごもんも「三処さんしよ三会さんかい」、特に虚空会こくうえから後靈鷲山会ごりやうじゆせんえへの意義いぎを教おしえてくださっていると拝はいされます。「真如しんによから来生らいしやうする」「如来にやらい」の精神せいしんを示しめされているといえますね。

齊藤　後靈鷲山会では、主おもだったものだけでも薬王菩薩やくおうぼさつ、妙音菩薩みやうおん、観世音菩薩かんぜおん、普賢ふげん菩薩などの菩薩たちが、表舞台おもてぶたいに登場とうじやうします。これらは、根本こんぽん的には如来行にやらいぎやうを行ずる菩薩であり、それぞれの力を發揮はつきして如来滅後めつごの法華經ほふくせんの広宣流布こうせんるふを助けるのだと思います。

名誉会長　虚空会こくうえの儀式ぎしきを経て、これらの菩薩ぼさつの現実げんじつにおける多彩たさいな働きはたらが説とかれている。ここに深い意義ふかがある。

遠藤　仏界ぶつかいの生命もとしづに命めいいて、智慧ちえと歓喜かんきを表現ひやうげんしていく姿すがたですね。

名誉会長　そうなるだろう。学会がくかいが世界で繰り広げている、仏法ぶつぽうを基調きちやうとした平和・文化・教育うんどうの運動うんどうも、この方程式ほうていしきに則のつとつたものにほかならない。

生命の永遠性えいえんせいの世界の鼓動こどうを、現実げんじつの上に反映はんえいし、現実を变革へんかくしていく——そこに法華経のもつ生き生きとした宗教性がある。文化創造ぶんかそうぞうのダイナミズムがある。

須田 日本では、仏教というと、宗教の世界に閉じこもっているような印象いんしょうが強いですが、これは大きな誤りあやまですね。

名誉会長 そのようなイメージをもたらしたのは、ひとえに、これまでの仏教指導者しどうしゃの責任せきにんです。

現実の社会はなを離れて仏法はありません。仏法即社会そくです。社会即仏法です。一民間人みんかんじんである私が、世界の識者しきしゃ・文化人と対話たいわを重ね、微力びりよくながら、人類じんるい的課題てきかだいの解決かいけつへの道を探求きゆうしているのも、ひとえに、この仏法者としての信念しんねんからなのです。

仏法の心、仏法の智慧ちえを、常に社会へ、世界へとダイナミックに展開てんかいしていく。それこそ真実しんじつの仏法です。宗教の世界に閉じこもるのは宗教の自殺行為じさつこういです。

法華経は「世間せけんの法が、そのまま仏法の全体ぜんたい」と説といていることを、大聖人は教えらおしれています（御書一五九七頁）。

生命の全体像としての二処三会

遠藤 虚空会が三世永遠に連なる世界だとすれば、そこで説法する釈尊も歴史的な存在としての釈尊を超えた、永遠の実在としての釈尊ということになりますね。

名誉会長 時間・空間の制約を離れた世界ですから、当然、歴史上の人物としての釈尊ではなく、いわば「永遠の仏陀」です。このことは、寿量品（第十六章）において久遠五百塵点劫の成道としてつぶさに説かれていくわけだが、その舞台設定が宝塔品から始まっているということになる。

とともに、その「永遠の仏陀」は、釈尊の悟った法の真理を体现している。その真理とは、私たちの生命に「七宝を以てかざりたる宝塔」（御書一三〇四）が厳として実在するという真理です。

会座の大衆が虚空に引き上げられたのは、この真理の世界に入ったということです。言い換えれば、すべての衆生が永遠の仏陀であるということだ。大聖人は「過去久遠五百塵

点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり」(御書一四四六頁)と仰せです。

虚空会は、十界の衆生がことごとく平等であるという世界です。衆生と仏との間に差別はないという世界なのです。

須田 衆生も仏も別々のものではない——「生仏一如」の世界ですね。観心本尊抄には「仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり」(御書二四七頁)と仰せです。仏の教えを聞く衆生(所化)も仏と同体であると。

斉藤 戸田先生は「自己の生命は即宇宙の生命であり、即仏の生命である」と喝破されました。その「我即宇宙」「宇宙即我」という点から見ますと、二処三会の流れは、現実の大地である霊鷲山から、大宇宙に広がる虚空会に昇り、そしてまた霊鷲山に戻ってくるという、その往復運動になっているようにも思えます。いわば小宇宙と大宇宙との交流のドラマです。観念ではなく実感として宇宙大の生命を体得していく——虚空会、二処三会はそのための儀式のように思えてなりません。

名誉会長 そう。二処三会は、生命の全体像、生命のダイナミズムを表現しようとしているのです。

たとえば「色心不二」を表している。

齊藤 御義口伝に「大地は色法なり虚空は心法なり色心不二と心得可きなり」(御書七四

二ツ)とあります。

名誉会長 また、二処三会は「生死不二」を表しているとも言えるだろう。

遠藤 はい。「皆在虚空(皆虚空に在り)とは我等が死の相なり」(御書七四二ツ)と、大

聖人は仰せです。「虚空」を「死の相」とすれば、靈鷲山が「生の相」と考えられます。

すなわち二処三会では、「生」↓「死」↓「生」という生命のダイナミズムが展開されている。そこに生死が不二であるという実相が表されているといえます。

名誉会長 そうなるね。このことは生死一大事血脈抄の「妙は死 法は生なり」(御書一三三六ツ)との仰せからも論じられると思う。

齊藤 その場合、「死の相」である「虚空」が「妙」にあたり、「生の相」である「靈鷲山」が「法」にあたりますね。

名誉会長 そうです。「虚空」は永遠不変の世界であり、仏の悟りの世界を象徴している。「妙法」に約せば「妙」といえる。なぜならば、凡夫には思議できない「不可思議」

の世界だからです。

それに対して、現実の場としての靈鷲山は「法」にあたる。「法」とは、現象・事象を意味する。「生の相」です。

この「妙」死「法」生が不二なのです。

更に、この生死不二という宇宙の真相は、虚空会における二仏並坐でも表されています。

須田 「釈迦多宝の二仏も生死の二法なり」（御書一三三七頁）と御書にあります。現在の二仏である釈迦如来は「生」を、過去の仏である多宝如来は「死」を表しています。

名誉会長 生死こそ根本の課題です。

翻つてみれば、法華経そのものが「生死の二法」を説いているのです。序品第一が「如是我聞」の「如」で始まり、普賢品第二十八が「作礼而去」の「去」で終わっていることを踏まえて、大聖人は「如去の二字は生死の二法なり」（御書七八二頁）と述べられています。

二処三会には、まだまだ、汲めども尽きぬ智慧が込められていると考えられます。今後

も更に論じる機会があると思う。

大事なことは、私どもは日々、この二処三会を行動しているということです。日蓮大聖人は虚空会の儀式を借りて、御自身の内証の悟りを御本尊に示してくださった。この御本尊を信受している私どもこそ、法華經のダイナミズムを、そのまま生活に反映させているのです。

これまで歴史上、どれほど世界の多くの人々が法華經を学び、読誦してきたか計り知れない。しかし、私どもこそが、法華經の本義を生きているのです。その栄光と誇りを自覚したい。

妙法を行じる私どもの人生は、一瞬一瞬が虚空会という「真如実相の世界」に連なり、「永遠の世界」を呼吸している。妙法の大宇宙から、光が、風が、音楽が、そして福德の香気が流れこみ、私どもを包んでいます。

妙法の流布に生きる人生の「今」は、常に「永遠」と一体の「今」です。私どもの生活の中で、「永遠」と「今」が出あい、交流し、交響している。人生が「永遠の今」というべき常楽の連続となるのです。

ゆえに、信仰者にとつて、一瞬は一瞬ではない。一日は一日ではない。そこに永遠性の価値を含んでいる。時がたてばたつほど黄金と輝く一瞬であり、一日なのです。

この無上道の人生を教えたのが法華経です。

そのための釈尊の第一声は何であつたか。次から、いよいよ「方便品」に入つていこう。

方便品①

方便——巧みなる「人間教育」の芸術

名誉会長　今は乱世らんせです。思想も社会も乱みだれている。

そうしたなか、心ある人々は、日本と世界の行く末すえを真剣しんけんに考え始はじめた。このままでは、柱はしらのない家のように、人間も社会も崩くずれていくのではないか——そういう危機感ききかんを強つよく抱いだいているようです。

そして、人間が人間として、どう生きるのが正しい軌道きどうなのか、その「道」を模索もさくしている。宗教についても、遠い無関係の世界のものとしてではなく、どう見ればよいのか、どう考えればよいのか、どう関かかわるべきなのか、切実せつじつな関心が寄せられ始めたようだ。

その意味いみでも、この座談会ざだんかいで、法華経を通して「二十一世紀の宗教」を考えていくことは重大じゅうだいな意義いぎがあると思う。

きようも、語りに語っていこう。

斉藤 はい。よろしくお願いします。

ここから、いよいよ、方便品(第二章)です。私たちは、朝夕の勤行で読誦していますので、親しみがありません。

方便品から

「諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以つての故に、世に出現したもう……諸
仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが
故に世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現し
たもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したも
う。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したも
う」

(法華經一六六頁)

諸仏世尊は、ただ一つの重大な目的のために、この世に出現されるのである。……諸仏世尊は、衆生に仏知見を開かせ、清浄な境界を得させたいと思うがゆえに、この世に出現されるのである。衆生に仏知見を示したいと思うがゆえに、この世に出現されるのである。衆生に仏知見を悟らせたいと思うがゆえに、この世に出現されるのである。衆生に仏知見の道に入らせたいと思うがゆえに、この世に出現されるのである。

また、池田先生による「方便品・寿量品講義」も聖教新聞紙上で連載されています。

方便品は、法華經二十八品の中でも、譬喩品(第三章)、化城喩品(第七章)について長い章です。私たちが読誦している、冒頭から諸法実相・十如是までの部分は、方便品全体の二十分の一ほどにすぎません。

しかし、日寛上人は、そこまでに方便品の最重要の法門が説かれていて十分であると述べられています。

名誉会長 そうだね。法門的に見れば、方便品は、本門の寿量品(第十六章)とともに、法

華經の最重要の章です。南無妙法蓮華經の意義を知るうえで方便品の理解は欠かせない。その意味でも、初めに方便品全体の展開を見ておいたらどうだろうか。

方便品の展開

須田 はい。釈尊は序品で無量義処三昧という瞑想に入っていました。方便品では、釈尊がこの三昧から立ち上がり、突然、舍利弗に対して「諸仏の智慧は甚深無量なり。其の智慧の門は難解難入なり」（法華經一五三）と、「仏の智慧の素晴らしさ」を語り始めます。

名誉会長 法華經における釈尊の第一声だね。この第一声に意味がある。法華經が仏の智慧をそのまま説こうとした随自意の教えであることが劇的に表現されています。

甚深無量の仏智は、仏にしか分からない。だから釈尊が、だれに問われるのでもなく、自ら諸仏の智慧を賛嘆し始めたのです。方便品冒頭の説法が「無問自説」の形式を採っているのも、問うことさえできないほど、仏の智慧は深く、無量だからです。

*無問自説 「問い無くして自ら説く」と読む。質問がないのに、仏が自らの意志で法を説くこと。

遠藤 確かに、仏が成就した法は「未曾有の法」であり「第一希有難解の法」であるから、仏以外には分からないと説いています。

名誉会長 「ただ仏と仏のみが諸法の実相を究め尽くしている（唯仏与仏。乃能究尽。諸法

実相）」（法華經一五四頁）とあるね。

智慧第一とたたえられた舍利弗に向かって「お前たちには到底わからない」と、いきなり決めつけ（笑い）、突き放したわけですから、皆、驚いたことでしょう。

須田 対告衆になった舍利弗は、ショックで心臓が止まりそうになったかもしれませんか（笑い）。

斉藤 舍利弗は、いわば二乗のチャンピオンであり、自他ともに一番優秀だと認めていた。その舍利弗の智慧も遠く及ばないと宣言することで、仏の智慧の素晴らしさが強調されているわけです。

遠藤 作劇法としても、見事ですね（笑い）。ドラマチックな効果をあげています。

名誉会長 その通りだ。そこで問題は、その智慧の中身は何かということになる。

遠藤 方便品では、仏と仏とが成就した法を「諸法実相」と表現しています。天台はこ

れを一念三千の法理として展開し、日蓮大聖人は南無妙法蓮華經と説かれました。

名誉会長　そう。したがって、方便品の冒頭での仏智の賛嘆は、文底から言えば、南無

妙法蓮華經の賛嘆にほかならない。そこに、私たちがこの部分を読誦する最大の理由があります。

それでは、「妙法」という真実の「仏の智慧」を説き出した章が、なぜ「方便品」になっているのだろうか。

遠藤　なぜ「仏智品」でもなければ「真実品」でもないのか——確かに、ここに方便品の核心があると思います。

須田　それを考えるうえでも、もう少し、方便品の説法の流れを追いたいと思います。

仏の智慧を賛嘆してやまない釈尊に対し、一座の疑問を代表して、舍利弗が「ぜひ仏の真実の法を説いてください」と嘆願します。三回お願いして、やっと三回目に釈尊は応じ、説き始めようとする。

遠藤　その大事な時に、五千人の増上慢の僧尼や信者が座を立っていつてしまいます。

釈尊は、去る者は追わずで、構わずに黙って去らせませす。

名誉会長 この「五千の上慢」については、いろいろ論ずべきことがあるが、増上慢の

人間は、一番大事な時にいなくなるものです。

釈尊は、厳然と舍利弗に宣言する。

「是の如き増上慢の人は、退くも亦佳し。汝今善く聴け、当に汝が為に説くべし」(法華

經一六五)

そして諸仏がこの世に出現した目的——「二大事因縁」とは、衆生をして仏知見(仏の

智慧、仏界)を開かしめ、衆生に仏知見を示し、仏知見を悟らせ、仏知見の道に入らせる

ことであつたと教えるのです。

須田 このように説かれます。「諸仏・世尊は、ただひとつの偉大な仕事を目的として

(唯一大事因縁を以つての故に)のためにのみ、出現される」(法華經一六六)と。

そして、その「仏の出現の唯一の目的」である「偉大な仕事」の内容が、「開・示・

悟・入」の「四仏知見」として明かされます。

名誉会長 衆生の仏知見(仏界)を開かせるということは、衆生に仏知見がそなわつて

いるということです。仏知見があるのは、衆生が本来、仏だからです。つまりこれは「衆

生こそ尊極そんごくの存在そんざいなり」という一大宣言いちだいせんげんなのです。

遠藤 いわゆる「三乗方便・一乗真実」さんじようほうべん いちじようしんじつということですね。

「三乗」とは、二乗しやうもんじやう（声聞乗・縁覚乗）と菩薩乗です。乗とは、「迷い」から「悟り」へ運ぶ乗り物のことで、仏の教えのことです。声聞のための教え、縁覚のための教え、菩薩のための教えという意味いみです。

しかし、三つの別々の教えがあるのではない。仏の教えには、ただ「一乗」があるだけだということです。「二乗」とは「唯一ゆいいつの教え」という意味です。それは「仏に成るための教え」であるから「一仏乗」いちぶつじやうとも言います。

名誉会長 衆生しゆじやうの側がわから見ると、三乗という別々の教えを説とかれているように見えるが、仏の側から言えば、ただ一仏乗があるのみだということです。

「二仏乗」とは、全人類ぜんじんるいを仏にする、全人類を「開示悟入」かいじごにゆうさせる教えです。

須田 三乗は、一仏乗に導き入れるための「方便」ほうべんの教えであり、仏の「真意」しんいは一仏乗にあるということですね。

方便品ほうべんでは、この三乗を開いて一仏乗を顕あらわすという「開三顯一」かいさんけんいちについて、過去かこの諸しよ

仏、未来の諸仏、現在の十方諸仏、そして釈尊自身に当てはめていきます。それぞれの中には、種々の大切な法門が説かれています。ここでは省略します。要は、釈尊も含めて一切の仏が教えを説く真意は、一仏乗にあるということです。

なお、開三顯一の説法は方便品で終わるわけではありません。人記品（第九章）まで続きます。法華経前半（迹門）の大テーマと言えます。

法華経は秘妙方便

名誉会長 方便品全体の流れを見ると、開三顯一が主題となっているが、その前提として「方便」の思想があることが分かる。実は、迹門の開三顯一だけでなく、本門寿量品の開近顯遠の説法においても「方便」はキーワードになります。つまり、始成正覚が方便で、久遠実成が真実であると明かされていく。

齊藤 法華経全体から見れば、開三顯一以上に「方便」のほうが重大なテーマだとすら言えるかもしれません。

遠藤 方便品の「方便」は、サンスクリット本では「ウパーヤ・カウシャリヤ」と記さ

れています。「ウパーヤ」という語は、英語でいうと「アプローチ」に当たり、「接近」

「接近の手だて」という意味です。「カウシャリヤ」とは「優れた」「巧みな」という意味

です。したがって、方便品の「方便」とは「巧みなる接近（の手だて）」という意味にな

り、漢訳では「善巧方便」と訳されます。

名誉会長 要するに「方便」とは、衆生を成仏へと導く「教育」の方法であり技術で

す。人間の偉大な可能性を、最大に開花させる——ここに法華經の心があり、そのために

「方便」を説く。方便とは、広い意味での「人間教育」の手だてといえないだろうか。

実は、初代会長・牧口先生が教授法を図式的に記したメモに「1開 2示 3悟 4

入」とあるのです。牧口先生は、仏が衆生を導く方法を、教育方法として取り入れられて

いた。

遠藤 それは知りませんでした。しかし、とても納得できます。

牧口先生の教育の主眼は、どこまでも生徒自身の可能性を開くことでした。「知識の切

り売りや注入ではない。自分の力で知識することの出来る方法を会得させること、知識の

宝庫を開く鍵を与えることだ」(『創価教育学体系』第五編第二章)と。

名誉会長 牧口先生は、教育の混乱の原因は、その目的があいまいなことであるとし、

「教育の目的は児童を幸福にすることである」とされた。当時、国家の役に立つ人間をつくるのが教育の目的であると多くの人々が考えていた時に、余りにも画期的な「児童本位」「人間本位」の教育観であつた。

この信念から、創価教育の眼目も、一人一人が「幸福になる力を開発する」とこととされたのです。

そして、医学にも技術があり、農業にも工業にも技術があるように、教育にも技術が必要である。機械的な「注入主義」でも、無策の「人格主義(感化主義)」でもいけないと主張された。技術——すなわち「方便」です。

そして教師を「無技術」「技術」「芸術」と三段階に分けられたのです。

どう子どもたちを幸福にするか。どう子どもたちの「幸福になる力」すなわち「価値創造の力」を引き出し、開示悟入させるか。この一点に、牧口先生は全精魂を傾けられた。

それは学者の机上の教育論ではなく、現実の教育実践の中で、子どもたちを愛し、子ども

もたちを救^{すく}いたいという慈愛^{じあい}から生^なみ出^だされた教育^{けい育}の体系^{たいけい}であつた。

斉藤 子どもたちへの慈愛^{じあい}から生^なまれた知恵^{ちえ}だつた——そこに創価^{くわ}教育学^{けい育}の生命^{せいめい}がある
と思います。

それで思^{おも}ひ出^だされるのが、釈尊^{しやくそん}が仏法^{ぶつぽう}を説^とき始^{はじ}めるとき^{とき}の悩^{なや}みです。自分^{きん}が悟^{さと}つた法^{ぽう}を
説^とくべきか否^{いな}か、釈尊^{しやくそん}は迷^{まよ}いに迷^{まよ}います。

なぜ釈尊^{しやくそん}は逡巡^{しゆんじゆん}したのか。そのとき^{ようす}の様子^{ようす}を、方便^{ほうべん}品^{ぽん}には、こ^こう説^とかれていま^{いま}す。

「私は仏眼^{ぶつげん}をもつて衆生^{しゆじやう}を見^みた。彼等^{かれら}は貧^{ます}しく、幸福^{こうふく}への智^ち慧^えもなく、生^{しやう}死^じの苦^{くる}しみは
絶^たえ間^まなく続^{つづ}いてい^いる。欲^{よく}望^{ぼう}に執^{しゆ}着^{じやく}するありさまは、牛^{うし}が自^じ分^{ぶん}の尻^{しつ}尾^ぽを追^おうがこ^こときであ
る。貪^{むさぼ}りで自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}をおお^おい、『大^{だい}いなる仏^{ほとけ}』と『苦^く悩^{のう}を断^{だん}ずる法^{ぽう}』を求^{もと}めようとしな^{ない}い。

このよ^{よう}な衆生^{しゆじやう}のため^{ため}に、私は大^{だい}悲^ひの心^{しん}を起^{おこ}した」(法華經一八五、趣意^{しゆい})と。

遠藤 そして、衆生^{しゆじやう}の余^{あま}りの救^{きう}い難^{がた}さに愕^{がく}然^{ぜん}とし^{した}たのですね。

「どのよ^{よう}に救^{きう}えばよ^{よい}いのか。悟^{さと}つた法^{ぽう}をそのま^まま説^とくと、彼等^{かれら}は信^{しん}ずること^{こと}がで^{でき}な
くて、反^{はん}対^{たい}に法^{ぽう}を破^は壊^{かい}し、悪^{あく}道^{どう}におちてしま^{しま}うだ^だらう。それなら、い^いつそのこ^こと説^とか^かない
でおい^{おい}たほう^{ほう}がよ^{よい}いのか。過^か去^この仏^{ぶつ}と同^{どう}じよ^{よう}な方^{ほう}法^{ぽう}で説^とくべきか」(法華經一八六、趣意^{しゆい})

齊藤　その時、十方の仏が、釈尊をこう励まします。「すべての仏と同じように、方便力を用いなさい。私たちも皆、そうしてきたのだから」（法華經一八七、趣意）

それを聞いて釈尊は「仏のおっしゃる通りにします」と喜び、決意する。

「我濁惡世に出でたり　諸仏の所説の如く　我も亦隨順して行ぜん」（法華經一八七）

この場面は、先生の小説『新・人間革命』の「仏陀」の章で、学ばせていただきました。

名誉会長　釈尊は「大悲の心」ゆえに悩んだのです。慈悲の「悲」とは「同苦」を意味

する。「救いたい」という思いがあるから、「どう救えばよいのか」と悩むのです。

そういう慈悲があるからこそ智慧がわく。それが「方便力」です。「人間教育」の芸術です。

仏とは、ある意味で、悩み続ける人のことかもしれない。人々の「幸福になる力」を開くために。自身の使命を果たすために。

齊藤　私たちが日々読誦している寿量品の最後の部分に「以何令衆生」（法華經五一〇）

とあります。「以何」とは「何を以ってか」どのようにして」という意味です。

ここにも、人々の幸福のために、どうしたらよいか常に考え続けているという仏の慈悲が表されています。

名誉会長 方便品に「種種因縁。種種譬喩」(法華經一五三)とあるが、仏は相手に応

じ、さまざまな因縁や譬喩を使つて、正しい軌道に導こうとする。この仏の力を「方便力」と言います。

これは、その人のために、今、何を教えたらいいかを知る力です。

言い換えれば、人々の生命状態を洞察する力であり、適切な教えを選びとる智慧の力で、また、いかなる衆生をも成仏へと育んでいこうという慈悲の力です。その根源には甚深無量の仏智があるのです。

遠藤 天台は根源の仏智そのものを「実智」、そこから生まれる方便力を「權智」と呼んでいます。その權實の二智を、釈尊自らが贊嘆しているのが、方便品の冒頭の部分です。

須田 「方便力」とは、牧口先生の用語で言えば、「技術」の上の「芸術」、そのなかでも、人間教育の最高の芸術ですね。

齊藤 方便とは何か――。

てんだい
天台は『法華文句』で、方便を①法用方便②能通方便③秘妙方便の三種類に分け、秘妙方便こそ「方便品」の方便であると言っています。

「法用方便」とは、衆生の機根に合わせて種々の法を説き、その法の働き（用）で、人々に応じた利益を与える教えです。「能通方便」とは、真実に入る門となる教えを言います。通り過ぎる門なので能通（能く通る＝通ることが出来る）といえます。

これらはいずれも「方便品の方便」ではなく、「爾前權教の方便」の二つの側面です。法用方便は当面の利益を与える面、能通方便は真実へと導く面と言えます。

遠藤 一例を挙げれば、低い教えに満足しているのを叱った「二乗彈呵」は、それによつて真実に向かわせようとする能通方便であるとともに、利己主義の蒙を啓くなどの利益を与えているので、法用方便の面も含んでいます。

ある時は衆生を喜ばせ、ある時は厳しく弾呵し——「飴と鞭」と言うとき、言葉が悪いですが……。

名誉会長 悪すぎる（爆笑）。一面の真実を突いているかもしれないが（笑い）。
仏の教育法は、まことに巧みです。

仏は「天人師」と呼ばれ、また「調御丈夫」とも呼ばれます。「天人師」とは人間だけでなく天界の神々の教師でもあるとの意味です。また「調御丈夫」とは「人を調和させるのが巧みな人」とも言える。最高の目的観に立って、人々を誤りなく指導していくからです。仏とは「人間教育の最高の教師」なのです。

ともあれ、方便品で「正直に方便を捨て」と言われている方便が、法用・能通の二つの方便です。

これに対し、「秘妙方便」は、まったく違う。捨てるべき方便ではなく、そのまま「真実」である「方便」なのです。

遠藤 方便といえは、「ウソも方便」（笑い）ではないですが、あくまで「手段」であつて、「真実でないもの」と思い込みがちです。だから「秘妙方便」が方便でありながら真実というのは、理解するのが非常に難しいですね。

名誉会長 確かに難しい。戸田先生も、秘妙方便について、どう皆に分からせようかと苦心されていた。

方便には「接近する」「近づく」という意味があるわけだが、それにも二つの方向性が

あると思う。一つは、現実げんじつから悟りさとへ近づかせる方向ほうこう。これが法用・能通方便ほうゆうのうつうほうべんです。もう一つは、悟りの境地きょうちから現実へと近づく。その悟りを現実世界に説明し表現せつめいひょうげんしていく方向。これが秘妙方便ひみょうほうべんです。

同じ方便でも、方向がまったく逆さかになっている。

須田 そうしますと、前の章で論じていただいた「三処三會さんしよさんかい」の構造こうぞうとも重なりかさますね。「靈鷲山りやうじゆせんから虚空こくうへ」が法用・能通方便に、「虚空から靈鷲山へ」が秘妙方便にと。

名誉会長 そうとも言えるでしょう。

仏ほとけの智慧ちえは甚深無量じんじんむりやうです。言語げんごを絶ぜつし、説くことのできない究極きゆうきよくの法である。方便品ほうべんには「止やみなん止みなん須すく説くべからず 我が法は妙みよにして思おもい難がたし」(法華經一六三)とある。

そうした、言葉ことばにもならず、考えることもできない眞実しんじつを、言葉で説いたり、何らかのかたちで表現するとすれば、これはもう方便としかいいようがない。説くことのできない眞実を、慈悲じひゆえに、あえて説いた。それが秘妙方便であり、仏の智慧と一体いつたいの方便なのです。

遠藤 天台は、法用・能通を「体外の方便」、秘妙を「同体の方便」と立て分けています。つまり法用・能通は仏の真実の智慧の外に立てられた方便、秘妙は真実と一体の方便ということ。今、言われたことと同じですね。

名誉会長 秘妙方便こそ方便品の心であり、そこに「方便品」と名づけられたゆえんがある。また、秘妙方便の「秘」とは、ただ仏だけが知っているということ。すなわち一切衆生が仏だという真実を、仏だけが知っている。

そして、その真実は秘められているにもかかわらず、縁にふれて顕現する。そうした不可思議な生命の実相を「妙」という。

十界論で言えば、仏界は九界の衆生には「秘」されている。しかし、縁にふれて九界の上に顕れてくる。この不可思議が「妙」です。

戸田先生は「秘妙方便」について次のように教えられています。

「私も皆さんも凡夫です。しかし、われわれ自身、理のうえでは仏なのです。成仏とは、自分が仏であることを知ること、これは秘密にされ、妙がかくされているのです。これを秘妙というのです。仏が、凡夫の姿で、苦勞させるためにつくられたのです。これが、

秘妙方便ひみょうほうべんの原理げんりです。皆さん方は、地涌じゆの菩薩ぼさつなのです。この原理が心の奥底おうていでわかれ
ば、方便品ほうべんが読めるのです」

「われわれが、ただの凡夫ぼんぷでいるということは秘妙方便であり、真実しんじつは仏ほとけなのでありま
す。われわれの胸むねにも御本尊ごほんぞんはかかっているのです。すなわち御仏壇ごぶつだんにある御本尊
即そく私たちと信ずるところに、この信心の奥底があります」

凡夫がそのまま仏である。これは不思議ふしぎです。思議がたし難い。「妙みょう」です。法華經を信じ
ない人には、とても分からない。「秘ひ」です。

齊藤 日蓮大聖人は、御義口伝おんぎくでんで「一切衆生実相の仏なれば妙なり不思議ふしぎなり謗法ほうぼうの人
今これ之を知らざる故ゆえに之を秘ひと云う」(御書七一四)と、秘妙方便の意義いぎを明あかされていま
す。

名誉会長 そう。自分自身じしんが仏なのだと自覚じかくすれば、秘妙方便が分かったことになる。

大聖人は「妙法蓮華經と唱となへ持つと云うとも若もし己心こしんの外ほかに法ありと思はば全く妙法みょうぼうに
あらず麤法そほうなり」(御書三八三)と仰おほせです。

いずれにしても、秘妙方便の「妙」とは、人間生命じんがいのそれ自体じたいの「不可思議」なのです。

すなわち、九界はすべて仏界の当体である。九界即仏界です。しかし悟つてみれば、仏界といつても凡夫の九界を離れては顯れない。九界に即してのみ顯れる。仏界即九界です。目的である仏界を「眞実」、そこに至つていない九界を「方便」とすれば、方便即眞実（九界即仏界）であり、眞実即方便（仏界即九界）なのです。これが秘妙方便です。例えば、御本尊を信受したあとの九界の苦惱は、苦惱のための苦惱ではない。すべて、より信心を奮い起こして仏界を強めるための悩みであるし、それを乗り越えて仏界（眞実）を証明するための「秘妙方便としての悩み」となる。悩みは、もつと成長しなさいと呼びかける「メガホン」なのです。

遠藤 大聖人は「妙法の五字は九識・方便は八識已下なり九識は悟なり八識已下は迷なり、妙法蓮華經方便品と題したれば迷悟不二なり森羅三千の諸法此の妙法蓮華經方便に非ずと云う事無きなり」（御書七九四）と仰せですね。

名誉会長 そう。森羅万象——人生で言えば、生も死も、喜びも悩みも、罰も功德も、生じる一切の現象、ありとあらゆる姿は、信仰者にとって、すべて妙法の表れであるし、妙法を証明する方便なのです。戸田先生は「罰も功德も方便です」と言われた。

例えば、一人の未入信みに入信の人がいる。何らかの悩みなやみがある。悩んでいる姿は地獄界じごくかいでしよ

う。その悩みがきつかけで信仰しんこうした。そうなれば、地獄界即仏界そくぶつかいであり、その悩みは仏界

に至るための法用・能通方便ほうつうほうべんだったといえる。どちらかといえは能通方便だろうか。

しかし、信心しんじんしてからも悩みはある。行き詰まりづまりもある。ただ今度は、何が起こつて
も、全部ぜんぶ、信心を証明しょうめいするための悩みである。秘妙方便ひみょうほうべんである。

いわんや広宣流布こうせんるふのための悩みであれば、菩薩界所具ぼさつがいしよぐの地獄界、仏界所具ぶつがいしよぐの地獄界で

しよう。こんな尊い悩みとうとはない。悩みの山に挑戦ちようせんすればするほど、乗り越えれば乗り越え

るほど、仏界は強つよまっていく。その意味で、信心が強ければ、マイナスは即プラスであ

り、罰ばちも即利益りやくなのです。人生のうえに起こる一切いっさいが功德くどくなのです。

今、どんな姿をしていても、一切が「成仏じやうぶつイコール人間革命」という今世こんせのドラマに

とつて、必要不可欠ひつようふかけつの一場面ばめん一場面である。「真実しんじつ」（仏界）を表あらわしている「方便ほうべん」（九界）

なのです。これが秘妙方便です。

大聖人は「苦くをば苦とさとらくり楽をば楽とひらき苦楽ともに思い合あわせて南無妙法蓮華經と

うちとなうへあるさあせ給たまへ、これあに自受法楽じじゆほうらくにあらずや」（御書二一四三六）と仰おほせです。苦

樂は九界きゅうかいであり方便ほうべん。妙法みょうほうを唱となえるのは仏界ぶつかいであり、仏ほとけの眞実しんじつの智慧ちえの世界です。

苦くるも樂らくも、信心しんじんという大きな高い境涯きやうがいから悠々ゆうゆうと見おろしていく。そして妙法みょうほうの喜びよろこを樂たのしく味あじわつていく——それが「妙法蓮華經方便品」を身讀しんどくしたことになるのです。

須田　よく分かりました。毎日、「妙法蓮華經方便品第二」と讀誦どくじゆしていますが、こんなにも深い意味いみを感じて讀んではいませんでした。

齊藤　今、語つていただいた「方便」觀かんは、生命えいめんの永遠觀えいえんからも論じられると思います。法華經ほふくきやうの五百弟子受記品ごひやくでしじゆきほん（第八章）には「衆しゆに三毒有りと示しめし 又邪見またじやけんの相そうを現げんず 我わが弟子是でしかくの如ごとく 方便しゆじやうして衆生しゆじやうを度どす」（法華經三六一）とあります。

たとえ、三毒強盛さんとうじやうの凡夫ぼんぶの姿すがたに生まれても、また邪見まよに迷つた姿に生まれても、妙法めづに目覺めざめてみれば、それは、同じように三毒強盛で、邪見に迷つた衆生しゆじやうを救すくうための方便である。

名誉會長　その通りだ。久遠くおんの妙法蓮華經みづかを自らも修行しゆぎやうし、人にも教おしえるという根本こんぽんの使命しめいに目覺めれば、それが分かる。そこに、最も深い人生觀もつとがあります。

妙法たもを持つた我々は、本来ほんらい、尊とうとい地涌じゆの菩薩ぼさつである。ともに虚空會こくうえで広宣流布こうせんるふを誓ちかいあつ

てきた同志です。戸田先生は、それを「思い出すんだ」とよく言われた。

また、私たちは凡夫です。しかし、願って凡夫の悩みの姿を表しているのです。「願兼於業」です。妙法（真実）の力を証明するための宿業（方便）です。だから絶対に、悩みを乗り越えられないわけがない。

皆、この娑婆世界という舞台に登場し、広宣流布というドラマを演じる主演俳優なので、す。

遠藤 演じているということ（方便であること）を、いつのまにか忘れて、悩める役そのものになりきり（笑い）、苦悩に埋没してしまふ場合もあります。それでは、いけませんね。

齊藤 秘妙方便を理解するために、もう少し続けたいと思います。

方便と真実の関係を「権実」でいえば、南無妙法蓮華經を信受する前と、信受した後では、権教（方便）の意味が変わってきます。大聖人は、信受する前を「体外の権」、信受した後は「体内の権」として、こう説かれています。

「所詮謗法不信の人は体外の権にして法用能通の二種の方便なり……今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱え奉るは是秘妙方便にして体内なり」（御書七一四頁）

いったん法華經（実教、真実の教え）の智慧の世界に入れば、それまでの仮の教え（權教）も、「体内の權」として、それぞれ、全体の中に正しく位置づけられ、「權」は「權」のまま、法華經を証明する分々の「真実」となるわけですね。

名誉会長　そうです。先ほどのたとえで言えば、入信する前のさまざまな人生体験は「体外の權」であり、法用方便・能通方便に当たる。

妙法の素晴らしさは、入信したあとの体験がすべて秘妙方便として輝くだけでなく、入信する前の体験までもが、すべて生きてくるのです。これが「体内の權」です。

戸田先生もよく「一生のすべての体験が生きてくるのだ。何ひとつ、塵も残さず、無駄はなかったことが分かるのです。これが妙法の大功德です」と言われていた。

須田　素晴らしい法理ですね。

名誉会長　秘妙方便は、いまだ妙法を持たない人であっても、本人は知らないが（秘）、実は妙法と一体（妙）であることを教えています。ゆえに、生命の奥底では、妙法を求めているのです。

御義口伝では「大謗法の人たりと云うとも妙法蓮華經を受持し奉る所を妙法蓮華經

ほうべんぽん
方便品とは云うなり」(御書七一四)と仰せです。このほか、秘妙方便については、論じたいことが尽きないが、法華經全体を貫くテーマでもあるし、別の機会にしよう。

ここで、特に明確にしておきたかったのは、先ほども触れた通り、仏法の「方便」思想は、そのまま最高の「教育」思想だということです。

須田 かつて池田先生が、青年に対してこう語られたことを思い出します。

「真の宗教性と、真の教育の精神とは、伸び伸びとした『人間全体の解放』という理想において、実は表裏一体なのである」と(一九九〇年十一月、創価教育同窓の集い)。

斉藤 真の教育の心と法華經の精神とは、表裏一体であるということですね。

牧口先生は「法華經と創価教育」と題して、こう述べられています。

「要するに創価教育学の思想体系の根底が、法華經の肝心にあると断言し得るに至った事は余の無上幸栄とする所で、従って日本のみならず世界に向ってその法によらざれば真の教育改良は不可能であると断言して憚らぬと確信するに至ったのである」(『創価教育学体系梗概』結語)

名誉会長 牧口先生は、ペスタロッツチなどの先駆者たちが、繰り返し繰り返し訴えてき



サーマン博士と池田名誉会長の会談
(1995年1月、ハワイ・ホノルル)

た「人間教育」の理想を、何とか根付かせたいと願われた。その「人間を幸福にする教育」の探究の結論として到達したのが、法華経だったのです。

例えばペスタロッチの言葉には、こうあります。

「人類に純粋な幸福を与える力というもの

ものはすべて技巧や偶然のたまものではない。それらはすべての人間の内に、人間のさまざまな本性といっしよにひそんでいるのである。それを引きだして育てることこそ、人類共通の願いである」

(梅根悟訳『隠者の夕暮』、世界教育学選集35
所収、明治図書出版)

この「人類共通の願い」を追求した果てに「教育革命」を主張され、その教育革命の実現には、法華経による「宗教革命」以外にないとされたのが牧口先生です。

この「人類共通の願い」である教育の精神について、もう少し深く見ていきたい。

ここに、コロンビア大学のサーマン博士（宗教学部長）のインタビュー記事があるので、冒頭のところを少し、読んでくれますか。

斉藤 はい。アメリカSGIのボストン二十一世紀センターの機関紙からですね。

質問——「社会における教育の役割について、教授はどのような考えをもっておられますか。また、この点につき、教授の考えに影響を与えたものは何ですか」。

こう答えておられます。

「私は、むしろこの質問は『教育における社会の役割は何か』であるべきだと思います。なぜなら、教育が、人間生命の目的であると私は見ているからです……」

名誉会長 ありがとうございます。まだ答えは続くけれども、私は、この一言に感動したのです。

博士は、質問のしかたが違うと言われている。「社会における教育の役割は何か」ではなく「教育における社会の役割は何か」と問うべきだと。ここには、博士の透徹した人間

観^{かん}がにじみ出ている。

つまり「教育は、社会の一部分ではない。社会から派生^{はせい}したものでもない。教育こそが、最初^{さいしよ}から人間とともにあり、人間の最も根元的な営みである」という見方^{みかた}です。

「人間」とは「教育」を離^{はな}れてありえない存在^{そんざい}なのだ。だからこそ「師弟^{してい}」が、根本^{こんぽん}の大事^{だいじ}となるのです。

須田 この場合^{ばあい}の教育は、機構^{きこう}や制度^{せいど}としての教育より、もつと深く、広い次元^{じげん}ですね。

名誉会長 そう。博士^{はかせ}は「教育が、人間生命の目的^{もくてき}である」と述べられている。言い換^かえれば——人間は何のために生まれたのか。何のために生きるのか。それは「教育によつて、生命の可能性^{かのうせい}を極限^{きょくげん}まで開くため」である、ということでしょう。

その究極^{きゅうごく}が（仏知見^{ぶつちけん}の）開示^{かいじ}悟入^{ごにゅう}です。

斉藤 博士は続いて、こうも語られています。

「私のこのような考えに影響^{えいきやう}を及ぼしているのは、仏陀^{ぶつだ}の教え^{おし}です。私の認識^{にんしき}では、仏教は、最も真実^{しんじつ}の意味^{いみ}において教育的な教えです」

「仏教は本来^{ほんらい}、宗教伝道^{でんどう}の運動^{うんどう}ではありません。むしろ宗教的な側面^{そくめん}をもった教育運動

です」と。

名誉会長 鋭い洞察だと思う。

人間教育と仏法は表裏一体なのです。ゆえに、牧口先生は教育から出発して法華經に至り、私は法華經を根底に、教育・文化運動を繰り広げているのです。

「仏教は教育運動」ということを、「方便」との関連で言えば、こうなるだろうか。

すなわち、自らの仏性を開くという「自己教育」を根本にして、同時に、さまざまな智慧を湧かせ、さまざまな方便（方法）を使って、人々の仏性をも開いていく運動であると。この、自他ともの「人間開発」「人間教育」にこそ、人間としての最高の軌道があるのではないだろうか。

遠藤 そうしますと、成道した釈尊が逡巡の末、苦悩に沈む人々に正法を説こうと立ち上がった瞬間、いわば「方便」の出発点であるあの瞬間に、人間本来の生き方が凝縮されているといえるのではないのでしょうか。

名誉会長 そうだろう。釈尊の成道後の生涯は、そうした瞬間の連続だったと思う。

「方便」は、人を救わんとする慈悲です。智慧です。行動です。「方便」という言葉に

は、一切の固定化に陥らず、常に、どう、より深く、より広く、人々を救っていくかという、ぎりぎりの挑戦の心が込められているのです。

如我等無異——人材育成の心

須田 学会活動も、自分の立場で、自分なりの「自己教育」「人間教育」に取り組んでいくことが大事ですね。

名誉会長 そこなのです。弘教はもちろん、人材育成も、すべて法華經の精神にかなった実践です。また他の文化的・社会的活動も、人材を育て、仏縁を広げる方向へ向いてこそ、深い意味がある。方便品に「如我等無異（我が如く等しくして異なること無からしめん）」（法華經一七六頁）とあります。

一切衆生を、自分と同じ境涯にまで高めたいという仏の誓願です。ここにこそ、人材育成の精神、「人間教育」の精神の根本があると思う。それが「師弟」の心です。

もちろん、自分も更に成長していく立場ですから、「自分と同じように」というより、

「この人を自分以上の人材に育てよう」という決意が「如我等無異」に通じるでしょう。

齊藤 人を育てるところか、「自分以上に偉い者は認めない」というのが日顕宗ですね。

法華経と正反対です（笑い）。誤った宗教は、皆そうです。

名誉会長 後輩のために、どれだけ祈ったか、苦勞したか。その慈愛と真剣さに「人間性」の真髓がある。

学会は「人間性の組織」です。ゆえに権威でも号令でもない。「人間性」に触れる感動とともに前進していくのです。

ロシアの民衆詩人プーシキンの詩才を育てたのも、農奴の一老婦人の人間性でした。詩人は彼女を「おかあさん」と呼び、心から信賴した。世界の人々の心を揺さぶってやまない彼の作品は、「おかあさん」から聞いた、民衆の言葉による民衆の物語が源になっている。

また「三重苦」のヘレン・ケラーを、ハーバード大学にまで行かせたのは、サリバン先生という女性です。彼女は自身の才能や可能性の一切を犠牲にしてまで、生涯、ヘレンの目となり、耳となって働いた。

サリバン女史じよしの晩年ばんねん、ある大学から二人に名誉博士号めいよ はかせ ぎょうが贈られることになった。しかし女史は断ことわった。「愛あいする教え子おしのヘレンが名誉をうけただけで、わたくしはこの上もなくまんぞくです」(村岡花子著『ヘレン・ケラー』、偕成社)と。

翌年よくねん、女史にも称号しょうごうが贈られるが、その四年後、女史は亡なくなる。そのとき、ヘレンは堅かたく心に誓ちかったという。

「先生は、自分のような者のために、その一生いつしやうを捧ささげきつて死んで行かれた。それこそ完全な奉仕ほうしの生涯しやうがいである。残のこされたわたしこそ、その連続れんぞくでなければならぬ」(ヘレン・ケラー著、岩橋武夫訳『わたしの生涯』、角川文庫の解説)。そして全世界を舞台ぶたいに、彼女は、目の不自由ふじゆうな人々への救援運動きゆうえんうんどうを展開てんかいしていったのです。

こうした、地道じみちな一人の婦人。生涯おもて、表舞台に出ることのなかった一教師きやうし。「人間教育」の勇者ゆうしやとは、こういう人たちのことではないだろうか。

その意味いみで、妙法みやうほうを胸むねに日夜にちや、人材育成じんざいいくせいに奮闘ふんとうしている学会の同志どうしが、どれほど尊たつとく、どれほど偉大いだいな存在そんざいか。

方便品ほうべんぽんに「是この法しめは示すべからず 言辞ごんじの相寂滅そうじやくめつせり」(法華経一五六)——この法は

(言葉で)示すことができない。言葉の表現は滅し尽きてしまっている(この法を示すのに遠く及ばない)——とある。

妙法の偉大さが、言葉では表現できないと同じように、妙法に生きる人生の偉大さも、言葉では言い表せないのです。

斉藤 “人を育てる”ということについて、以前、先生が語ってくださった魯迅の言葉が忘れられません。

「生きて行く途中で、血の一滴一滴をたらして、他の人を育てるのは、自分が痩せ衰えるのが自覚されても、楽しいことである」(石一歌著、金子二郎・大原信一訳『魯迅の生涯』、東方書店)と。

名誉会長 今、私も全く同じ気持ちで、青年を育てている。諸君も、そういう人生を歩んでほしい。それが法華経を信ずる人の生き方であり、「師弟不二」です。

そして、師と弟子が一体となって、人類を潤す人間性触発の教育運動を繰り広げていく——その闊達な社会貢献そのものが、一つの次元から言えば、仏界即九界、九界即仏界で

あり、ダイナミックな「秘妙方便」の行動になっているのです。

方便品②

かいさんけんいち

開三頭一

し、てい

「師弟の道」から「師弟不二の道」へ

ふに

齊藤

先日、池田先生がマンデラ大統領（南アフリカ共和国）と再会された記事（聖教新聞

一九九五年七月六日付）を読みました。

会談の内容も素晴らしく、何より感動したのは、前回の出会い（九〇年）以来、池田先

生が、アパルトヘイト（人種隔離）反対を訴える“人権写真展”をはじめ、文化・教育によ

る多角的な支援の提案を実現してこられたという“事実”です。

名誉会長 マンデラ大統領は「正義の巖窟王」であり、現代の英雄です。その人権闘争

を支え、受け継ぐ南アフリカの人々もまた偉大です。

世界への精神的影響も大きい。

大統領のような闘士が一人いれば、皆が学び、仰ぎ、全人類の境涯が高められる。大統

領の戦いを支持し、広く知らしめていくことが、人類全体の人格を高めることに通じるのです。

世界には、血涙の苦闘のさなかの人々が、数限りなくいる。この方々にとって、大統領の行動が、勝利が、どれほどの希望の光明と輝いていることか。

遠藤 日本にいと、なかなか分らないですね。『人権後進国』ですから。

名誉会長 そう。境涯を変えなければいけない。現代は文明社会全体が科学技術に頼り、経済競争に目を奪われ、自然を破壊し、殺戮兵器をつくり、不信と欲望をエスカレートさせている。

まるで精神的な『幼児』が、危険な『火器』を弄んでいるようなものだ。

人間を取り巻くものは変わったのに、人間だけが変わっていない。

法華經の意義は、そうした未熟な人類を、賢き人類へと変革させていくことにある。

『仏界』という、一人一人の内にある最高の境涯を開発することにある。

全人類の境涯を高めたい——この一点に、戸田先生の願いと悩みもあった。

『我々学会員こそは、『地涌の菩薩』である。『如来の使い』『日蓮大聖人の使い』と確信

すべきである。この確信かくしんに立つとき、私どもは「如来にょらいの事じ」を行おこなわなくてはならない。それは何か。それは一切いっさいの人をして仏ほとけの境涯きやうがいにおくことである。すなわち、全人類ぜんじんるいの人格じんかくを最高さいこうの価値かちにまで引き上げることである」と。

全人類ほとけを仏ほとけに――。戸田先生は、別の折おりにも言われている。法華経の「開三顯一かいさんけんいち」で明あかされる「一仏乘いちぶつじやう」こそ、「人類が志求しぐすべき最高の境涯きやうがい」を教おしえていると。

方便品から

「舍利弗しやりほつ、如来にょらいは但ただ一仏乘いちぶつじやうを以もつての故ゆえに、衆生しゆじやうの爲ために法ほうを説ときたもう。
余乗よじやうの若もしは二、若もしは三有あること無し」
(法華経一六七ぶつ)

舍利弗よ。如来は、ただ一仏乗によつて、衆生のために教えを説かれるのである。如来の教えは、この一仏乗のほかに、二乗も、三乗もない。

ここでは、この戸田先生の達観を指標として、方便品の「開三顯一」の法門を探究してみよう。

法開会と人開会

齊藤 はい。まず基本的なことを確認しておきたいと思います。

「開三顯一」とは、方便品(第二章)に始まる法華經迹門の中心的な説法の内容を要約した言葉です。「三乗を開いて一乗を顯す」という意味です。

「三乗」とは、声聞乗・緣覺乗・菩薩乗の三つをいいます。それぞれ、声聞のための教え、緣覺のための教え、菩薩のための教えという意味です。「乗」と言われているのは、教えを乗り物に譬えています。仏の教えは、人を乗せて、より高い境涯へと運ぶものだからです。

また「一乗」とは「唯一の教え」という意味です。仏の唯一の教えは「仏に成る」ための教えなので「仏乗」とも「一仏乗」とも言います。これには、仏自身が乗ってきた乗り

物という意味もあると考えられます。

仏自身が歩んできた道を教え、仏自身が乗ってきた乗り物を与えるのが一乗です。

遠藤 方便品では、いわゆる「開示悟入の四仏知見」として一乗を明かしています。す

なわち、衆生に仏知見を開かせ、示し、悟らせ、仏知見の道に入らせるのが、仏の唯一の教えます。またこれが、仏がこの世に出現した唯一の目的であるという意味で「一大事因縁」とも言われています。〈本文一四一ページの経文を参照〉

仏知見とは、仏の智慧であり、悟りです。一切の究極を知る最高の智慧なので、方便品では「一切種智」とも言われています。この智慧を開いて得る最高の悟りを「無上菩提（阿耨多羅三藐三菩提）」と言います。

仏知見こそ、一乗が教えるものなのです。

須田 ところが、この仏知見は簡単には分からない。言葉を超え、思考を超えているからです。人間だれしも、種々の異なった執着を持っている。ゆえに、いきなり随自意で仏の真意（仏知見を開示悟入すること）を説いても理解できないし、拒否したり不信を起こして悪道に堕ちてしまうかもしれない。そこで随他意として、衆生の機根に合わせた教えが

必要^{ひつよう}になつてくる。

ここから仏^{ほとけ}の「方便^{ほうべん}の力」によつて、衆生^{しゆじやう}の生命^{じふうたい}状態^{じふうたい}に應^{おう}じて説^とかれた教え^{おし}が三乗^{さんじやう}です。それは、仏知見^{ぶつちけん}を教えるものではない。仏の真^{しん}の目的^{もくてき}ではない。しかし、目的である一乗^{いちじやう}を教えるためには、その衆生^{しゆじやう}に対して不可^{ふか}欠^{けつ}の手段^{しゆだん}になるものです。

名誉^{めいよ}会長 方便^{ほうべん}品^{ぽん}では、三乗の教えを仏が説いた「真意^{しんい}」は、一乗にあることを徹底^{てつてい}して説いている。これが開三顯^{かいさんけんいち}一です。仏の教えは一乗だけであり、二乗も三乗もないと強^{つよ}く言つています。

「如来^{にょらい}は但^{ただ}一仏乗^{いちぶつじやう}を以^もつての故^{ゆゑ}に、衆生^{しゆじやう}の爲^{ため}に法を説きたもう。余乗^{よじやう}の若^もしは二、若しは三有ること無し^な」（法華經一六七^{じふ}）とある。これは「顯一^{けんいち}」（一乗を顯^{あらわ}す）の面^{めん}です。

また「諸^{しよ}仏^{ぶつ}、方便^{ほうべん}力を以^もつて、一仏乗^{いちぶつじやう}に於^おいて分別^{ぶんべつ}して三と説きたもう」（法華經一七〇^{じふ}）とあるのは、「開三^{かいさん}」（三乗を開^{ひら}く）の面を言つた經文^{きやうもん}です。三乗は、一仏乗を仏の方便^{ほうべん}の力で説き分けたものであると。

仏の真意は一仏乗にしかないことを、方便品では繰^くり返し強調^{きやうちやう}するのです。

このように、「三乗は方便」「一乗こそ真実^{しんじつ}」と明^あかして、三乗を一仏乗のもとに統一^{とういつ}す

ることを「開会^{かいえ}」と言う。

この開会には人^{にん}と法^{ほふ}の二面^{にめん}がある。

斉藤 はい。「法開会」は、今述^のべられたように、三乗^{さんじよう}を一乗^{とういつ}に統一^{とういつ}することです。統一された後は、三乗の教えも一乗のなかに正しく位置^{いちち}づけられ、それぞれに意義^{いぎ}があることになります。部分^{ぶぶん}観^{かん}として生かされるのです。

これに對^{たい}して「人開会」とは、一乗によつて教化^{きやうけ}される衆生^{しゆじよう}はすべて菩薩^{ぼさつ}であると明^あかすことです。

方便品^{ほうべんぽん}に「諸仏^{しよぶつ}如来^{にょらい}は但^{ただ}菩薩を教化したもう」(法華經一六七頁)とあり、また「但一乗^{どうも}の道を以^{もつ}て 諸^{もろもろ}の菩薩を教化して 声聞^{しやうもん}の弟子^{でしな}無し」(法華經一九〇頁)等とあります。

これは一仏乘^{いちぶつじやう}という乗^のり物を示^{しめ}して、一切衆生^{いつさいしやうじん}、特に声聞・緣覺^{えんかく}という二乗に、これに乗りなさいと呼びかける。それによつて二乗も、菩薩へと統一されます。菩薩とは一^じ成^{じやう}仏^{ぶつ}を^{めざ}指^さす人^{ひと}」であり、より深^{ふか}くは「成^{じやう}仏^{ぶつ}が確定^{かくてい}した人」です。その意味^{いみ}で摩訶薩^{まかさつ}(偉大^{いだい}な人)とも言われます。

名譽會長 要^{よう}するに、仏の教えは「一仏乗しかない」といふはきり言うことは、一切衆

生が菩薩である^{しめ}と示すことになる。二乗も菩薩であり、仏に成れるのです。

人開会^{にんかいえ}は、一乗の教えがすべての衆生を成仏させることを強調するものです。その要が

法華經の「二乗作仏」です。

この法と人の二面から見ていけば、開三顯一が理解しやすいのではないだろうか。特にここでは、人開会つまり二乗作仏を中心に考察していきたいと思うが、どうだろうか。

齊藤 賛成です。二乗作仏こそは法華經の独自の法門ですから。

二乗作仏の意義——十界互具

遠藤 「二乗作仏」については、私も教学試験のたびに教わりました。先輩たちが必ず言うことには「二乗根性にはなるな」と（笑い）。二乗というと、頭はよいけれども、それを鼻にかけていて、利己的で、人を救おうという慈悲がなくて……という悪いイメージが強いのですが。

名誉会長 それだけでは、二乗がかわいそうだね（笑い）。たしかに、そういう面もある

だろうが、多くの場合、そういう人は「エセ二乗」であつて、二乗を二乗たらしめている
激烈なまでの「求道心」をもっていない。「真理への渴仰」がない。

戸田先生は、皆に分かりやすいよう意味を広げて、現代において二乗とは「知識人」に
あたり、本来ならば「世の宝」となる人々であると言われています。

例えば、ノーベル賞をいくつももらうような大学者、大哲学者をイメージすればよいか
もしれない。しかも名聞名利を捨て、私利私欲を滅し尽くそうと努力している。いわゆる
大人格者です。その意味では、二乗など、なろうと思つても、そう簡単になれるものでは
ない（笑い）。

須田 それほどの仏弟子たちが、どうして永久に成仏できないとされたのか。考えてみ
れば不思議ですね。

遠藤 法華経が説かれるまでは、その嫌われ方も辛辣です。

焼いた種のように絶対、仏性の芽は出ない」とか「地獄に堕ちるほうが、まだまし」

とか（笑い）。

齊藤 二乗の修行の理想は「灰身滅智」です。煩惱のよりどころとなる肉体も、苦しみ

を感じる心の働きも、すべて滅した状態を目指します。「身も心もうせ虚空の如く成るべし」(御書三九三)と。それでは、仏になるべき自分すら残りません。

須田 また、二乗とよく比較されるのが、三乗のなかの菩薩です。菩薩には「利他」の心があるけれども、二乗には「自利」しかない。だから二乗は成仏できないのだと。

名誉会長 六道(地獄界から天界まで)の世界を嫌うのが二乗ですから、そこから出て「虚空の如く」になったら、もう現実世界には戻ってこない。戻ってこず、六道の衆生を救おうとしない。実は一切衆生に恩があることを忘れてしまう。

「永く六道に還らんとせず故に化導の心無し」(御書四三四)また「解脱の坑に墮して自ら利し及び他を利すること能わず」(御書一九一)です。救うべき人々を見捨ててしまつては、もはや仏法ではない。また、それでは自分も救われな。ゆえに「一念も二乗の心を起すは十悪五逆に過ぎたり」(御書四三五)とされたのです。

須田 そうしますと「不知恩な二乗なんか放っておいて(笑い)、菩薩になればいいじゃないか」となるのが普通だと思ふのですが。

名誉会長 それが三乗のうちの菩薩乗だね。しかし、「二乗は成仏できない。菩薩なら

成仏じやうぶつできる——実はじつここには、重大じゆうだいな矛盾むじゆんがある。

ここを掘り下げれば、法華經が説とくかれなければならなかった理由りゆうも分かつてくるのです。

方便品から

「舍利弗しやり ぼつまさ当に知るべし 我本誓願われもとせいがんを立てて 一切いっさいの衆しゆをして 我わが如ごとく等ひとしくして異ことなること無なからしめんと欲ほつしき 我わが昔むかしの所願しよがんの如ごとき 今者いまは已すでに満足まんぞくしぬ 一切衆生しゆじようを化けして 皆みな仏道ぶつどうに入いらしむ」
(法華經一七六頁)

舍利弗よ、次のことを知りなさい。私は、過去かこに誓願せいがんを立てて、一切の人々を、自分と等しくして異ことならないようにしたいと思つた。この私の昔からの願ねがいは、今は、すでに満みたされた。すべての衆生しゆじようを導みちびいて、みな仏道ぶつどうに入はいらせるのである。

仮に二乗を放つておいて、菩薩になつたでしょう。しかしそれでは、二乗が六道を救わないのと同じく無慈悲なのです。

菩薩は「四弘誓願」といつて、成仏を目指して四つの誓いをした。その一つ、「衆生無辺誓願度」とは、すべての衆生を救わんとすることです。二乗を不作仏のまま見捨てるなら、菩薩は、この誓いを捨てたことになる。誓いを捨てれば成仏はできない。

大聖人は「所詮は二乗界の作仏を許さずんば菩薩界の作仏も許さざるか衆生無辺誓願度の願の関くるが故なり」（御書五八九頁）と仰せです。

爾前経では「菩薩は仏になれる。二乗はなれない。このことを菩薩は悦び、声聞は嘆き、人界・天界の衆生等は思いもかけない」（御書四〇一頁）等というが、ここに大きな錯覚がある。菩薩も、自分だけは大丈夫だと笑つてはいられないのです。

遠藤 道理です。

名誉会長 なぜ、こういう錯覚と矛盾に陥つてしまうのか。結論から言えば、法華經以外は「十界互具」ではないからです。

須田 十界とは、地獄界から仏界までの十種類の生命の境涯ですが、十界互具とは、

十界のうち、すべての一界に、そのほかの九界が具わっていることです。御書には「十界互具と申す事は十界の内に一界に余の九界を具し……」（御書四〇〇頁）とあります。

齊藤 十界互具のポイントは「九界即仏界」「仏界即九界」にあります。そのうち迹門では「九界即仏界」が表になっていきます。二乗も含む九界に、仏界が具わっていることを明かします。

名誉会長 端的に言えば、仏界はどこにあるか。ほかでもない、二乗界にある。逆に、二乗界はどこにあるか。ほかでもない、菩薩界にある。また仏界にもある。

生命観の大転換です。

齊藤 「十界互具」の生命観に立てば、菩薩が「二乗は嫌だ」と言ってもだめなんです。ね。「それは、お前のなかにも、あるじゃないか」となる（笑い）。

遠藤 二乗が成仏できないとすれば、菩薩に具わる二乗界が成仏しないことになる。生命は、そこだけ切って捨てるわけにはいかないので（笑い）、菩薩そのものが成仏できないことになります。

須田 大聖人が「菩薩に二乗を具す二乗成仏せずんば菩薩も成仏す可からざるなり」

（御書四二二頁）とおっしゃっているのは、そのことです。

名誉会長　そうです。この原理は、十界の各界すべてについて同じです。

「二乗界・仏にならずば余界の中の二乗界も仏になるべからず又余界の中の二乗界・仏にならずば余界の八界・仏になるべからず」（御書五二二頁）と仰せの通りです。

「二乗不作仏」ならば、仏ですら、仏ではありえなくなる。仏の中の二乗界が成仏しないからです。

法華経以前の經典には、十界それぞれの因果が別々に説かれている。しかし、そこで説かれる成仏には実体はなく、「影」のようなものです。

法華経には、その十界の因果の「互具」が説かれている。ゆえに法華経によつて初めて、十界すべての衆生の成仏が可能となるのです。「十界互具」が説かれるか否か。ひとえに、ここにかかっている。

遠藤　「法華経とは別の事無し十界の因果は爾前の経に明す今は十界の因果互具をおきてたる計りなり」（御書四〇一頁）——法華経とはほかの何を説いているのでもない。十界の因果は爾前の経に明かしているが、今（今経＝法華経）は十界の因果の互具こそを定めて

いる——と、大聖人が明言めいげんされている通りですね。

斉藤　そうしますと、成仏じやうぶつできないと聞いた二乗にじやうの嘆なげきは、菩薩ぼさつにとつても「他人ひとごと」ではなかったと言えますね。

名誉会長　そこなのです、大事だいじなのは。

大聖人は「二乗ようふを永不成仏とと説き給たまふは二乗一人計いちにんばかりなげくべきにあらざりけり我等われらも同じなげきにてありけりと心うるなり」(御書五二二頁)と仰おほせです。

そして「人の不成仏は我が不成仏、人の成仏は我が成仏・凡夫ぼんぷの往生おうじやうは我が往生」(御書四〇一頁)という考え方を示しめされている。

十界互具じっかいごになる前は、他の衆生しゆじやうのことは、あくまで「他人ごと」であつた。それが十界互具になつて、「人の成仏は自分の成仏」「人の不成仏は自分の不成仏」と受け止とめていく生き方に転換てんかんしている。これは生命観かん、世界観だいいへんかんの大変革だいへんかくです。

「他人たにんだけが不幸ふこう」はありえない。「自分だけが幸福こうふく」もありえない。他者たしやのなかに自分を見、自分のなかに他者との一体性いつたいせいを感じかんじていく——「生き方」の根底こんていからの革命です。すなわち、人を差別さべつすることは、自分の生命を差別することになる。人を傷きずつければ、

自分の生命が傷つく。人を尊敬することは、自分の生命を高めることになる。

齊藤 「十界互具」の生命観に立てば、人間は差別を超えられる、平等になれるということですね。

名誉会長 その通りです。「権教は不平等の経なり、法華経は平等の経なり」(御書八一六)と大聖人は仰せです。法華経は、単なるスローガンとしての平等ではなく、生命の法理のうえから、そして「生き方」の根源から、自他共の幸福への道を教える經典なのです。そして大聖人は、末法は「南無妙法蓮華経の大乗平等法の広宣流布の時なり」(御書八一六)と教えてくださっている。

遠藤 法華経に説かれる「不輕菩薩」は、十界互具の生命観を「振る舞い」に示したものです。不輕菩薩は輕蔑されても、迫害されても、上慢の四衆(慢心した出家・在家の男女)に向かって礼拝行を買きました。

名誉会長 詳しくは不輕品のところで語ることになると思うが、大聖人は「自他不二の礼拝」(御書七六九)と仰せです。

不輕菩薩が人々を礼拝すれば、人々の生命に具わる仏性がまた、不輕菩薩を礼拝するの

である。甚深じんじんの法門はふもんです。

英国えいこくの詩人しじんジョン・ダンジョン・ダンは言いつていいる。

「人は孤島ことうにあらず。自身じしんのみで完全かんぜんなる者はなし。人はみな大陸たいりくをなす一部いちぶなり。大海原うなばらの一部なり。波なみきたりて土つちくれを洗あらいゆけば、洗あらわれしだけ、ヨーロッパは小さくなくなり。さながら岬みさきの消えゆくごとく、さながら汝なんじの友ともそして汝自身りようちの領地りようちの消えゆくごとく。一人の死も我われを小さくせん。我は人類じんるいの一部なるゆえに。されば、誰たがためにとむら（弔とむらいの鐘かねは鳴るやと問とうなかれ。汝自身なんじのために鳴るなり）（「ダンの祈り」と。

「あなたも私も、人類じんるいという大陸たいりくの一部」——すべての人の幸不幸こうふくこうを我が幸不幸こうふくこうと観かんじて生きる「大陸大の境涯きようがい」を開ひらきたい。

否いな「宇宙大の境涯うちゆうだい」を開ひらかせたいというのが、戸田先生きようちろうが強調きやうきやうされた「二仏乗いちぶつじよう」の目的もくてきであり、「開三顯一かいさんけんいち」の心ではないだろうか。そこまで人類の境涯を高めたいと。

須田 目がさめるような思いがします。二乗作仏にじようさくぶつには、ここまで現代的な意義いぎがあつたわけですね。

名誉会長 ただ、ここで論じたのは「迹門しやくもんの十界互具じっかいご」であつて、「九界即仏界きゅうかいそくぶつがい」「仏界

そくきゆうかい
即九界」の両側面のうち、「九界即仏界」の面だけです。真の十界互具は、本門の寿量品
(第十六章)で、仏の常住が明かされて初めて完成する。

これはまた、別の機会に語ることにしよう。

須田 釈尊は「大乘平等の法」(法華經一七五節、方便品)と呼んでいます。が、こうした、
さいこう
「最高の法」「最高の生き方」を知った二乗の喜びは、どれほどだったでしょうか。

遠藤 經文では、舍利弗は歡喜のあまり思わず躍りあがって、釈尊に向かって合掌した
と
と説かれています。

品II第三章)と。
踊躍歡喜。即起合掌(躍りあがって歡喜し、起ちあがって合掌した)。(法華經一九三節、譬喩
品II第三章)と。

齊藤 智慧第一の大学者が、躍りあがるぐらいですから(笑い)、よほどうれしかっ
たのでしよう。法華經によって蘇った「声聞」の姿ですね。

名誉会長 根底から一念が変わったのです。

そして舍利弗は、一仏乘を納得してこう告白しています。

「今、仏から未曾有の法を聞いて、すべての疑いや悔いがなくなり、心身ともに安穩に

賢國國王上下流泉寺大衆師長日蓮

下野房日蓮の寺證并言

當寺院主平光遠入道行智為客院

除自科運致不實證新元謂事

許以自來日弁日蓮房主常自法

花經外入受現真言行行者以人止金

五十年由ゆきい

條日新寺主

日蓮聖人親自去書い小大佛主

妙蓮蓮華院宣正法興寺子

細相貼御

不審者段々高僧寺下法使也此段は明公法使方
和月八日漢去日本と先般今當明使何有之國書
新收今月廿一日信教多人親筆より新打入候事
坊内下野坊主相具懸屋百位此段書在聖孔有取
作宅取八日秀住房平を懸此段書在聖孔有取
榮華行有信教不平者上人又信月日有書
聖孔時又懸諸主段之段段信教于日秀寺主

師弟一体で正義の主張をされた滝泉寺申状の御真筆（部分）。前半が日蓮大聖人、後半が日興上人の御真筆による（「日蓮聖人真蹟集成」法蔵館より）

なりました。今日（きょう）はじめて知りました。

自分は真（しん）の『仏子（ぶつし）』です。仏（ほとけ）の口から生

まれ、仏（きょうけ）の教化から生まれたのです」

（法華經一九四（一）趣意（しゆい））と。

この「仏子」という言葉は、大乘（だいじよう）では

菩薩（ぼさつ）を意味（いみ）します。舍利弗（しやりふ）は一仏乘（いちぶつじよう）を

信解（しんげ）して、声聞（しやうもん）から菩薩に生まれ変わつ

たのです。

遠藤（えんどう） このことは、＊さんしやか「三車火宅（さんしゃく）の譬（たと）え」

を聞（き）いて開三頭（かいさんけん）一（いち）を會得（えとく）した迦葉（かしよう）、目連（もくれん）

等の四大声聞（しだいしやうもん）の場合（ばあい）も同じです。

彼等（かれら）は、信解品（しんげほん）（第四章（しやう））で「我等（われら）は

今、真（しん）の声聞（しやうもん）になつた。仏道（ぶつどう）の聲（こゑ）を一切（いっさい）

の人々に聞（き）かせていこう」（法華經二七五）

（と）述べています。すなわち「教えの声を聞く声聞」から、「教えの声を聞かせる真の声聞」へと生まれ変わった。

*長者の家が火事になり、中で遊んでいた子どもを長者が門外にある三車（羊車・鹿車・牛車）を与えるとして助け出し、実際には大白牛車を与えた。譬喩品第三に説かれている。

名誉会長　そう。開会されれば、声聞は声聞の姿のまま、**「如来の使い」**としての本来の使命を果たせるようになるのです。

齊藤　声聞たちは、更にこう変わりました。

「世尊は大恩をくださった。希有なることをもって、憐れみ、教化して、私たちに利益を与えてくださった。無量億劫という長い時間をかけても、だれがその恩に報いることができるであろうか。できるはずがない」（法華經二七六節、信解品、趣意）

「不知恩」とされた二乗が、仏の大恩を賛嘆している。これは一八〇度の転換です。

須田　そして、釈尊は言います。

「汝たちの修行するところは、菩薩の道である。だんだんと学を修めていって、ことごとく必ず仏となるべきである」（法華經二九三節、藥草喩品第五章）

「多くの菩薩たちが声聞・縁覚となつて、多くの衆生を教化するのである。彼らは、内に菩薩の行を秘め、外には自分は声聞であるという姿を見せている。生死の輪廻を厭うなど、いかにも声聞らしくしているけれども、実は、自ら仏の国土を浄めているのである」
(法華經三六〇節、五百弟子受記品第八章、趣意)と。

名誉会長 あなたがたは自分を声聞だと思つてゐるけれども、実は「菩薩」なのです。あえて声聞の役を演じながら、人々を仏道に向かわせてゐるのですよ——こう教えてゐるのだね。

いちぶつじよう
一仏乗とは師弟不二の道

須田 方便品でも、一仏乗はただ「菩薩」だけを教化する教えであることが強調されています。
います。

ここで分かりにくいのは、一仏乗を信解した菩薩と、もとの三乗のうちの菩薩との関係です。両者は同じなのか異なつてゐるのか。異なつてゐるとすれば、どう違ふのか。

遠藤 この問題は、中国仏教では、三車家・四車家の論争として知られています。譬喩品(第三章)では三車火宅の譬えによって開三頭一を説いています。その詳しい内容は省きますが、声聞乗が羊の車に、縁覚乗が鹿の車に、菩薩乗が牛の車に、そして一仏乗が大白牛車に譬えられています。

したがって、菩薩乗(牛車)と一仏乗(大白牛車)が同じだとする立場は、車が三つだけあることになりますから三車家、違うとする立場は、四つになるので四車家と呼ばれました。天台大師は四車の立場です。

名誉会長 いろいろな論じ方ができると思うが、一次元の見方として、こう考えたらどうだろう。

一乗が顕される前の三乗の仏弟子たちは、一応、「師弟の道」を歩んでいた。しかし、開三頭一は「師弟不二の道」を歩むことを教えていると。

齊藤 「師弟」から「師弟不二」へ——それは、どういうことでしょうか。

名誉会長 「三乗」のなかの菩薩は「二乗不作仏」という差別を残した菩薩です。「十界各別」であり、ゆえに菩薩が衆生を救うこともできず、菩薩自身が仏になることもできな

それに対し、仏の願いは一切衆生を仏にすることにある。

師弟の境涯の違ひは致し方ないとしても、師と弟子の「心」が、「願い」が、「哲学」が、根本的に違っているのです。

一方、「開三顯一」された後の菩薩は「蘇生した声聞たち」も含め、すべての衆生が平等に成仏できるという「十界互具」の法理に立っている。

そして、この大哲学の上に、すべての人々を仏にしようという大闘争の軌道に入った。そこで初めて、仏が歩んでいるのと同じ道に入った。根本の一念において、師弟が目的を同じくする同志となり、「不二」の道を歩む先輩と後輩の関係になった。そのように進んでいくのが、真の師弟なのです。

斉藤 なるほど、そういう見方ができるのですね。

名誉会長 しかも、現実社会という「海」に飛び込み、民衆一人一人を幸福への「大船」に乗せていく——この戦いにおいては、仏もまた菩薩なのです。大聖人は十界互具を説明されて、「仏も又因位に居して菩薩界に摂せられ妙覚ながら等覚なり」（御書四〇一ページ）

とおお
と仰せです。

ともあれ、師の心は「如我等無異」です。方便品に「一切の衆をして 我が如く等しくして異なること無からしめんと欲しき」（法華經一七六）とある。すべての衆生に、仏と不二の境涯を得させようという慈悲です。

また「諸仏の本誓願は 我が所行の仏道 普く衆生をして 亦同じく此の道を得せしめんと欲す」（法華經一八三）と。

同じこの道を歩ませたい、不二の道を会得させたい——これが仏の「本誓願」です。もちろん、法華經以前の三乗も、仏を信じてついできた。それなりに「師弟の道」を歩んできたでしょう。しかし、そこには自分は自分、仏は仏という断絶の心があった。師の心を知らなかった。その迷妄を破ったのが法華經です。

「開三顯一」とは、「師弟の道」から「師弟不二の道」へと、弟子の一念、弟子の生き方を、根底から変革させるものではないだろうか。

須田 よく分かりました。先ほど話に出ましたが、舍利弗は一仏乗を聞いて、自分が「真の仏子」であると確信しました。「不二」の意義は、この「仏子」という言葉にも込め

られているのではないでしょうか。

名誉会長　そうだね。戸田先生は言われていた。

「かじ屋やの弟子でしであるから、かじ屋でしょう。魚屋さかなやの弟子だから魚屋でしょう。同じように仏様ほとけさまの弟子は仏様でしょう。うまくいつています」「（我々われわれも）大聖人様の仰せ通り折しやく伏ふしているのですから、大聖人様の弟子なのです」と。

また「我々は仏様の子供です」と、何度も強調きようちようされていた。

自覚じかくしようとしまいと、「ライオンの子」は「ライオン」です。「仏の子」は「仏」です。他の何ものでもない。ライオンであるという事実じじつ、仏であるという事実じじつに変わりはない。それを「自覚」すれば「不二ふに」の道となる。

遠藤　「仏子ぶつし」とは、声聞しょうもんとか縁覚えんかくとか菩薩ぼさつとかの立て分けを超えた言葉ことばですね。具体的な振る舞まいは、菩薩だと思おもいます。

「仏子」という言葉には、弟子を「不二」の境涯きやうがいに高めたいという師しの慈愛じあい、そして、どこまでも師と「不二」の心で進むのだという弟子の決意けつぎが込められているのではないのでしょうか。

名誉会長　その通りだと思う。

仏にとつては、十界の衆生すべてが「吾が子」です。そのなかでも、妙法を受持した衆生こそが「真の仏子」と言えるでしょう。

宝塔品（第十一章）に「（未来の世において法華經を持つものは）是れ真の仏子」（法華經四一九）と説かれる通りです。

齊藤　法華經が滅後のための經典であることを考えれば、「真の仏子」とは、具体的に「地涌の菩薩」を指すといつてもよいのではないでしょうか。

名誉会長　そうです。

「子とは地涌の菩薩なり父とは釈尊なり」（御書八〇三）と、大聖人は仰せになつてゐる。師と同じ誓願、同じ責任感、すなわち師弟不二に立ち上がった弟子が「地涌の菩薩」です。そして「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか」（御書二三六〇）と仰せです。この「同意」に意味がある。

日蓮大聖人の御誓願を我が誓願として、今まさに広宣流布へ進んでいる創価学会こそ、久遠の使命を担つた「地涌の菩薩」の教団です。大聖人と一体の弟子の集まりなのです。

遠藤 しかし、学会員が地涌の菩薩であると、言わせないようにしてきたのが宗門です。「地涌の菩薩」ではなく、せいぜい「地涌の菩薩の眷属」なのだと。

須田 眷属というなら、私たちは日蓮大聖人の誉れの本眷属です。墮落した坊主の眷属などでは絶対にない。

齊藤 だいいち、「皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」(御書一三六〇)との大聖人の御明言を、彼らはどう拝すのでしうか。

須田 日寛上人も、大聖人と「不二」の境涯になるのが、大聖人の仏法の真髓であることを強調されています。

「我等、妙法の力用に依つて即蓮祖大聖人と顕るるなり」(文段集六七六)

「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華經と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、

蓮祖聖人なり」(文段集五四八)

遠藤 その御精神とは正反對に、「不二」にさせまいとするのが日顕宗です。大聖人の

弟子が大聖人と「不二」の道を進むことが、彼らには、よほど都合が悪いのでしう。

須田 「不二」たるべき師と弟子を、どうしても引き離したい。要は、そのすき間に、

自分たちが入り込んで、弟子たちの上に君臨したいのです。

大聖人の凡夫即極の教え、それを受けた日寛上人の御教示を、真つ向から否定するものです。

斉藤「本仏」という言葉さえ、彼らにとつては、自分たちを権威化する手段となっています。

大聖人を、凡夫から隔絶した超絶の存在のように思わせておいたほうが、法主をはじめとして自分たちの権威も高まるという邪智です。

名誉会長 大聖人を崇めているようで、実は大聖人の御心を殺しているのです。

最高の「人間尊敬の教え」を、最低の「人間蔑視の教え」に、すり替えてしまっている。民衆を蔑視する傲慢ゆえに、大聖人の説かれた「不二」の道を壊したいのです。

ドストエフスキーは洞察している。

——実は、傲慢な人間の多くは神を信じる。「人間を軽蔑している者」には、それが著しい。なぜなら彼らは、「人間に頭を下げたくない」から神を選ぶのである。「神の前に跪く」のであれば、自分の傲慢は傷つかず、何ら苦痛ではないからだ——（『未成年』、要旨）

文豪の、非常に鋭い「心理学者」の一面をのぞかせている。

斉藤 この言葉の「神」を、彼らの言う「凡夫と隔絶した御本仏」と置き換えれば、その心理は、より明瞭ですね。

遠藤 彼らが跪いているのは、実は大聖人の教えに対してではなく、自分自身の醜い欲望に対してなのですね。

名誉会長 堕落した人間に惑わされることほど愚かなことはない。

要は、見抜けばいいのです。

「師弟不二」こそ法華經の魂であり、日蓮大聖人の仏法の真髄です。その一番大事なものを壊し、切り離そうとする。

それが「魔Ⅱ奪命者」の特徴です。

「不二の道」の否定は、十界互具の否定、人間の平等に対する冒瀆にほかならない。この一点に、日蓮宗の本質が顕れている。

日淳上人は、学会の信仰の基盤は「師弟」にあると、厳然と見抜いておられた。学会の第十九回総会（一九五八年十一月）のために用意された日淳上人の原稿には、こう記されて

いる。

「大聖人は日蓮が法門は第三の法門と仰せられておりますが、誠に此の仰せを身を以て承けとられたのは会長先生（戸田先生）であります。大本尊より師弟の道は生じ、その法水は流れて学会の上に伝わりつつあると信ずるのであります」と。

須田 重大な御言葉ですね。

「師弟の道」と「師弟不二の道」の違いについて、忘れられないのが、池田先生の小説『人間革命』です。戸田会長と山本伸一の「不二」の戦いについて第十巻には、こう描かれていきます。

「戸田は彼の膝下から多くの指導者の輩出のために心を砕いていたものの、時機はまだ熟していなかった。彼の弟子たちは、師弟の道は心得ていたが、広布実践のうえの師弟不二のなんたるかを悟るものはほとんど皆無といつてよかった。不二とは合一ということである。

昭和三十一年の戦いに直面したとき、彼の弟子たちは戸田の指導を仰いだが、彼らの意図する世俗的な闘争方針を心に持しながら、戸田の根本方針を原理として聞き、結局、彼

らの方針ほうしんの参考さんこうとしてしか理解りかいしなかった。戸田の指針ししんと彼らの方針とは、厳密げんみつにいつてふじょう不同ふどうであつたのである。師弟していの道を歩むあゆのはやさしく、師弟不二ふにの道を貫くつらぬことの困難こんなんさがここにある。ただかろうじて、山本伸一だけが違ちがつていた」

「その彼の作戦さくせんの根本こんぽんは、戸田の指針とまったく同一どういつであつた。不二であつた。彼には戸田の指導を理解しようなどという努力どりよくは、すでに不必要ふひつようであつた」

「彼は一念いちねんにおいて、すでに戸田の一念と合一ごういつしたところから出発しゅつぱつしていた」

齊藤「師弟不二の道」とは、師と同じ心、同じ祈いのりに立つて戦つていこうとすることだかんと感かんじます。

名誉会長 法華經の説とく「十界互具じつかいごぐ」こそ、万人ばんにんの境涯革命きやうめいを可能かのうにする根本原理げんりです。この智慧ちえを我が身みで行い、万年まんねんの未来みらいへ伝えていかなばならない。その黄金おうごんの軌道きどうこそ「師弟不二の道」なのです。

広げて言えば、どんな事業じぎょうも運動うんどうも、偉大いだいなものは一代いちだいでは完成かんせいしない。後継者こうけいしやが絶対ぜつたいに必要ひつようです。

マンデラ大統領だいたうりように、私は言いました。

「『マシデラ』という偉材が、ただ一人いるだけでは、あなたの仕事は完結しません。一本の高い樹だけでは、ジャングルはできないように——」（一九九〇年十月）
今回の会見でも後継者についておうかがいし、大統領は心配ありませんと自信を示しておられた。

大聖人は「伝持の人無れば猶木石の衣鉢を帯持せるが如し」（御書五〇八頁）と仰せです。

法華經の涌出品（第十五章）で、民衆救済の真の後継者である地涌の菩薩が出現したとき、釈尊は、この菩薩たちとの久遠からの師弟不二を明かそうとして告げた。

「如来は今、師子奮迅の力を顕し宣べ示さん」（法華經四八四頁、趣意）と。

大聖人は、末法万年の衆生を救う御本尊を「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ」（御書一一二四頁）と残された。そして御本尊を認められる御一念を「師子奮迅之力」と仰せになられた。

全民衆のために、永遠の人類のために——その魂こそ「師子奮迅の力」である。師から弟子への全力の教育であり、鍛錬です。

また「師子」の「師」は師匠、「子」は弟子とすれば、師弟一体となつて、奮迅の力で、人類の境涯を変える「戦いをするよう、法華経は呼びかけているのです。

方便品③

しよほうじつそう

「諸法実相」の心

へんかく
現実変革への限りなき挑戦
ちようせん

齊藤 ある草創そうそうの大先輩だいせんぱいから「秘話ひわ」をうかがいました。

それは、池田先生が『撰時抄講義せんじしようこうぎ』（二九六四年はつかん発刊）を執筆しつぴつされていたときのお話です。先生は、教学部の最高幹部さいこうかんばんにも意見いけんを聞かれながら、御文ごもんの一文一句いちもんいっくに、全魂ぜんこんで取り組んでおられた。その凄まじい様子ようすを、この方は側そばで拝見はいけんする機会きかいがあつたそうです。

遠藤 撰時抄は、世界広宣流布こうせんるふの未来記みらいきと言われる重書じゆうしよですね。日蓮大聖人は、広宣流布の時には万民ばんみんが一同いちどうに南無妙法蓮華經と唱となえるであらうと宣言せんげんされています。

齊藤 ちょうど、その部分ぶぶんに「前代未聞ぜんだいみもんの大闘諍だいたうじやう・一閻浮提いちえんぶだいに起るべし」（御書二五九頁）という御文があります。

しょうほうめぎ
正法に目覚めめぎない人々が法華經きやうぎやの行者はくがいを迫害はくがいし、なおも謗法ぼうぼうを続けるならば、前代未聞

の大闘争だいとうじょうが全世界に起おこるであろうと。

そこにいた教学部の幹部かんぶの方は、この御文ごもんを「第三次世界大戦たいせんが起こる」という意味いみではないかと解釈かいしやくされたそうです。事実じじつ、当時は、東西冷戦とうざいれいせん、核軍拡競争かくぐんかくききょうそうの渦中かちゆうであり、そういう懸念けねんの声は高かった。しかし、池田先生は、烈火れつかのごとく言われた。

「もし本当に第三次世界大戦が起これば、原水爆等げんすいばくによつて、人類じんるいは滅亡めつぼうしてしまう。かつての大戦いじよう以上の悲惨ひさんと苦悩くのうを、人類は、また味あじわわなければならぬのか。それでは仏法者として、あまりに無慈悲むじひではないか。

我々われわれは、第二次世界大戦をもつて、『前代未聞の大闘争ぜんだいまもん』と決定けつていしよう。どんなことがあつても、第三次世界大戦は起こさせない。そのことを御本尊ごほんぞんに強く願ねがひ、死身弘法ししんくわうを誓ちかおうではないか。広宣流布こうせんるふという世界の恒久平和こうきうへい、人類の幸福こうふくを、必ず達成たっせいしようではないか」と。

お話をうかがった先輩せんぱいは、本当に感動かんどうしたそうです。そして、しみじみと言われている。した。

「世よに、さまざまな終末論しゅうまつろんを唱となえる宗教があります。無責任むせきにんに人々の不安ふあんをあおり、な

かには終末しゆうまつを待望たいぼうする人々さえいます。日蓮大聖人の仏法が、それらとまったく正反對せいはんたいであることを、池田先生は断固だんことして教おしえてくださいました」と。

名誉会長　そうですか。大聖人の仏法は、どこまでも平和の仏法です。全世界を平和に！ それこそ大聖人が目指めざされたものなのです。そのために「立正りつしやう」を、そのために「法華経」をと叫さけばれたのです。

戦争の危機ききをはじめ、いかなる苦悩くのうの現実げんじつも、絶対ぜつたいに変革へんかくできる。変革しなければならぬ。これが大聖人の御確信ごかくしんです。「立正安国あんこく」の御一念ごいちねんです。

この大聖人の御心おこころを受け継ついで、全人類ぜんじんるいの幸福こうふくのために学会は立ち上がったのです。

五十年前——戸田先生は、第二次大戦後の焦土しょうどに一人立たれ、叫さけばれた。

「日本民族をこれ以上惨苦みんぞくの底そこには墮おとしたくない」「悩みの世界をだれが救すくい、だれが助たすけるのか」「いまこそ広宣流布こうせんるふの時である」と。

今、語り合っている方便品ほうべんぽんに「諸法実相しよほうじつそう」と説とかれている。結論けつろん的に言えば、実じつはこの

「諸法実相」こそ「現実変革げんり」の原理げんりなのです。この点について論じたいと思うが、どうだろうか。

方便品から

「止^やみなん 舍利弗^{しやり ぼつ}、須^{すべ}らく復説^{またと}くべからず。所以^{ゆえん}は何^{いか}ん。仏^{ほとけ}の成就^{じょうじゆ}したまえる所^{ところ}は、第一^{だいいち}希有^{けうなんげ}難解^{なんげ}の法^{ほう}なり。唯^{ただ}、仏と仏とのみ、乃^{いま}し能^よく諸法^{しよほう}の実相^{じつそう}を究^く尽^{じん}したまえり。所謂^{いわゆる}諸法^{しよほう}の如^に是^よ相^{そう}、如^に是^よ性^{しやう}、如^に是^よ体^{たい}、如^に是^よ力^{りき}、如^に是^よ作^さ、如^に是^よ因^{いん}、如^に是^よ縁^{えん}、如^に是^よ果^か、如^に是^よ報^{ほう}、如^に是^よ本^{ほん}末^{まつ}究^く竟^{きやう}等^{とう}なり」 (法華經一五四頁)

(説くことは)やめよう舍利弗よ。これ以上、説くべきではない。なぜか。仏が成就されたところのものは、第一の、まれなる、理^り解^{かい}し難^{がた}い法だからである。ただ仏と仏とだけが、よく諸法の実相を究^きめ尽^つくされたのである。(諸法の実相とは)いわゆる諸法の、このような姿^{すがた}(如^に是^よ相^{そう})、性質^{せいしつ}(如^に是^よ性^{しやう})、本質^{ほんしつ}(如^に是^よ体^{たい})、力^{ちから}(如^に是^よ力^{りき})、作用^{さよう}(如^に是^よ作^さ)、原因^{げんいん}(如^に是^よ因^{いん})、間接^{かんせつ}的原因^{げんいん}(如^に是^よ縁^{えん})、結果^{けつか}(如^に是^よ果^か)、果報^{かほう}(如^に是^よ報^{ほう})、(第一の相から第九の報までの)本末^{ほんまつ}が一貫^{いつかん}して等しいこと(本末究^く竟^{きやう}等^{とう})である。

遠藤 はい。ぜひ、お願いします。

「諸法実相」とは何か。真剣に思索したいと思います。

齊藤 まず初めに、「諸法実相」が方便品に、どのように説かれていたかを見ていきたいと思います。

須田 私たちが、毎日、勤行で読誦しているところですね。

「仏の成就したまえる所は、第一希有難解の法なり。唯、仏と仏とのみ、乃し能く諸法の実相を究尽したまえり。所謂諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり」(法華經一五四頁、本文二〇九頁の通解を参照)と。

齊藤 この文の前後には、「仏の智慧が、いかに素晴らしく、いかに理解し難いか」が繰り返して説かれています。

その仏の智慧について、ここでは具体的に、「諸法の実相」を究めた智慧なのだと強調しています。そして、その実相とは何かが、如是相、如是性……如是本末究竟等と続く

「十如是(十如実相)」で表現されています。

須田 前に、「開三頭一」かいさんけんいち（声聞乗・縁覚乗・菩薩乗の三乗を開いて一仏乗を顯す）しやうもんじやう えんかくじやう ぼさつじやう さんじやう いちぶつじやう あらわについて

論じていただきました。

天台は、この「諸法実相・十如是」しよほうじつそう じゆうによぜ ぜんご前後の部分を「略開三頭一」りやくを表すと言っている

す。「開三頭一」が「略して」明かされていると。

名誉会長 仏が出現したのは、ありとあらゆる人々を仏にするためである。仏になるこ

とこそ人生の根本目的であり、その他の目標は「方便」ほうべんの低い目標に過ぎないことを教え

たのです。いわんや名聞名利など、人生の真の目的ではない。

「開三頭一」は、「仏の真意を明かした」ものであり、同時に「人生の真の目的を明かし

た」のです。

ただし、「略」開三頭一だから、ここでは「かすかに」しか示されていない。

そのことを大聖人は「ねぼけた人が、初めて鳴くほととぎすの音を一回だけ聞いたよう

なものだ」と譬えられている。鳴いたけれども、聞こえたかどうか分からない（笑い）。そ

れほど「かすか」だと（御書二〇八頁）。

しかし、仏は確かに「真意」を説いたのです。大聖人は「仏略して一念三千・心中の本

懷かいを宣のべ給たまう」(御書二〇八ページ)と仰おほせです。それが諸法実相・十如是じゆうによぜもんの文もんです。

また「一切衆生皆成仏道の根元こんげんと申もうすも只此ただこの諸法実相の四字じより外ほかは全まったくなきなり」(御書一一三九ページ)と述のべられている。「すべての人を仏ほとけに」という法華經の主張しゆちようの根ねっこは、諸法実相にこそあると仰おほせなのです。

須田 たったの四文字もじが、なぜ一切衆生の成仏の根源こんげんになるのか。そこですね、難むずかしいのは。

遠藤 基本的な意味きほんてき いみから確認かくにんしたいと思います。

「諸法」とは、この現実世界げんじつにおいて、さまざまな姿すがた・形かたちをとって現あらわれている「すべての現象げんしょう」と言いえます。

「実相」とは、文字通り「真実の相」、すなわち「真理しんり」と言いってよいでしょう。天台てんだいによりますと、実相の「相」の字は、「真理は見えないが、諸仏しよぶつが確たしかに覺知かくちした壞こわせないものであることを示しめしている」ということです(法華玄義ほつげ げんぎ)。

名誉会長 見ることはできないが、嚴げんとして実在じつざいするということだね。

齊藤 はい。そして「十如是」は、「十如实相」と言いわれるように、この「見えないが、

實在する実相^{じつざい}を言い換えたものです。

「如是^{にやぜ}」は「このような^{ほとけ}」という意味で、それぞれの現象^{げんじょう}、個々の生命^{ここの}（諸法^{しよほう}）について、仏は「このような相^{そう}（如是相^{にやぜ}）、このような性^{しやう}（如是性^{にやぜ}）、このような体^{たい}（如是体^{にやぜ}）……」と実相^{ちけん}を知見^{しけん}したということです。

名誉会長^{めいぎうかいちやう} そう。「諸法の実相^{しよほうじつそう}」と説^とかれていることが大事^{だいじ}だね。真理^{しんり}（実相^{じつそう}）と言って、どこか遠い別世界^{ととお}にあるというのではない。具体的な現象^{ぐたいてき}（諸法^{しよほう}）から絶対に離れ^{はな}ず、あくまで、この具体的な現実^{げんじつ}（諸法^{しよほう}）の真実^{しんじつ}の姿^{すがた}（実相^{じつそう}）に、英知^{えいち}を集中^{しゆうちゆう}させている。寿量品^{じゆりやうほん}（第十六章）にも「如来^{にやらい}は如実^{にやじつ}に、三界^{さんがい}の相^{さう}を知見^{しけん}す」（法華經四九九頁）とあります。三界とは現実世界です。

現実世界^{げんじかい}（諸法^{しよほう}）から決して離れない決心^{けつしん}——これが仏の心なのです。同時に、現実世界^{げんじかい}（諸法^{しよほう}）の表面^{ひやうめん}にとらわれず、そこに秘められた偉大^{いだい}なる真実^{しんじつ}の姿^{すがた}（実相^{じつそう}）をとらえ、教え^{おし}、開いていく——これが仏法の智慧^{ちえ}なのです。

「諸法実相^{しよほうじつそう}」という言葉^{ことば}の中に、仏法の徹底^{てつてい}した「現実主義^{しゆぎ}」と、「現実を超えていく智慧^{ちえ}」が込められているのです。

須田 よく分かりました。

この十如実相のうち、「相」は外に現れて見分けられる姿・形など、「性」は内にあつて見えない性質、性分、可能性などです。天台は、如是性の究極は仏性だと言っています。「体」は相と性をあわせ持った主体です。この三如是は、諸法——個々の生命の本体を三つの角度から見たものです。

斉藤 一応、この三つで、個々の生命を統一的にとらえているので、空・仮・中の三諦や法・報・応の三身に当てはめられ、いろいろな法義が立てられていますね。

須田 十如是のうち、「力」は、色心の潜在的な能力です。「作」は、その力が色心にあらわれた働きです。

また「因」は個々の諸法それ自身の中にある変化の原因、「縁」は変化をうながす内外の条件、間接的な原因。「果」は変化によつて得られた直接的な結果で、「報」は結果によつてもたらされる報いです。因・縁・果・報の四つで総じて「因果」ということができます。

斉藤 妙楽は「十如を語らざれば因果備わらず」（摩訶止観輔行伝弘決）と、十如是の特性を因果に見ています。

名誉会長 因果は、成仏の因果——仏になれるか否か——に関わるから大切なのです。

大聖人は十如是を「色心の因果」(御書二三九頁)と表現しておられる。

どの生命(諸法)も、それぞれの「色心の二法」に「因果の二法」が具わって、千変万化の変化を続けている。そういう実相を、仏はありのままに見たのです。

遠藤 最後の「本末究竟等」ですが、これはひとつには、如是相を本とし如是報を末として、首尾一貫して等しいという意味です。

つまり、地獄界なら地獄界として、仏界なら仏界としての統一性を言います。

名誉会長 そういう実相を見るのが仏眼なのだね。

隠された可能性(性・力)や、変化しうる開放性(因・縁・果・報)をもちながら、しかも

統一性をたもっている。相互に依存し、相互に開かれつつ、統一性をもつて成り立っている——それが諸法のありのままの姿(実相)なのです。

詳しくは述べないが、縁起観や三

諦論に通ずる見方です。

須田 諸法実相抄には「地獄は地獄のすがたを見せたるが実の相なり、餓鬼と変ぜば地

獄の実のすがたには非ず」(御書一三五九頁)と述べられています。

名誉会長

「本末究竟等」については、より高次のとらえ方ができます。すなわち 仏ほとけが悟さとった実相じつそうにおいては、仏の生命ほん（本）も、九界の衆生の生命きゅうかい しゆじよう（末）も、詮せんずるところ（究竟して）、妙法の当体みようぼう とうたいとして等しい”ということです。ゆえに、いかなる衆生も、自身じしんが妙法の当体であるという実相を悟さとれば、仏となる。

自身の生命の実相（妙法の当体であること）を悟るか否か、それだけが仏と衆生との違いちがなのです。

大聖人はこう仰おほせです。

「本ほんと申すは仏性・末まつと申すは末願の仏・九界の名なり究竟等と申すは妙覚究竟の如来にょらいと理即りそくの凡夫ぼんぷなる我等われらと差別無きを究竟等とも平等大慧の法華経とも申すなり」（御書四一

三ページ）

遠藤 諸法実相しよぼうの四文字が「一切衆生皆成仏道の根元こんげん」であるとの大聖人の仰おほせの意味いみ

が、少し分すこかってきました。諸法実相は、「諸法にはいろいろな差別さべつ（違い）があるが、その実相は平等に妙法の当体である」ということなのですね。

名誉会長 そう。実相とは、無明むみようを克服こくふくした仏の悟りから見た生命の真実の姿すがたです。

そこでは、一切が平等であり、主体と客体、自分と他人、心と身体、心と物など一切の差異・差別を超えている。始めもなければ終わりもない。十界の差別も超えている。広大な広がりをもった「永遠の生命」の世界なのです。

生命であるということは、躍動であり、智慧であり、慈悲であり、不二の生死であり、法則であり、大宇宙に広がっても大宇宙が広すぎるということもない。素粒子に宿っても素粒子が狭くて困る（笑い）ということもない。

言葉も思考も超えて、まさに不可思議であり、「妙法」としか言いようがない。そういう世界です。

仏は、こうした生命の世界こそが、十界の衆生（諸法）の生命の本当の姿（実相）だと悟ったのです。つまり、「諸法（十界）の実相」です。

ゆえに、大聖人は「諸法実相……本末究竟等」の経文の意義を、こう明かされている。「下地獄より上仏界までの十界の依正の当体・悉く一法ものこさず妙法蓮華経のすがたなり」と云ふ経文なり」（御書二三五八頁）

地獄界から仏界までの衆生（正報）も、その衆生の住む世界（依報）も、実は、すべて

「妙法蓮華經のすがた」なのだと仰せです。

「諸法」は無数ですが、すべて「十界の依報と正報」に含まれます。それらが、ひとつのこらず「妙法蓮華經のすがた」として等しい（本末究竟等）と見るのが、「実相」を見ることです。

十如是も、このことを説こうとしたのです。

大聖人は「十如是と云は妙法蓮華經にて有けり」（御書四一五）と仰せです。

また「法界のすがた妙法蓮華經の五字にかはる事なし」（御書一三五八）とも言われている。宇宙全体が「妙法蓮華經のすがた」なのです。

戸田先生は「宇宙生命それ自体が、南無妙法蓮華經なのです」と言われていた。

諸法の実相を見るならば、人間も草木も、太陽も月も「妙法蓮華經」の姿でないものはない。森羅万象は「妙法蓮華經」の律動を奏でているのです。

現代人に分かりやすく、まとめて言えば、「諸法」は個々の生命、その諸法の「実相」は、ひとつの大いなる宇宙生命と表現することも可能でしょう。

数限りない個々の生命は、それぞれの「色心の因果」に則って、千差万別の多彩な生命

の曲を奏きよくでています。その曲は、表面的ひようめんてきには、各々が勝手かつてに奏でているように思えるかもしれない。しかし、それは部分観ぶぶんかんである。

その実相じつそうは、一切いっさいの曲が、まとまって、妙法みょうほうという、ひとつの大きいなる交響詩こうきやうしを奏でているのです。個々ここの曲は、それぞれ曲として統一性とういつせいをもち、それぞれ完全かんぜんでありながら、しかも、すべてが、妙法という宇宙生命うちゆうのシンフォニーに、なくてはならない曲なのです。もちろん、これは譬喩ひゆにすぎません。

大切なことたいせつは、たとえば地獄界じごくかいなら地獄界の衆生しゆじやうも、自己じこの真実しんじつの姿すがた（実相）、すなわち汝自身なんじじしんを知れば、実は輝かがやかしい宇宙生命と一体いつたいであるということです。

しかも、その宇宙生命は、ほかならぬ地獄界という自身の現実に即そくして開顕かいけんする以外にない。

「実相」という永遠えいえんの生命世界は、いつ、どこにあるか。「いま」「ここに」ある。それを悟さとれば仏、悟らなければ九界きゆうかいです。ゆえに、菩薩界ぼさつかいが仏界ぶつかいに近いのでもなければ、地獄界が仏界から遠いとおのでもない。平等に、自己に即して仏界を開くことができるのです。

「個々の生命（諸法）しよほう」は即「宇宙生命（実相）」である。しかも「宇宙生命（実相）」と

言つても「個々の生命（諸法）」を離れては存在しないのです。

こういう「諸法実相の生命の世界」を、大聖人は、こう表現されています。

「心すなはち大地・大地則草木なり」（御書一五九七ページ、白米一俵御書）と。「心」は宇宙生命と言つてよいでしょう。

法華經以前の經典では、まだ哲学が浅いゆえに、「心（宇宙生命）から万法（個々の生命）が出生する」等と説いた。心は大地のごとく、万法は草木のごとしと。心と万法が別々です。

しかし法華經は、そうではない。心がすなわち大地であり、大地はすなわち草木である。実相と諸法は一体である。分けられない。月も花も、ひとつひとつが、宇宙生命の全体と一つである。

「月こそ心よ・花こそ心よ」（御書一五九七ページ）です。

齊藤 多くの哲学が「現象の奥に」真理を見ようとしたり、「現実の根底」に根源の一者を立てたりしました。しかし、法華經は、そうではないのですね。

この白米一俵御書には「まことの・みちは世間の事法にて候」（御書一五九七ページ）との

有名な御言葉があります。「世間の事法」という現実（諸法）に即してこそ、「まことの道」すなわち実相の智慧は発揮されるわけですね。

遠藤 法華經法師功德品（第十九章）では、法華經を受持する人に六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）が清淨になる功德があると説きます。その中の意根の功德をこう説いています（法華經五六一ページ）。

——法華經を受持する人が説くことは、すべて実相に背かない。世間の書物や、治世の言葉や、經濟の営みについて説いても、みな正法に適っている。

これを受けて天台は「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」と述べています。

名誉会長 法華經の偉大な功德です。また、法華經を信ずる人のあるべき姿です。法華經を信ずる人は、善は善、悪は悪として、正しいことを説かなければなりません。それでこそ「実相と相違背せじ」となる。

遠藤 次元は違いかもしれませんが、中国の古典に「一葉落知天下秋（一葉落ちて天下の秋を知る）」（唐庚『文録』）とあります。

「一葉が落ちる」姿を見て、「秋」の到来を知ることができる。あえて諸法実相に置き換

えれば、「一葉いちようが落ちる」姿すがたは諸法しよほう、「秋」は実相じつそうでしうか。

名誉会長 見えない「秋（実相）」は、見える「一葉（諸法）」に自分を映うつし出すのです。

諸法は実相の顕あらわれです。また諸法に顕れない実相はありません。

須田 諸法を見て実相を知る智慧ちえは、学者や芸術家げいじゆつか、商売上手な人しょうばいじやうず、家庭かていをきりもりする聡明な母など、それぞれ一面的には持つてゐるのではないでしうか。

名誉会長 当然とうぜん、そうでしう。法眼ほうげん・仏眼ぶつげんにいたらなくとも、慧眼えげん・天眼てんげんがある。

何と言つても、戸田先生は鋭するどかつた。現象げんじやうを通して本質ほんしつを見抜く天才てんさいだつた。先生ほどの指導者しどうしやは、ほかにいないでしう。

はじめに話題わだいになつた、日本の敗戦はいせんと荒廃こうはいの姿——これは「諸法」です。それを見て、

先生は、「大仏法興隆の時こうりゆう」であると叫さけばれた。これこそ諸法実相の智慧ではないだらうか。

逝去せいきよされた年の「年頭ねんとうの言葉ことば」にも書かれていた。

「政治せいじ、労働ろうどう、文化ぶんか、経済、教育等々、各界かつかいがみな自界叛逆じかいほんぎやくの相そうを呈ていして、五濁悪世ごじよくあくせの名にもれず、泥沼どろぬまにうごめくがごとき状態じやうたいを続けている。そして、これが一国謗法いつこくぼうほうの総罰そうばち

のすがたであるとは、だれも考えおよぶ者がいない」と。

遠藤 具体的には何をさして、おっしゃったのでしょうか。

名誉会長 政界では、組閣や閣僚ポストをめぐる内部分裂。労働界では、指導者層の、いっばんくみあいじんそう一般組合員層からの遊離。文化面では、健全な文化の育成を阻む学閥抗争——等々を挙げられていた。

須田 そうした傾向は、今も変わっていません。問題は、なぜこうなるのかだと思いませんが。

名誉会長 そう。戸田先生は、指摘された。

「もともと、あらゆる機構は相争うために生みだされたものではない。それは人類福祉のために考えられ、採用されたものであったはずである」

斉藤 まったく、その通りです。

名誉会長 そして結論的に、こう言われた。

「それにもかかわらず、いま、まったく反対機能の場となってしまうた理由は、一国こそって正法に反対し、これを説く者を迫害し、こそって誹謗正法の罪をつくっているところ

ろにある。すなわち、日蓮大聖人の立正安国りつしょうあんこくのお教えおしに背そむいているためなのである」と。

遠藤 立正安国論で大聖人は、経文きょうもんに照てらして警告けいこくされました。人間の根本こんぽんである思想・宗教しゆきょうが乱れみだれ、それを放任ほうにんしたまま正法しょうぼうに目覚めめざないならば、その乱れは必ず国土・社会こくどに反映はんえいするであろうと。

名誉会長 思想・宗教の乱れとは、「諸法しよぼうの実相じつそう」を見られない智慧ちえの乱れであり、ひいては生命の乱れです。依正不二えしよふふにが実相であるゆえに、その「正報しょうほう」の乱れが、「依報えほう」である社会・国土にも不調和ふちやうわを起こすのです。

須田 三災七難さんさいしちなんですね。

名誉会長 大聖人の当時は、軽い難なんから重い難へと、順次じゆんじ、起こった。数々の天変地てんぺんち天てん。権力抗争けんりよくこうそうによる内乱ないらん（自界叛逆難じがいほんぎやくなん）。そして最後さいごは、蒙古襲来もうこうしゅうらいという最大の難「他国侵たこくしん逼難びつなん」です。

ときうつ 時移り、戸田先生は「いま広宣流布こうせんるふの時をむかえて、難の出方でかたが大聖人御在世ございせと逆次ぎやくじにできて「いる」と指摘しできされた。

さいしよ つまり最初に、未曾有みぜうの大敗戦だいはいせんという「他国侵逼難」。そして、各界かつかいの分裂・抗争に見

られる「**自界叛逆難**」にさしかかっていった。

妙法に背いた罪による病は、妙法に帰することによつてしか治らない。だから全民衆の幸福のためには、妙法の広宣流布しかないのだと叫ばれたのです。

斉藤 戸田先生は、經典と大聖人の仰せに照らし、民衆のゆく末を憂えて、戦後社会という諸法の実相を洞察されたのですね。

名誉会長 そう。身近なことでは、広宣流布の大進展が、まちがいないという一つの証拠（諸法）として、「交通の便」の発達をよく挙げられていた。多くの人が集まれること自体、すごいことなのだと。その通りであつた。

ともあれ、諸法実相は、どこまでも「**現実を变革**」する哲理です。苦悩に満ち満ちた現実を絶対に離れない。逃げない。その現実のなかから、人々の仏界の生命を開発し、世界の安穩を実現していく智慧なのです。

遠藤 「諸法実相」を実現するとは、個人においては「**一生成仏**」を、社会においては「**立正安国**」を実現することと言つてよいでしょうか。

名誉会長 その通りです。

「一生成仏」とは、この現実の今世において成仏することです。

成仏といっても、何か固定的な到達点のことではない。現実の真つただ中で苦闘する、その姿のまま、仏の境涯を開くのです。

苦悩する境涯から仏の境涯へ、そして仏の境涯から現実の変革へと、常に出発していく信心の強さ。戦い続ける「信心の強さ」。そこにしか仏界はない。

観心本尊抄には「末代の凡夫出生して法華經を信ずるは人界に仏界を具足する故なり」

(御書二四一ページ)とあります。

須田 日寛上人も「法華經を信ずる心強きを名づけて仏界と為す」と言われています

(三重秘伝抄)。「信心」によつて「諸法実相」が実現できるということです。天台との大

きな違いですね。

名誉会長 そうです。

天台の方法は「一心三觀」と言つて、諸法実相の深理を思索し、明らかに実感する修行です。瞑想が中心的な実践です。

しかし、この方法は難しく、だれもが正しく修得できるとは限らない。確かな地図とコ

ンパスなくして密林に入れば、たいていの人は迷ってしまうでしょう。目的地まで行ける人は少ないに違いない。

これに対して、大聖人の仏法の修行は何か。

「一念三千の観念も一心三觀の觀法も妙法蓮華經の五字に納れり、妙法蓮華經の五字は又我等が一心に納りて候けり」(御書四一四頁)と仰せです。

また「一念三千の法門をふりすぎたてたるは大曼荼羅なり」(御書一三三九頁)と。一念三千の「一念」は実相、「三千」は諸法です。御本尊は、諸法実相の御本尊であり、一切衆生の諸法実相を映す「鏡」です。

中央の「南無妙法蓮華經 日蓮」は実相を表し、左右の十界は諸法を代表しています。この諸法実相の御本尊に向かって唱える妙法の音声は、我が身の仏性を呼びます。呼ばれた仏性は、外に顕れようとします。

すると、自覚するとしなにかかわらず、胸中に「仏界の十如是」の太陽が昇る。本有の青空が、厳然と我が胸に広がるのです。

御本尊を信じ、「南無妙法蓮華經」と唱えることによって、自身(諸法)が妙法の当体

(実相)と輝くのです。まさに万人に開かれた「一生成仏」の修行法です。

外にある御本尊も「妙法蓮華經」。内なる我が一心も「妙法蓮華經」。御本尊を「信ずる」ことが、同時に、我が身の諸法実相を悟る「智慧」になっている。「以信代慧(信を以て智慧に代える)」の法門です。

須田 一生成仏抄にも「妙法と唱へ蓮華と読まん時は我が一念を指して妙法蓮華經と名くるぞと深く信心を発すべきなり」(御書三八三ページ)と仰せです。自分の生命(諸法)が「妙法蓮華經(実相)」そのものなのだと。

齊藤 また、こうも仰せです。

「我が身の体性を妙法蓮華經とは申しける事なれば經の名にてはあらずして・はや我が身の体にてありけると知りぬれば我が身頓て法華經にて法華經は我が身の体をよび顯し給いける仏の御言にてこそありければやがて我が身三身即一の本覺の如来にてあるものなり」(御書四一一ページ)

妙法蓮華經とは經典の名前だろうと思っていたら、そうではなかった。自分自身のことだった。妙法蓮華經は、本来の自分(自身の実相)を呼び顯す仏の言葉なのだと。

須田 そのことを心の底から分かれれば、どう変わるのか。御文は続いています。

「かく覚めれば無始より已来今まで思いならわしし・ひが思いの妄想は昨日の夢を思いやるが如く・あとかたもなく成りぬる事なり」(御書四二一紙)

今までずっと、自分はつまらない存在だと思い込んでいた錯覚は、跡形もなく消えてしまふ。まるで昨日の夢のように。

遠藤 その様子は、あたかも、月を覆っていた雲が晴れ、皓々たる月輪が輝き出すようであるとも説かれていますね(御書四一四紙)。諸法の実相が分かれば、実は仏も衆生も「一つ」であり、別々ではないのですね。

ただ、それは私たちの生活において、具体的に、どうなることなのか。それが分からないと、諸法の実相といっても観念論のような気がするのですが……。

名誉会長 戸田先生は、分かりやすく教えてくださっています。

「病氣などで悩んでた人も、御本尊様を受持することによつて、すなわち、安心しきつた生命に変わるのだ。根底が安心しきつて、生きてること自体が楽しいというようになる。生きてる自身が楽しいといったって、九界を具するのだから、ときには、悩むことも

あるし、悩みなやが變かはわることもある。いままで自分のことで悩んでいたのだが、人のことに變かはわることもある。

生きてること自体じたいが、絶ぜつ對たいに樂たのしいということが仏ほとけではないだろうか」と。

人生には、苦くもあれば樂らくもある。信心ぶつがいが深ふかければ、それらの諸法しよほう（諸の現象もろもろげんしやう）が、すべて仏界ぶつがいの十如じゆうによぜ是ぜを強はたらめるように働はたらくのです。「苦樂ともに」樂きようがいしめる境涯きやうがいになるのです。

大聖人が諸法実相じつそうの御本尊ごほんぞんを顯あらわされたことが、いかに偉大いだいな、前代未聞ぜんだいみもんのことであられるか。ありがたさが胸むねに迫せまつてきます。

須田　　そういえば、大聖人は、諸法実相じつせんについて述のべられた主おもな御書で、必ず御本尊への信心ぶつじんの「実践じつせん」を強きようちよう調ちようされていますね。

名譽會長　それは大切なことに気がついたね。

須田　　例たとえば諸法実相抄しやうには「一閻浮提第一いちえんぶだいの御本尊を信じさせ給たまへ」「行学ぎやうがくの二道をそいうろうはげみ候そうろうべし」（御書一三六一頁）とあります。

日女御前御返事には「南無妙法蓮華經とばかり唱となへて仏になるべき事こと尤も大切なり、信心しんの厚薄こうはくによるべきなり仏法の根本こんぽんは信もつを以みなもて源とす」（御書一二四四頁）と仰おほせです。

名誉会長 大聖人の仏法の根本は「信心」です。信を根本にしての「如説修行」です。

齊藤 同じ法華經を拠り所としながら、この「修行」を見失ったのが、大聖人当時の天台宗です。

衆生は本来、仏なのだ。そのまま仏なのだから、どんな欲望も、どんな現実も、そのまま肯定していいのだ」と。

名誉会長 諸法実相の曲解です。

修行の放棄であり、現実への追従です。

諸法実相は、平板な「諸法イコール実相」ではない。

諸法即実相、実相即諸法。その「即」は「イコール」ではない。大聖人は「即の一字は南無妙法蓮華經なり」（御書七三二）と仰せです。一瞬たりとも停滞せず、顕現し、冥伏し、創造し、拡大してやまない生命のダイナミズムが「即」の一字には込められているのです。

諸法即実相といっても、あくまで仏が見た究極の真理です。迷いの凡夫が見る現実とは隔たりがある。ゆえに「人」は「真理」の実現へ向かって、絶えず近づかねばならない。

それが「修行」^{しゆぎよう}です。諸法実相^{しよほうじつそう}という「理想」^{りそう}に向かつて、絶えず「現実」^{げんじつ}を超えていかねばならない。それが「変革」^{へんかく}です。

この挑戦^{ちようせん}を忘れると、諸法実相^{しよほうじつそう}という立派^{りつぱ}な法理^{ほうり}を隠^{かく}れミノにして、人は現実に埋没^{まいぼつ}し、無気力^{むきりよく}になってしまいます。

これは恐ろしいことです。

無気力^{むきりよく}は、権力者^{けんりよくしや}を野放し^{のばな}にする素地^{そじ}になるからです。権力者の側^{がわ}からすれば、こんな支配^{しはい}しやすいことはないのです。どんな悲惨^{ひさん}な現実があっても、その現実を民衆^{みんしゆう}が肯定^{こうてい}し、受け入れてくれるのだから。

本来^{ほんらい}は、その反対^{はんたい}に、生命の道^{せいめいのみち}に背^{そむ}く権力者を諫^{いさ}めるのが諸法実相の智慧^{ちえ}です。それは大聖人の実践^{じっせん}に明らか^{あき}です。

遠藤 天台宗^{てんだいしゅう}は、法華経の「開会」^{かいえ}の法門^{きよつかい}を曲解^{きよくかい}して、何らかの利益^{りやく}があると思えば、どんな教え^{おし}も真実^{しんじつ}だと主張^{しゆちよう}しました。

念仏^{ねんぶつ}も、真言^{しんごん}も、禅^{ぜん}も、すべて法華経だ。そう信ずるのが修行^{しゆぎ}なのだ」と。

「当世^{とうせい}・天台宗の開会の法門^{きよつかい}を申すも此の経文^{きようもん}を悪^{あし}く意得^{こころえ}て邪義^{じやぎ}を云^いい出し候^{そうろう}ぞ」(御書)

一一三九〇と大聖人は仰せです。

須田 いわゆる「本覚思想」ですね。

大聖人は、こうした邪義と厳しく戦われました。

「如説修行の人と申し候は諸乗一仏乗と開会しぬれば何れの法も皆法華經にして勝劣浅深ある事なし、念仏を申すも真言を持つも・禪を修行するも・総じて一切の諸經並びに仏菩薩の御名を持ちて唱るも皆法華經なりと信ずるが如説修行の人とは云われ候なり」(御書五〇二)と彼らの主張を挙げられたうえで、「然らず」(御書五〇二)——そうではない——と破折されています。

名誉会長 人それぞれに良いと思っていれば、どんな教えも同じ——こうした宗教者の驕りと怠慢が、今の日本の精神風土をつくってきたとは言えないだろうか。

斉藤 その通りだと思います。

正邪の峻別を嫌い、安易な「和」に溶け合うことで保身を図る。そういう「なれ合い」を「寛容」と勘違いしている。

強力な現実には常に追従し、屈伏する。そのため、権力者と戦う民衆に対しては、権力

者の手先となつて封じ込めようとする。あるいは傍觀し、正義を黙殺すること、惡に荷担する。

自分たちはうまく生き延びているつもりでいて、実は権力の魔の手に骨抜きにされていることに気づいていない……。

須田 こうした「理想なき現実主義」ほど、人間を卑小にするものもありませんね。

遠藤 また、本覺思想と反対の意味で極端なのが念仏の思想です。この世で仏になるのではなく、死んでから別のところに生まれ変わって幸せになるのだと主張する。

現世で幸せになれないのなら、どこに、来世で幸せになれる保証があるというのか。つきつめれば、現世で頑張るより、早く来世に行つたほうがよいとなつてしまふ。現実からの逃避、現実否定の宗教です。

齊藤 また禅宗などは、社会の現実と自分を分断し、自分だけの小さな世界に閉じこもつてしまふ傾向が強い。

名誉会長 これらに対して「諸法実相」を悟つた仏とは、どういう仏か——大聖人は仰せです。

「本末究竟と申すは本とは悪のね善の根・末と申すは悪のをわり善の終りぞかし、善悪の根本枝葉をさとり極めたるを仏とは申すなり」(御書一四六六頁)と。

現実のこの世の「善」と「悪」を見極め、人々を救うのが諸法実相の智慧の実践です。

この御文の直後に、大聖人は「智者とは世間の法より外に仏法を行ず」とされ、仏法以前の人であつても、民衆の苦しみを救つた人は「教主釈尊の御使として」「内心には仏法の智慧をさしはさみ」行動したと仰せです。

教条的でない、広々としたお考えが、うかがわれます。

「この世に埋没する」現実追従。「この世に目をつぶる」現実拒否。「あの世に逃げる」

現実逃避――。

法華経は、このいずれでもない。

大聖人は、旧来の天台宗を、また禅宗・念佛宗を強く批判された。それらはすべて「諸

法の実相」に背いているのです。

法華経の諸法実相は「現実を变革する」哲学です。

運命論には従わない。あきらめにも同調しない。それらの無力感をはね返す「バネ」を

開発する。「だからこそ変えていくのだ」と闘志を奮い立たせる。そして「自分は今、何をなすべきか」と問い続ける責任感を呼び起こすのです。

遠藤　そううかがって思い出すのは、「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」という、池田先生の小説『人間革命』のテーマです。これは法華経の智慧そのものであり、大聖人の仏法の根本精神なのです。

名誉会長　私は「戸田先生の弟子」です。そこに私の根本の誇りがある。

戸田先生は、獄中で法華経を身読された。

「法華経が分かった」と主張するだけの宗教者なら、他にもいたでしょう。教祖にまでなった者もいた。

しかし戸田先生は違っていた。あなたは仏様かと新聞記者たちから聞かれて、「立派な凡夫だよ」と語っておられた。挫折と蘇生のドラマを演ずる民衆群を抱きかかえながら、嵐の真ただ中に、厳然と立っておられた。

人間革命——先生の人生そのものです。

人間革命——先生はこの一言に、宗教が陥りやすい独善の罟を打ち砕いて、仏法の最高の智慧と、人間の最高の生き方と、社会の最善の道とを、見事に合致させたのです。

須田 「二生成仏」と「立正安国」を、一言で現代の言葉に結晶させていると思います。

名誉会長 人間革命は即、社会革命・環境革命になる。

諸法実相抄で大聖人は、妙楽の「依報正報・常に妙経を宣ぶ」（御書一三五八ページ）との釈を挙げられています。依報（環境世界）も、正報（主体となる生命）も、常に妙法蓮華経を顕している。

天台も言っている。「国土にも十如是有る」と。

依報も正報も、別々のものではない。不二です。ここから、人間の変革が国土・社会の変革に通じるという原理が生まれる。

諸法実相という仏眼から見れば、森羅万象は、ひとつの生命体です。正報だけの幸福はありえない。依報だけの平和もありえない。自分だけの幸福もなければ、他人だけの不幸もない。人を幸福にした分、自分も幸福になるし、だれか一人でも不幸な人がいる限り、自分の幸福も完全ではない。こう見るのが諸法実相であり、ゆえに、「現実変革への限り

なき挑戦」が、諸法実相の心なのです。

大聖人は、立正安国論を著された御心境を「但偏に国の為法の為人の為に身之為此を申さず」(御書三五)と述べられています。どんな大難の嵐も、この民衆救済への炎を消せなかつた。

この御精神を受け継いで、「立正安国」の旗を高く高く掲げ、牧口先生は獄中に殉教なされた。戸田先生は、敗戦の荒野に一人立たれた。

「法華の心は煩惱即菩提生死即涅槃なり」「一念三千は拔苦与楽なり」(御書七七三)民衆を苦悩から救うために仏法はある。創価学会はある。人類を幸福にするために創価学会は戦う。それ以外に存在意義はありません。

その学会とともに進む人生は、どれほど偉大か。どれほど尊いか。

諸法実相の眼で見れば、「いま」「ここ」が、本有の舞台です。本舞台なのです。「此を去つて彼に行くには非ざるなり」(御書七八一)です。

「宿命」とも思えるような困難な舞台も、すべて、本来の自己の「使命」を果たしていくべき、またとなき場所なのです。

その意味で、どんな宿命をも、輝かしい使命へと転換するのが、諸法実相の智慧を知つた人の人生です。

そう確信すれば希望がわく。出会う人々、出あう経験のすべてが、かけがえのない「宝」となる。

タゴールはうたつた。「この世は味わい深く、大地の塵までが美しい」と。
彼は子を思う母の心を、こう綴っています。

「坊や、おまえに　きれいな色のおもちやをもつてくるとき、母さんにはわかります——どうして雲や水に　あんなに美しい色彩の戯れがあるのかが、どうして花々が　色とりどりに染められているのかが。坊や、おまえに　きれいな色のおもちやをあげるとき。おまえを踊らせようと　歌うとき、母さんには　ほんとうにわかります——どうして木の葉のなかに　音楽があるのかが、どうして浪たちが　耳を澄ませて聴いている大地の心臓に　さまざまな声の合唱を送るのかが。おまえを踊らせようと　歌うとき」(森本達雄著

『ガンディーとタゴール』、第三文明社ヘレグルス文庫)

子を慈しむ母の心には、色鮮やかな世界が輝いている。生き生きとした生命の音律が響

いている。愛は、生命の個別性を超えて、「不二」という生命の実相へと心を開くからで
す。

ならば全人類を慈愛で包みゆかんとする私どもの人生には、どんなに素晴らしい生命の
光彩が、音楽が、満ちあふれていくことか。

「諸法実相」と確信すれば、今いるこの場所が「常寂光土」です。

「生きてること自体が、絶対に楽しい」

戸田先生が言われた、この大歓喜の世界を、現実の大地に創り広げていく。その晴れや
かな「挑戦の人生」を、法華経は教えているのです。

かけがえのない個々の生命

齊藤 諸法実相が、一切衆生の成仏の「根元」の法理であることを確認できました。諸法実相の現代的な意義について、さまざまな角度から語っていただきたいと思います。

「諸法すなわち個々の生命」が即「実相すなわち宇宙生命」と一体である——部分が即全体であるという、この不可思議な関係を明らかにしたのが諸法実相の法理ですが、現代科学の各分野でも、全体は部分の単なる総和ではなく、個の中に全体が含まれているということを主張するようになっていきます。

名誉会長 その通りだね。このあたりから見えていくと、現代人には、むしろ分かりやすいかもしれない。

遠藤 個に全体が含まれていることを示す科学的な知見は数多くあります。最も分かり

やすいのは、細胞さいぼうの中にあるDNA（デオキシリボ核酸かくさん）の話でしようか。

DNAというのは、生命体の遺伝情報いでんじょうほうを担になう物質ぶつしつで、生命のすべての細胞の中にあります。人間の身体しんたいを構成こうせいしている細胞はほぼ二百種類しゅるいあり、さまざまな異なる働きはたらをしています。ですから、それぞれの細胞に含まれるDNAは当然異なっていると考えるのが自然しぜんです。しかし実際じつさいには、ほとんどすべての細胞に同じDNAがある。つまり、髪の毛を作っている細胞であれ、肝臓かんぞうを作っている細胞であれ、どの細胞ひとつとっても、そこには身体全体ぜんたいの情報じょうほうが入っていることになります。

須田 だから、「ジュラシック・パーク」というアメリカの恐竜映画きょうりゅうえうにあったように、化石かせきから取り出した一つの細胞があれば、絶滅ぜつめつした恐竜でも再生さいせいできるということが理論的には成り立つわけですね。

名誉会長 どの細胞のDNAにも、すべての情報が入っているからこそ、その細胞が身体しんたいのどこに位置いちするかによって、その位置に適かなった機能きのうを発揮はつきできる。髪の毛なら髪の毛、肝臓なら肝臓と。それで、身体全体の調和ちやうわがある。生命の妙みょうです。

戸田先生は、生命体の各部分が、あるべきところにあることを、「衆生法妙しゆじやうほうみょう」の譬えたとに

挙げられていた。

斉藤 一つ一つの細胞の中の遺伝子に、身体全体の情報が入っているということです。が、このことを巨大な図書館に譬えた人もいます。笑い方、泣き方、歩き方など、私たちが

方便品から

「汝等既已に 諸仏の世の師の 随宜方便の事を知りぬ 復諸の疑惑無く
心に大歡喜を生じて 自ら當に作仏すべしと知れ」
(法華經一九一節)

あなたがたは、すでに、世の師である諸々の仏が、それぞれの衆生にふさわしい巧みな方法を用いて教化することを知った。であるからには、諸々の疑惑をもつことなく、心に大歡喜を生じて、自分自身が必ず仏になると知りなさい。

の身体が、どのように振る舞うか、という情報のすべてが、この細胞の「図書館」に所蔵されているというのです。一説によると、一つの細胞に収められている情報は、五百ページのの本千冊に相当するそうです。ちなみに、生きている間に習得した情報を保存する脳を図書館に譬えれば、収まる情報量は二千万冊にもなるといわれます。

名誉会長 「脳の世界」は、二十一世紀の科学の最大のフロンティアとされる。まさに一つの小宇宙というべき広大な世界です。これまでの研究によって、脳の部位ごとの働きなどが明らかにになってきたようだね。

須田 はい。喜怒哀楽の感情はもとより、○や△、×といった記号を識別する脳の部分まで発見されているということです。

名誉会長 ところが、脳の研究が進むにつれて、脳というのは、単にそれら部分部分の働きを集めただけのものではないことが明らかになってきた。

例えば、人間の脳には知的な機能を司る「左脳」と、芸術的な機能を司る「右脳」があるといわれている。しかし驚いたことに、片方の脳がすっぱり欠けている人がいるという。

社会的にも何不自由ない生活を送っていたある青年は、たまたま受けた脳の精密検査で

左大脳半球がないことが分かった。知的能力を担っている左脳がないのだから、従来の常識からいえば、その青年は言葉を理解できないし、右半身も不自由なはずです。しかし、実際にはそうではなかった。つまり、残された右脳が、欠けている左脳の役割まで肩代わりしていたというのです。

遠藤 生命は本当に神秘ですね。脳に欠損部があるため、機能障害をもった子どもが、成長するにしたがって脳が自己修復していき、成人するころには正常な状態になっていたという例も数多く報告されています。そうした脳欠損の障害をもつ子どものために、その子を他の子どもたちと一緒に育て、絶え間なく刺激を与え続けるようにしている保育園もあるそうです。そのなかで、例えば脳幹と前頭葉の一部しかなかった子どもでも、根気強く接することによって、他の子どもと一緒に遊べるようになった例もあります。

名誉会長 なるほど。生命には測り知れない可能性がある。その莫大な力が、明らかになってきたいるようだ。

だから、どんな人に対しても、あの人はダメなどと決めつけてはいけね。特に自身の可能性を決めつけてはいけね。多くの場合、「行き詰まり」は、自分自身のそう

した決^きめつけから生まれているものです。

齊藤 脳^{のう}のこうした機^き能^{のう}について、ホログラムの原理^{げんり}との相^{そう}似^じを指^し摘^{てき}する人もいます。

ホログラムは光の波を重^{かさ}ね合わせることによつて作り出す三次元^{さんじ げん}の立^り体^{たい}像^{ぞう}です。この一つのホログラムのフィルムがいくつかに切り離^{はな}されても、どの一つの断片^{だんぺん}からも元^{もと}の全^{ぜん}体^{たい}像^{ぞう}を見ることができ^{ぞう}るのです。前ほど、くつきりした像にはなりません^{ぞう}が、ともかく全^{ぜん}体^{たい}の立^り体^{たい}像^{ぞう}が見えるのです。

名誉会^{ひとつぶ}長^{すな} 「二粒^{ふたつぶ}の砂^{すな}に世界を見る」(ブレイク)という詩人^{しじん}の直観^{ちよくかん}を思^{おも}い出^だすね。

須田 「個^こ」の中に「全^{ぜん}体^{たい}」が含^{ふく}まれてい^いるという意^い味^みでは、近^{きん}年^{ねん}注^{ちゆ}目^{もく}されてい^いる「フラクタル理^り論^{ろん}」が^らあ^りま^す。

これは、も^もと^とは幾^き何^か学^{がく}の理^り論^{ろん}上^{じやう}生^{せい}み出^だされ^れた^たも^もの^ので、一^{いち}部^ぶと全^{ぜん}体^{たい}が同^{どう}じ形^{かたち}をも^もつてい^いるという自^じ己^こ相^{さう}似^じ性^{せい}をも^もつた構^{こう}造^{ぞう}をい^いい^ます。実^{じつ}は、この「フラクタル構^{こう}造^{ぞう}」は自^し然^{ぜん}界^{かい}のいたるところで見^みられ^れま^す。人^{にん}間^{かん}の肺^{はい}の気^き管^{かん}支^しの枝^{えだ}分^わかれ^れの仕^し方^{かた}は、その細^{さい}部^ぶを^{さく}大^{だい}し^しても全^{ぜん}体^{たい}と同^{どう}じ枝^{えだ}分^わかれ^れを^してい^いる点^{てん}で「フラクタル」です。ほかに、脳^{のう}の中^{ちゆう}の細^{さい}か^かな^な血^{けつ}管^{かん}の分^{ぶん}かれ^れ方^{かた}。川^{しり}の支^し流^{りゆう}が描^{えが}き出^だす形^{かたち}。雲^{くも}の形^{かたち}。樹^{じゆ}木^{もく}の枝^{えだ}分^わかれ。これま^まで、規^き則^{そく}性^{せい}が

ないように思えた自然界の諸現象に、「個」と「全体」の相似性が見られるのです。

更に、自然現象に止まらず、通信のエラーや株価の変動、所得の分布といった社会現象にも「フラクタル構造」を見ることができるといいます。

遠藤 個の中に全体があることは、十界論で言えば、十界のそれぞれ（個）に十界（全体）があるということになります。つまり、十界のそれぞれが小宇宙であるということです。

須田 十界互具です。これは、一個の生命に十界を具するということです。同時に、宇宙生命自体も十界を具しているということです。戸田先生は、生命論に関する座談会で、次のように言われています。

「地球状態の他の星でも同じことですが、人間を感ずる、感ずるといふと、ちよつとおかしいが……大宇宙ぜんぶが十界ですから、そこ（その星）において人間生命がそれに応じて、なんらかの形で出現する。あるいは、ここに、イヌだのネコだのいるとする。仮定ですよ、これは。そこに人間が一人もいなかったとすると、その畜生界にその人間界を感ずるのです、十界互具だから。そうすると生まれるのが人間みたいなのが生まれるのです」

齊藤 感応かんのうの妙みょうですね。大宇宙だいうちゅうそのものが十界じつかい全てを具足ぐそくした当体とうたいであり、宇宙そなに具そなわる十界じつかいが、それぞれの星じょうたいの状態じょうたいの、それぞれの縁えんに応おうじ、また時かんを感じ、何かに感応かんのうして現あらわれてくる……。

十界じつかい互具ごぐの法理ほうりは、進化論しんかろんなど生物哲学せいぶつてつがくの分野ぶんやにも重要じゅうような示唆しそを与あたえるものではないでしようか。

名誉会長 今後の研究課題けんきゅうかだいでしよう。

部分ぶぶん即全体そくぜんたいという諸法実相しよほうじつそうの智慧ちえから見るならば、万物ばんぶつは、それぞれが全宇宙ぜんちゅうの宝たからをもつ尊極そんごくの存在そんざいです。

方便品ほうべんぽんに、諸法実相しよほうじつそうを言い換かえて「是この法ほうは法位ほういに住じゆうして 世間せけんの相常住そうじようじゆうなり」(法華經一八三)とと説とかれていゝる。世間の相さう(諸法)は常住みようほうの妙法すうの姿すがた(実相)である、と。

天台てんだいも「一色いつしき一香いつかうも中道ちゆうどうに非あらざること無し」(摩訶止観まかしかん)と言いつた。一色一香いつしきとは、微細びさいな物質ぶつしつを指さします。いかなる微細な物も中道実相の当体、すなわち宇宙生命の当体だといふことうです。

その意味いみで、自然しぜんも、人間にんげんが一方いつぱう的に消費しょうひし支配しはいする対象たいしょうでは絶対ぜったいにない。自然も人間

も同じ宇宙生命の部分であり全体である。自然と人間は一体です。自然を破壊することは、人間を破壊することです。

遠藤 諸法実相の法理は「環境倫理」の問題にも直結しているわけですね。

名誉会長 そう。大聖人は「生住異滅の森羅三千の当体悉く神通之力の体なり」（御書七五三）と仰せです。生滅し、変化してやまないすべての現象は、それ自体、如来の神通の力であると。

変化、変化を続ける万物も、実は、そのままで常住であり、中道であり、実相であり、如来なのです。

戸田先生は言われた。

「つきつめるなら、万物の一瞬を如来とは読むべきである。……吾人の生命のみならず、宇宙の万物は、一つとして一瞬も変化せざるものはない。一刻一刻に変化へ、変化へとたどるのである。されば、いかなるものでも、如々として移るので、家の如きもの、あるいは、家そのもの、そのものとして変化し、刻々に土くれとなり、塵となり、土くれは土くれ如きもの、土そのもの、塵そのものとして、また分解の作用へと進むのである。

万物を『如きもの』として観ずれば、これは仮の義で、仮のすがたなるがゆえに、実体にあらずとすれば空の義である。

もし、一瞬一瞬がそのままの存在とみるなら、それは中道である。されば、一瞬一瞬の万物も、相、性そのままが実相であるのである。われらも、この一刻一刻の生命、生活が実相で、この一瞬の実相のうちに過去久遠の生命を含み、かつ、未来永遠の生命をはらむのである。この一瞬の生命のうちに、過去久遠の生活の果を含み、未来永劫の生命の因を含む、これ蓮華の法である。

この一瞬の生命こそ、宇宙自体の活動であり、自己の生命であり実在である。この宇宙の一瞬一瞬の活動は、時々刻々に変化した種々の現象として表現し、万象ことごとく活動のうちに変現する。これを、『神通の力』というのである。だれが、どういう力を与えるのでもない。それ宇宙の万象自体が、あらゆる他の活動を縁として変貌自在するのが、宇宙の実相である」

戸田先生の諸法実相観が述べられています。先の法華経、天台、そして大聖人の御言葉と寸分もたがわない。よくよく味わい、会得していくべき言葉です。

遠藤 この戸田先生の言葉では、物質も生命も同じように扱っているように見えます

が、どう説明したらよいか少し困ります。仏法でいう「諸法」というのは、物質も生命も含まれるということは分かるのですが、通常の考えでは、両者は全く違うものですから。

名誉会長 大事な点だね。諸法とは現象と訳せる。仏法では、物質をも、固定化した

“もの”ではなく、生滅変化する現象、すなわち“こと”の次元で見ているのです。生命も同じく生滅変化する“こと”です。

“こと”というのは、私たちが普通、物を見る時のように「有る」と言つて固定化して見ると間違いになる。だからといって「無い」のでもない。「有」でもなく「無」でもない。しかし場合によつては、「有る」と言つてよい時もあるし、「無い」と言つてよい時もある。こう見るのを「中道」といいます。「有」「無」のいずれにも、とらわれないので「中道」です。ありのままに正しくとらえた「実相」と同じです。

遠藤 “もの”と“こと”という二つの次元を立て分けて考えると分かりやすいですね。戸田先生の言葉に出てきた空・仮・中の三諦にも応用できそうです。

物質でいえば、“こと”であつて“もの”ではないという真理（諦）を「空諦」といい、

しかし仮に「もの」として見ることもできるので「仮諦」といい、どちらにもとらわれな
いのを「中諦（中道）」という。天台は、この三つの面から総合的に諸法の実相を把握し、
欠けることがないことを「円融の三諦」と呼び、これをもって「実相」としています。
名誉会長 すべては「こと」であり、生住異滅、つまり生成し、安定し、変化し、消滅
していくのです。その一時の安定期の姿を、物質については仮に「もの」と言っているわ
けです。

須田 ニュートンの力学を中心とする古典科学は、「もの」中心の見方で成り立ってい
ます。例えば、物体という実在があつて、二つの物体の間に重力が働くというのがニュ
トン力学です。これが、多くの物理現象を見事に説明したので、生命についても「物質に
すぎない」「機械にすぎない」というような見方が支配的になりました。

名誉会長 ただ、そのような見方は、本来、科学そのものにはないはずだね。

遠藤 科学そのものではなく、科学信仰に由来するのだと思います。物事の一側面をと
らえて、すべてが「それにすぎない」と主張する態度を「還元主義」と表現する人もいま
す。全体を部分に還元し、部分観を全体観に押し広げようという誤った態度です。

齊藤 この「……にすぎない」という還元主義かんげんしゆぎの見方が、現代人の生き方に暗影あんえいを投げか

け、希望きぼうを奪うばい、無力感むりよくかんを増長ぞうちようしている一因いちいんになっていないでしょうか。

名誉会長 科学信仰しんこうに陥おちいらないためには、生命ぜんたいかんの全体観しめを示した真しんの哲学てつがくが必要ひつようでしよ

う。科学には本来ほんらい、部分観ぶぶんかんを部分観として示す節度せつどがあると思う。また、真実しつじつに迫せまろうと

いう要求ようきゆうが科学の根底こんていにはあるから、それまでの部分観が行き詰づまれば、それを打ち破やぶつ

て、より深く実在じつざいに迫る創造的な新理論しんりろんが発見はつけんされる。つまり「科学革命」がなされる。

須田 科学革命は、個人の創造的な力でなされるという研究けんきゆうもありました。

名誉会長 当然とうぜん、そういう面が大きいでしょう。人間生命こそ創造性の源みなもとですから。ア

インシュタインなどは、そのよい例れいだと思う。戸田先生は、来日らいにちしたアインシュタインの

講演こうえんを、牧口先生とともに聴きいたことを生涯しやうがいの喜びよろこびとされていた。

アインシュタインは自分の真理探究しんりたんきゆうの情熱じようねつを支えたものを「宇宙的宗教感覚かんかく」と表現ひようげんし

ています。それは、この宇宙を「二個の意味いみのある全体として体験たいけんしたい気持ち」であ

り、自然しぜんの世界や思考しこうの世界に、崇高すうこうさを感じ、驚おどろくべき秩序ちつじよを感じとる感覚です。彼

は、この「宇宙的宗教感覚」は、仏教に特に強つよく表現ひようげんされていると書いています。

アインシュタインは、こういう立場から、科学と宗教は対立するものではないと主張した。科学探究の「動機」が宗教性にあつただけではなく、科学の「結果」もまた、万物の妙なる法則に対して人間を謙虚な態度にさせる、と。

「この態度は、その語の最高の意味において、宗教的であると私には思われる。したがってまた、科学は宗教的衝動をその擬人主義という夾雑物から純化するばかりでなく、われわれの人生を宗教的精神によつて理解するのにもまた貢献するものであるように私には思われる」(「科学と宗教」。湯川秀樹監修、井上健・中村誠太郎編訳『アインシュタイン選集3』共立出版)

アインシュタインは、科学と宗教が対立するとすれば、その主因は人格神の概念にあると考えていた。彼の言う「擬人主義という夾雑物」は、人格神の概念のことです。

仏教のような「生命の法への謙虚な探究」は、彼の見方からすれば、科学的であり、同時に宗教的でもある。

仏法の立場から端的に言えば、仏法は生命の全体を対象にした総合知であり、科学は生命の「仮有」の面を対象にした「仏法の一部」とさえ言えるのではないだろうか。ゆえに

両者は、対立するものでは絶対にならない。一切世間の善論は皆これ仏法なのです。

戸田先生は「科学が進めば進むほど、仏法の正しさが証明されるようになる」と、よく言われていた。

もちろん、証明といつても、両者は次元も違うし、アプローチの仕方でも違う。科学の言うことは間違いないから、科学の支持する仏法も間違いない。科学の知見は日進月歩で変化しているし、そうした相対的な科学の知見によつて、仏法の絶対的な真理の真実性が左右されるものではありません。

ただ科学は、進歩すればするほど、仏法と見事に調和することが分かってきた。この相似性（アナロジー）が、現代にあつては、仏法の卓越性を類推させる強い動機になるということです。例えばアインシュタインの相対性理論は、「こと」中心の世界観に極めて接近したものだと思うが、どうだろうか。

斉藤 そうだと思ひます。相対性理論は、空間の三次元と時間の次元が融合した

「時空」という四次元の「場」において、すべての物理現象をとらえようとするものです。

それまで、ニュートンが打ち立てた古典力学では、「絶対時間」「絶対空間」といって、

時間と空間とは互いに独立に存在するものとしてきました。自動車に乗っている人と歩いている人とで時計が早くなったり遅くなったりするわけではないという、私たちが日ごろ抱いている感覚からも当然とされていたものでした。ところが、相対性理論の登場によって、高速で運動している空間ほど、観測者に対して時間が遅く経過するということになった。

いわば「時空不二」です。両者は切り離せない。双方の「関係(こと)」によって、双方の現れ方が決まってくるということです。

須田　また、量子というミクロの範囲に限っていえば、物体の運動量を正確に計ろうとすると、その物体の位置は正確に計れなくなるというように、計測者の存在が物体の運動に大きく関わるということが分かりました。

これはハイゼンベルクの「不確定性原理」と言われるもので、またしても、近代科学の中心軸にあつた「主観と客観の分離」という原則も打ち破られたのでした。「主客不二」ですね。観測とは、観測する側とされる側の「関係(こと)」の問題であるということになったのです。

名誉会長 “もの” 中心の科学が、分子から原子へ、原子から素粒子へと、宇宙を構成する「基本的要素」を探究した果てに見たものは、素粒子が「粒子」であり同時に「波」であるというパラドックス（逆説）であつた。

これによつて科学は、それまで固定的にとらえていた“もの”の世界を、実は“もの”自体の変化の様相や、“もの”と“もの”の関係性としてとらえざるを得ないことに気づいたのです。すなわち“こと”の世界です。また観測者と対象との相互関係も考えなければならぬ。

こうして現代物理学が描く世界像は、それまでの「無数の物質の集まり」から「無数の関係の織物」へと劇的に変化したわけです。この世界観は、まさに大乘仏教の洞察と共鳴する。

齊藤 アインシュタインによつて、物質はエネルギーが一時的に安定したものであることが分かりました。「物質・エネルギー不二」理論です。不二でありながら、必ずどちらかの形態をとる。不二であり而二です。

またエネルギーは「質量×光速²」に等しいことも分かりました ($E = mc^2$)。

光速速度（ c ）は秒速三十万キロメートルですから、わずかな質量（ m ）の物体から膨大なエネルギー（ E ）が出ることになります。

遠藤 それが後に、原子爆弾の開発に応用された――。

名誉会長 それは、アインシュタインの理論が独り歩きし、その理論が示唆していた「こと」中心の世界観が人々に理解されなかった悲劇と言えるのではないだろうか。

世界は限りなき「関係の織物」である――この見方が、物質にも生命にも人間にも徹底すれば、戸田先生が言われたように、一切はひとつの大いなる生命であり如来であると思われることができる。そして、それが自己自身の実相であるとも見ることができる。

原子爆弾のような破壊と分断のためにだけあるような兵器は、実相を覆う無明の産物にすぎない。元品の無明は第六天の魔王と現れる。戸田先生は、原子爆弾を使用する者は、誰であれ、悪魔であり、サタンであると宣言された。そこには、この尊き生命を破壊するものに対する、五体をうち震わせての、すさまじい怒りが込められていたのです。

ともあれ、「もの」から「こと」へという科学革命は、人類の思想を根底から変える衝撃力をもっていた。

それは、一次元いちじげんから言えば、分析知ぶんせきちが行きつくところまで行つた結果、分析知ではとら

えきれない広大な世界を垣間見たと言こゝろだいえるかもしれない。

そこからアインシュタインや、ハイゼンベルクらは、物理学ぶつり的真理がくてきしんりがその一部いちぶであるよ

うな、より大きな全体ぜんたい、究極きゆうきよくの実相じつそうについて思索しそくをめぐらしたのではないだろうか。

須田 分析知は、近代科学きんだいの強力な武器ぶきでした。現象げんしやうを観測かんそくしやすいように、物質ぶつしつを細

かく分割ぶんかつしたり、実相じつさいの複雑な現象を単純化たんじゆんかすることによつて自然界しぜんかいの法則ほうそくを発見はつけんしてき

ました。その際、現象を単純化したり、要素ようそごとに分割するということ、他の面を切り

捨すてるという傾向けいこうがあるわけです。いわば、関係し合いながら変化する諸法しよほう（現象）に即そく

して実相を見るのではなく、諸法（現象）をあえて固定化こていかしたり、諸法の一部を切り取り、

そこから抽出ちゆうしゆつされた法則を真理としたわけです。

遠藤 最近さいきんでは、そのような科学の在り方あに対して、科学の内部から反省はんせいが出ているよ

うです。その一つは、分析によつて知り得た知識ちしきは自然界のほんの一部にすぎないという

認識にんしきです。

科学の世界では、どんなに分析を重ねても、将来の現象を予測よそくできないことが、しばし

ば見られます。関係者の方には申し訳ないのですが、天気予報などはその典型で、なかでも長期予報などは「外れるのが当たり前」になっています（笑い）。

長期的な気象は、あまりにも多くの要素が複雑にからみ合って変化するので、従来の分析的なやり方では探究できないのです。

斉藤 最近言われている「複雑性の科学」という考え方も、新しい潮流の現れですね。

これまでの科学が、さまざまな現象の複雑性を取り除いて単純化することで明晰な認識を得ようとしたのに対し、「複雑性の科学」というのは、現象の複雑性をあえて切り捨てることなく、そのまま受け止めようとするものです。

現在、有名なのは米国ニューメキシコ州にあるサンタフェ研究所で、従来の生物学、数学、物理学などの学問領域の枠を取り払って、現象を総合的にとらえようとする研究システムをとっています。

須田 天候のほか、生態系、脳などは、数学的な解析やシミュレーションを寄せつけない複雑なシステムの代表例です。

なぜ、こうした自然現象では、単純性の科学が通用しないか。一つは、小さな変化が劇

的に大きな変化を生み出すからだとされています。いわゆる「バタフライ（蝶）効果」です。すなわち、アマゾンの熱帯雨林で一匹の蝶が羽をパタパタさせると、それが次々に連鎖的に物事を引き起こし、ついには地球規模の気象の変化が起きるというものです。

遠藤 「風が吹けば桶屋がもうかる」（爆笑）

名誉会長 そう。庶民の知恵は、たくまずして「すべてが関係している」という実相を突いているね。

須田 はい。しかも蝶が翌日、羽ばたいても、何ら天候に影響を与えないかもしれない。この不確実性が「複雑性の科学」の特徴の一つでしょう。

また、単純性の科学と複雑性の科学の違いは、コンピューターと人間の脳の能力の違いにもよく表れていると思います。コンピューターは単純な計算処理や記憶などは得意ですが、ちよつとしたエラーがデータに紛れ込んでいると、とたんにその能力は発揮できなくなります。

一方、人間の脳は、単純な計算や単純な情報を多量に記憶することなどには向いています。一方、少々のエラーが出ても対応できる柔軟性があり、多様な情報のなかから、必要な

情報じょうほうを瞬時しゆんじに取り出せる能力のうりよくももっています。どんな有能ゆうのうなコンピューターに将棋しょうぎをさせても、ちよつとしたアマチュアにも負まけてしまうことがあります。

名誉会長 なるほど。ちよつと概観がいかんしただけでも、現代の科学が、法華經しよほうぎやうの諸法実相しよほうじつそうと調和ちやうわしてきていることが分かるね。大切なことは、こうした志向性しこうせいを「一人の人間の限りかぎない尊貴そんきさ」の認識にんしきへと、リードしていくことです。

齊藤 人間にんげんを無氣力むきりよくにさせる科学でなく、人間に勇氣ゆうきを与あたえる科学であつてほしいですね。

名誉会長 そう。学問は人間に希望きぼうを与あたえなければならぬ。そうでなくて何のための知性ちせいか。

そのことば思い出おもこすのは、中国の厦門大学アモイの「平民学校へいみん」での魯迅ろじんの講演こうえんです。

遠藤 厦門大学といえは、昨年（一九九四年）、池田先生に名誉教授めいよきやうじゆの称号しやうごうが贈おくられました。

創価大学との交流こうりゆうも始はじまっています。先日しやうじつは、池田先生の肖像しやうざうのレリーフも届とどけられました。

須田 魯迅は、たしか厦門大学で教鞭きやうべんをとっていますね。短期間ですが。

名誉会長 そうだね。「平民学校」は、厦門大学の学生が貧しい子どもたちのために開

いた学校です。自分たちが教師となつて教えようとした。魯迅は、その開校式に招かれ、講演したのです（一九二六年十二月）。

初めに、大学の権威的な教授が登壇した。拍手はなかった。教授は、平民学校の意義について、こんなふうにしやべつた。

「この学校の平民に利益あること、例えば……例えば召使いが文字を知るとせば、手紙の配達はいたつは誤配ごはいがなくなり、主人は喜ぶ……」

とんでもない民衆蔑視みんしゅうべつしの発言だった。平民が勉強するのは支配者しはいしゃに喜ばれるためだといふのです。教授は魯迅の射いるような視線に出合つて、しどろもどろになった。

「……ええ、主人が喜び……」「かれを使うと、かれはめしにありつく……」。会場からは、嘲笑ちやうしやうが起こつた。彼は、すっかり慌あわてて、逃にげるように壇だんから下おりたという。ここで魯迅が立つた。

「わたしの言いたいののは、あなたがたはみな労働者・農民の子供です。貧しいために、勉強の機会を失うしないました。しかし、あなたがたの貧しいのはお金だけです。聡明そうめいさと知恵ちえではありません。あなたがた貧しい者の子供は同じように聡明であり、同じように知恵が

あるのです」

魯迅は、最前列で冷や汗をかいている教授と学長を一瞥した。そして、子どもたちに向かつて言った。

「あなたがたを永久に奴隷のように使える、そんな大きな権力をもつものはどこにもいません」「また、あなたがたを一生涯貧乏人にしておく運命などというものもありません」魯迅の声は一段と高くなった。

「あなたがたは決心するかぎり、奮闘するかぎり、かならず成功し、かならず前途があるのです」

会場は嵐のような拍手で揺れた（魯迅の廈門大学での講演の模様は、石一歌著、金子二郎・大原信一訳『魯迅の生涯』、東方書店）。

遠藤 心を揺さぶられる話ですね。

名誉会長 魯迅は、どんな境遇にあらうと、すべての人間が等しく、広大な可能性をもっていることを教えたかった。そして、その可能性を阻む、いかなる権力にも、運命にも、絶対に屈してはならない、そんなものは打ち返そうではないか、奮闘しようではない

かと訴うったえたのです。

斉藤 考えてみれば、釈尊しやくそんが「諸法実相しよほうじつそう」の法を説いた元意がんいも、そうした奮闘ふんとうを呼びかけるものだったのではないでしょうか。釈尊自身じしんが、その先頭せんとうに立って戦った。

方便品ほうべんぽんには「私は、仏眼ぶつげんをもつて六道ろくどう（地獄界じごくかいから天界まで）の衆生しゆじやうを見た。彼らは貧窮ひんきやうし、福運ふくうんも智慧ちえもなく、生死しやうじの苦悩くのみの険けわしき道に入はいって、絶え間なく苦しみ続けている……さまざま誤あやまった思想に深く染まり、苦を捨てようとしながら、そのことでまた苦しんでいる。こうした衆生のことを思うと、大悲だいひの心が起おこつてきた」（法華經一八五）趣意しゆいとあります。

名誉会長 「大悲」の「悲」とは、「同苦どうくする」ということです。ともに苦しむ「うめき声」が、その原義げんぎとされる。すべての衆生を、何としても苦悩の「鉄鎖てつさ」から解放かいほうしたい。そのために釈尊は悩み、戦ったのです。

方便品には「我濁惡世われじよくあくせに出でたり」（法華經一八七）とある。闘争とうそうへ踏み出す釈尊が、心に叫んだ第一声です。

偉人いじんは嵐あらしの中に立つ。乱世らんせに挑いどんでこそ偉大な人になるのです。そして偉人が嵐と戦う

胸中^{きようちゆう}には、次の世代^{せだい}への慈愛^{じあい}が海原^{うなばら}のごとく広がっている。

廈門^{アモイ}大学の学生^{アモイ}が、平民^{へいみん}学校の開校式の会場に向かう魯迅^{ろしん}に言った。「あなたのそばに
いると、ほんとうに大海^{たいかい}の傍^{そば}にいるのと同じように、氣持^{きもち}がすつきりします」。

「いや、ほんとうの大海は、見たまえ、あすこにある」。魯迅はそう言つて、元氣よく講堂に入つていく労働者の子どもたちを指差^{ゆびさ}したという（『魯迅の生涯』）。

遠藤 大海といえ、古来^{こらい}、法華經も「大海」に譬^{たと}えられました。

名誉会長 そう。大聖人は「大海の水は一滴^{いつてき}なれども無量の江河の水を納^{おさ}めたり、如意^{にょい}宝珠^{ほうじゆ}は一珠なれども万宝^{ばんぼう}をふらす」（御書一二〇〇^お）と仰^{おお}せになっている。

部分^{ぶぶん}に全体^{ぜんたい}が含ま^{ふく}れている。一人の存在^{そんざい}に、一切^{いっさい}の宝^{たから}がある。一人の行動から、無限^{むげん}の価値^{かち}創造^{そうぞう}のドラマが始まるのです。

齊藤 ホワイトヘッド（イギリス出身の哲学者^{てつがくしや}）も、自然^{しぜん}は「ものの集合^{しゆごう}」ではなく「で
きごとの連鎖^{れんさ}」であるとした哲学者ですが、こう言っています。

「環境条件^{かんきやうじやうけん}が許^{ゆる}す限^{かぎ}りの完成^{かんせい}を目指^{めざ}す——このようなものとしてのみ理解^{りかい}できるのが生
命である。そして、生命の目指す先は、すでに達成^{たうせい}された事実を常に超^こえている」（『観念^{かんねん}

の冒険』。つまり、生命は可能な限り、どこまでも完成を目指すというのです。すでに達成された現在を、常に乗り越えていこうとするのが生命なのだ。

名誉会長 そうかも知れない。生命は、物理学的な因果律に支配されるだけの単なる機械ではない。もちろん物質でできている以上、生命体に「機械の側面がある」のは当然である。しかし「機械にすぎない」のではない。

生命は本来的に、「価値を創造しよう」という要求をもっている。価値も「関係性」の概念ですが、「関係の織物」であるこの世界にあつて、常に「よりよき関係」すなわち「より大きな価値」を創造しようとしている。

より美しい織物（美）、より役に立つ織物（利）、より善なる織物（善）を織ろうとする。

この「創価（価値創造）作用」に、生命の大きな特色があることは確かだと思う。

その意味で、「戦い」こそが「生きている」証です。

「すでに達成されている現在」を常に超えていく——十界互具という実相から見れば、生命は、現在、いかなる姿をとっていても、今の自分を超えて最大の完成を目指そうとしている。

生命の本然の姿は、仏界という完成へと向かっているのです。「合掌向仏（一切衆生は根底で仏に向かつて合掌している）」です。

こういう実相を示しているのが諸法実相であると思う。ここに、いかなる生命もかけがえのない存在であることが示されているのではないだろうか。

この「法華経の心」を叫びきって戦われたのが日蓮大聖人であられる。近代においては、大聖人直結の牧口先生、戸田先生です。

今年（一九九五年）は、学会創立六十五周年。一人一人の民衆に「あなたのかげがえのなさ」を教え続けた六十五年であつた。そのために、民衆蔑視の勢力と戦い続けた六十五年であつた。

牧口先生が獄死された後、戸田先生は獄中であつて、一詩を詠まれた。

「如意の宝珠を我もてり

これでみんなを救おうと

俺の心が叫んだら

恩師はニツコと微笑んだ」

須田 池田先生が、小説『人間革命』（「一人立つ」の章）で紹介してくださいました。

名誉会長 そう。「如意の宝珠」とは一念三千であり、御本尊です。「宝珠即一念三千な

り」（御書七四一頁）と御書にはある。

一念三千の信仰とは、自分一人いれば、すべてを変えてみせるという大確信ともいえる。「一人立つ」信心です。

この六十五周年から、いよいよ「一切を担って立つ」本格派の人材が躍り出る、本門の時代に入った。目指すは、二〇〇五年の創立七十五周年です。

斉藤 七十五周年——妙法の「七字五字」に通じますね。

名誉会長 一人一人が、妙法の無限の力を満身に漲らせて立つ時代です。その一人の中に、学会という全体がある。その一人の中に、二十一世紀がある。

ゆえに一人ももれなく、「私はこの世に、このために生まれてきたのだ」という、かけがえのない使命を、事実の上で果たし切ってほしいのです。

その「戦う心」「戦い続ける心」「自体が、すでに「勝った心」であり、本門の十年を絢爛と飾りゆく原動力なのです。

（法華経の智慧 第二巻了）